

飯田町遺跡

1992

石川県立埋蔵文化財センター



飯田町遺跡

石川県立埋蔵文化財センター

例

1. 本書は石川県珠洲市飯田町地内に所在する、飯田町遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の発掘調査は、道路改良（街路）工事（3、4、2 飯田島田線）に伴うもので、石川県珠洲土木事務所（県都市計画課）の依頼を受け、石川県立埋蔵文化財センターが実施した。
3. 現地調査は平成元年5月1日から開始し、同年11月30日をもって終了した。発掘調査対象面積は約4,800m²である。
4. 発掘調査は平田天秋の指導の下、本田秀生が担当した。また、調査全般にわたって、加賀真樹（珠洲市教育委員会）、宮下栄仁、田畑弘、浦元英俊（以上石川県立埋蔵文化財センター調査員）、垣地正雄、屋保良孝、田端昇作、梅林幸治、鹿野二郎、稲本幸吉、矢鋪金作、惣畑久平、山崎宗吉、北川政栄、蔵元実、濱塚寿男、鶴島善明、谷内田澄雄、慶祐良造、谷内田友吉、鍋島清一、新敏子、鹿野弘美、鍋島のぎ、杉浦和子、東玉喜、森田きよ子、田畑きくい、石山たみ、道下よきゑ、三谷蘭子、亀田二三、小谷内百合子、河原フユ、泉多美代、山口稚玄、鍋島正、鳥毛柁、真智富子の協力、指導を受けている。
5. 本遺跡の出土品整理作業については、社団法人石

言

- 川県埋蔵文化財保存協会に委託した。
6. 本書はIを三浦ゆかりが執筆し、その他の執筆と編集は本田秀生が行った。また、本書の作成にあたっては、大藤雅男（石川県立埋蔵文化財センター調査員）、竹田倫子、伊藤康子、藤重啓、網谷真佐美、中島恵理子の協力、指導を受けている。
 7. 調査の実施、および報告書の作成にあたり、石川県立埋蔵文化財センター職員他、次の方々、および諸機関よりご協力とご教示を得た。記して謝意を表す。
檜田誠、春日真実、坂井秀称、西山郷史、藤田邦雄、和島俊二、(株)国際航業、珠洲市役所、珠洲土木事務所、珠洲焼資料館
 8. 本書の遺構、遺物挿図の表示は次のとおりである。
 - (1) 挿図の縮尺は図内に表示した。
 - (2) 方位は座標比を示す。
 - (3) 水平基準線は海拔高で示した。
 - (4) 写真図版の遺物の縮尺はおおむね3分の1である。
 9. 本調査で出土した遺物をはじめ遺構・遺物の実測図、写真等の資料は、石川県立埋蔵文化財センターが保管している。

目 次

I 遺跡の位置と環境	1
II 遺跡調査の概要	6
1. 調査に至る経緯	6
2. 調査の経過	6
3. 基本層序と遺構の概要	9
III 遺構と遺物	16
1. 掘立柱建物	16
2. 井戸	30
3. 土坑	57
4. 埋甕	66
5. 溝	67
6. 包含層出土の遺物	71
VI まとめ	85

I 飯田遺跡の環境

1 位置と地理的環境

飯田町遺跡は、石川県珠洲市飯田町に所在する。珠洲市は能登半島の先端に位置し、三方は日本海に面する。珠洲市の地形を概観すると、標高468mを測る宝立山を中心とする宝立山地が市の北西部を占める。その東南側をふちどるように奥能登丘陵が連なり、平床台地に代表される海岸段丘がみられる。一方、内浦側では海岸平野がやや広く発達し、金川、若山川、鶴飼川の流域では沖積平野が広がる。しかしその規模は小さく、沖積層の厚さも一般にうすいようである。

さて、遺跡が所在する飯田町は、若山川の河口に位置する。若山川は珠洲市最長の河川で、宝立山に源を発し、市のほぼ中央を西から東へと流れ、若山町鈴内で大きく南に向きを変え、飯田町を南流し富山湾に注ぐ。発掘地点は、その若山川の右岸飯田町北部に位置する。小字名は「西寺町」である。北は城山と呼ばれる飯田城址に接し、西は飯田町の産土神が鎮座する春日山が、谷をはさんで城山と対峙している。また東には、市街地の向こうに若山川が流れ、南には市街地をはさんで海岸線が広がる。発掘地点は、現海岸線とは約400mをへだてる。

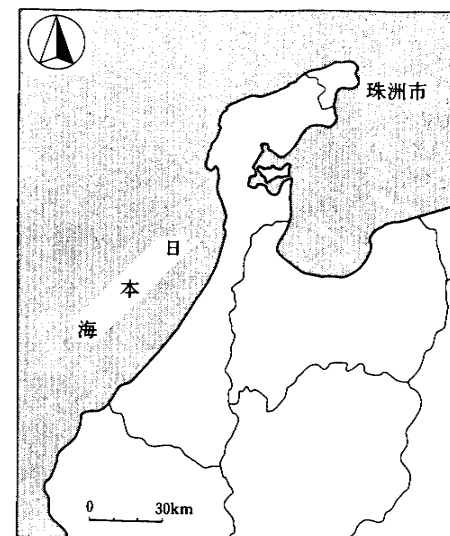
若山平野は、うすい沖積層よりなり、飯田町市街地あたりでは、地表下20mのところ⁽¹⁾に沖積層の基底がある。土層は、一部に礫をはさむ砂層からなり、地下水利用のための条件は極めて悪い。

2 歴史的環境

珠洲市は半島先端部に位置するため、遺跡の分布が少ない地域のように思われてきた。しかし近年の石川考古学研究会等の調査により、多くの遺跡が存在することが明らかになった。晩期旧石器時代から縄文時代草創期のものと思われる尖頭器を出土した、蛸島町雲津、若山町井林をはじめとして、珠洲市における縄文時代の遺物包含地は、現在30数ヶ所を数える。また弥生時代の土器片も、高波フルヤ遺跡をはじめとして数ヶ所で確認されている。しかし古墳時代になると、珠洲市域の遺跡の数はさらに増加する。

昭和50年の珠洲市史編さんにかかわる分布調査では、珠洲地域で198基にもものぼる横穴墓が確認されている⁽²⁾が、このうち大半は若山川中流域に集中している。また、昭和57、58年の石川考古学研究会の古墳群分布調査では、珠洲地域で150基もの古墳が発見され、古墳分布の稀少地域との理解を変える結果となった。しかも古墳のほとんどは若山川左岸に集中し、鈴内山岸から経念地区では、大型の円墳や方墳を含む100基もの古墳が確認されている。このように、若山川流域の丘陵部

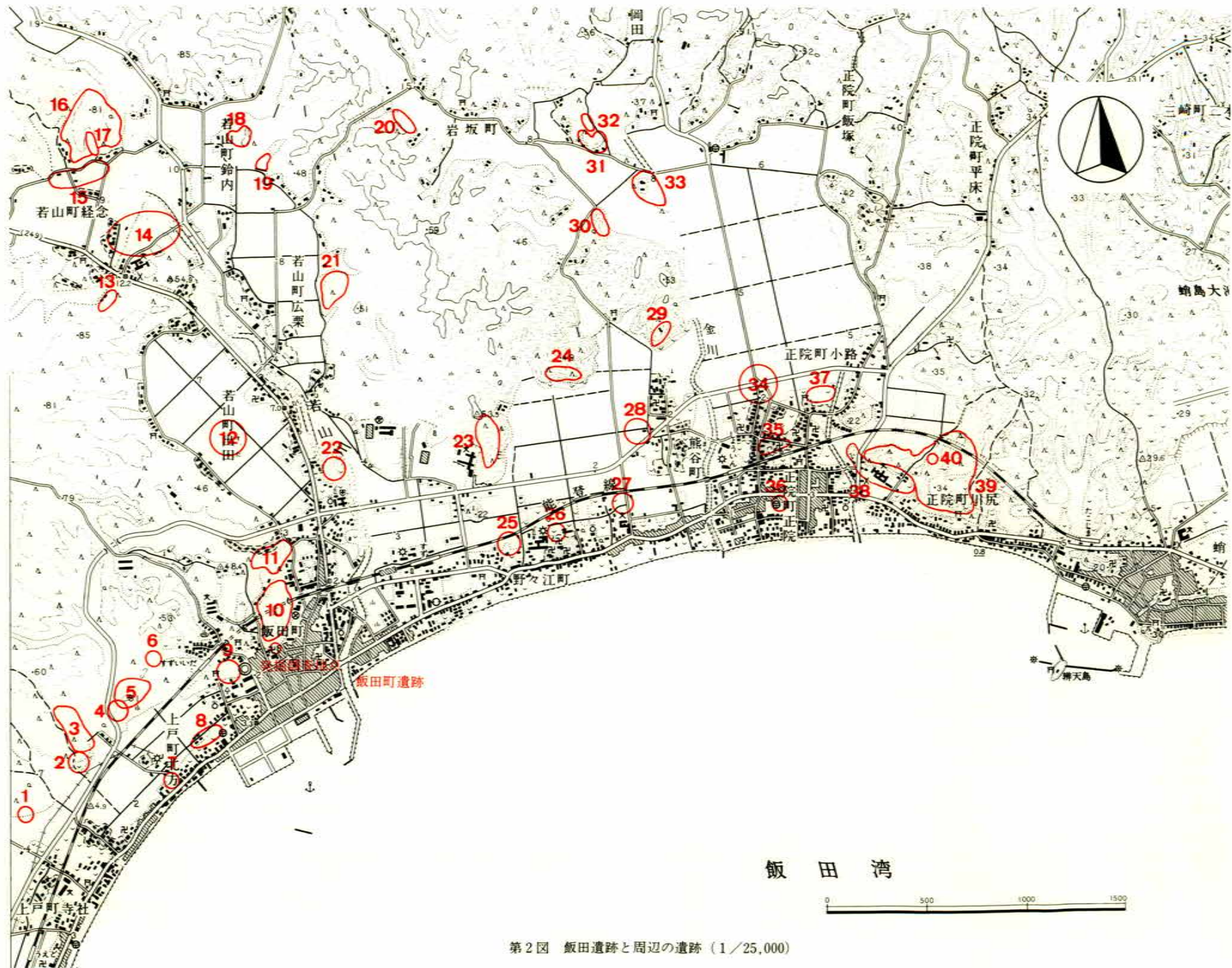
に古墳や横穴墓が集中するのは、若山平野を生産基盤としていた有力者が流域に集落を形成し、造墓を行ったものと思われる。古墳時代の遺跡の分布をみると、昭和57、58年の古墳群分布調整で、鈴内古墳群の間の谷に、古墳時代の集落遺跡が確認されている。また平成3年には、石川県立埋蔵文化財センターが、ほ場整備に伴う分布調査を行っており、経念古墳群が所在する丘陵直下の水田下に、古墳時代の土器片を確認している。その他上戸町北方の海岸平野では、古墳時代のものと思われる製塩土器を確認している⁽⁵⁾。



第1図 珠洲市の位置 (1/3,000,000)

さて、この若山川の流域は、養老2年(718)5月に律令制のもと、能登国珠洲郡若山郷として編成された。それ以前珠洲郡は、越前国珠洲郡であったが、新しく羽咋・能登・鳳至とともに能登国とされたことが、『続日本紀』に記されている。古代の珠洲郡には、日置・草見・若倭・大豆の4郷と余戸がおかれているが、現地域との比定が可能なのは、若山郷だけである⁽⁶⁾。すなわち若倭郷は、若山川の下流域に比定される。上戸町北方の北方日光社B遺跡や、寺社の北方山岸B遺跡は、奈良時代から平安時代の遺物包含地であることが確認されている。本遺跡からも、平安時代の遺構や遺物が検出されており、今後も若山川下流域で、律令期の遺跡が発見されるものと思われる。また珠洲郡の郡衙は、地名や方格地割が残ることから、正院に所在したとみる説がある⁽⁷⁾。

平安時代末期になると、珠洲郡では、能登国司である源季兼による私領化が進み、康治2年(1143)にはその子の季兼が、崇徳上皇の後藤原聖子にこの所検を寄進し、若山庄が成立した。その寄進状によると、若山庄の庄域は、「南は珠洲正院の真脇村を限る。北は同院の八条袋を限る。西は町野院境の山を限る。東は海を限る。」とある。この北端域である珠洲正院八条袋の位置が確定できないので、庄域も断定できないが、現在の珠洲郡内浦町を含む珠洲市域の大半を占めていたものと思われる。また、承久3年(1221)に作成された能登国大田文によれど、若山庄は公田数500町を誇る能登国最大の庄園であったことがうかがえる。この広大な領域をもつ若山庄は、中世において、九里川尻・松波両川流域の木郎郷、鶴飼川流域の直郷、若山川下流域の飯田郷と、若山川上・中流域の若山郷及び、内浦に面した西海郷の四郷一浦から構成されていたとされる⁽⁸⁾。



第2図 飯田遺跡と周辺の遺跡 (1/25,000)

第1表 周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	現況	種別	時代	備考
1	北方山岸B遺跡	珠洲市上戸町寺社	平地・畑地	包含地	平安	土師器出土
2	北方池の下遺跡	" " 北方	台地・水田	"	縄文	磨製石斧、土器片出土
3	上戸大池古墳群	" " "	丘陵・山林	古墳	古墳	
4	北方池の下B遺跡	" " "	台地・水田・畑地	包含地	"	土師器片出土
5	上戸陣ヶ平古墳群	" " "	丘陵・山林	古墳	"	円墳5基
6	日光社遺跡	" " "	平地・畑地	包含地	"	
7	北方遺跡	" " "	"	"	"	須恵器・製塩土器出土
8	北方日光社B遺跡	" " "	"	"	平安	
9	北方大門口遺跡	" " "	平地・水田	"	縄文	磨製石斧、土器片出土
10	飯田城跡	" 飯田町	山地・山林	城跡	中世	
11	飯田横穴群	" 若山町出田	丘陵・山林	古墳	古墳	横穴2基(1号横穴崩壊)
12	出田A遺跡	" " "	水田	包含地	弥生	弥生土器出土
13	井林遺跡	" 若山町中田	平地・農道	"	縄文 草創期	石槍単独出土
14	落合御坊跡	" " 経念	平地・水田	寺院跡	中世	
15	経念A遺跡	" " "	水田	包含地	古墳	須恵器出土
16	経念古墳群	" " "	丘陵・山林	古墳	"	古墳60基以上(円墳・方墳を含む)
17	経念横穴群	" " "	山腹・山林	"	"	横穴2基
18	鈴内山岸古墳群	" " 鈴内	丘陵・山林	"	"	古墳10基以上(円墳・方墳を含む)
19	鈴内山岸遺跡	" " "	"	包含地	"	
20	岩坂藤瀬山横穴群	" 正院町岩坂	"	古墳	"	横穴4基
21	広栗向山遺跡	" 若山町広栗	台地・山林	包含地	縄文・ 古墳	打製石斧単独出土
22	出田有政遺跡	" " 出田	平地・水田	"	古墳	須恵器瓦泉、土師器出土
23	野々ミョウケン山古墳群	" 野々江町	丘陵・山林	古墳	"	円墳5基以上
24	野々江ハゲノマエ横穴群	" " "	台地斜面	"	"	横穴25基
25	野々江島田遺跡	" " "	平地・畑地	包含地	"	土師器出土
26	野々江妙珠寺遺跡	" " "	平地・社地	"	"	須恵器瓦泉出土
27	野々江杉の木遺跡	" " "	平地・畑地	"	"	土師器出土
28	熊谷神社遺跡	" 熊谷町	平地・山林	"	"	"
29	熊谷羽黒山横穴群	" " "	山腹・山林	古墳	"	横穴2基
30	岩坂向林横穴群	" 岩坂町向林	丘陵・山林	"	"	横穴7基
31	岩坂塚亀横穴群	" " 塚亀	台地斜面	"	"	横穴10基
32	岩坂塚亀古墳群	" " "	丘陵・山林	"	"	円墳4基
33	岩坂三百刈遺跡	" " 向林	平地・宅地	包含地	"	
34	正院小路遺跡	" 正院町小路	畑地・火田	"	平安 ~中世	土師器・須恵器・珠洲焼出土
35	正院興福寺裏畑遺跡	" " "	平地・社地	"	古墳	
36	正院館薬師遺跡	" " 正院	平地・畑地	墳墓	中世	五輪塔、板碑、珠洲焼出土

番号	遺跡名	所在地	現況	種別	時代	備考
37	正院寺町遺跡	珠洲市正院町小路	平地・社地	包含地	古墳	弥生土器出土 珠洲焼、近世陶磁器、 中国陶磁器出土
38	正院大運寺畑遺跡	" " 川尻	平地・畑地	"	弥生	
39	正院川尻城跡	" " "	台地・畑地	城跡	中世	
40	黒滝経塚	" " "	山腹・畑地	経塚	"	

珠洲で生産された中世陶器である珠洲焼の窯跡は、現在20基が確認されているが、中世の若山庄域に大半が所在する。とくに竹中川から鶴飼川流域の上戸町・宝立町地内に、窯跡のほぼ4分の3が集中し、初期から末期のものまで確認することができる。このことは直郷が、珠洲焼の生産の拠点であったことを示している。しかも直郷には、若山庄の領家である日野家の祈禱所に指定された法住寺が所在する。建久8年(1197)の法住寺文書によると、日野家が法住寺境内の樹木伐採を厳禁したことが記されている。また、法住寺境内にも3基の窯跡が確認されることから、日野家や法住寺が珠洲焼の生産に密接に関わっていたことが推測される。

ところで珠洲焼の編年は7期に区分され、12世紀後半頃(I期)寺社カメワリ坂で生産が始まり、13・14世紀代(II~IV期)に最盛期を迎えたものとされている⁹⁹。この頃珠洲焼は、南は北加賀から北は北海道南部にまで運ばれ、北東日本海域に、一大商圈を築いていたことが明らかにされている。その後15世紀(V~VI期)になると生産は衰え、16世紀前半頃(VII期)に珠洲窯は廃絶したとされている。本遺跡からも珠洲焼は多数出土しており、I期からV期に至るすべての時期のものが存在する。また、井戸側として珠洲焼の甕が使用されており、遺跡の年代を知る指標となっている。

さて、本遺跡が所在する飯田の名が文献に初めて見えるのは、応永20年(1413)3月9日のことであり、恒俊本光寺山田畠置文に「飯田のかう(郷)のさかい八道を限」とある。このことは、古代において珠洲郡若山郷とされていたこの地域が、中世には若山庄飯田郷となったことがうかがえる。本遺跡の西の春日山に鎮座する春日神社は、弘長元年(1261)に桂原伊勢守が再興したと伝えられていることから、中世には飯田郷に所在していたものと思われる。春日社は、藤原一門である若山庄の本家九条家・領家日野家の氏神であることから、大和春日社の分霊を若山庄飯田郷の鎮守として勧請したと推測される。

また、本遺跡の北に接する飯田城址は、昭和60年の石川考古学研究会による城館跡調査で、中世の城郭跡であることが確認された¹⁰⁰。調査の結果、主郭と推定される最高部の二つの郭をはじめとして、堀、あるいは堀切りと思われるものも3ヶ所で認められている。また、井戸跡と推定される陥没箇所も認められ、湧水が

みられるようである。飯田城の城主については、越後の上杉謙信の家臣である長与一景連、在地土豪とみられる飯田与三右衛門、畠山氏の家臣遊佐孫六の三人の名前が伝えられている。本遺跡の南に接する西勝寺は、西勝寺系譜によると、長享2年(1488)に念仏道場になる以前は真言宗の寺で光福庵と称しており、大壇那の飯田城主から寺領300石が寄進されている。本遺跡と飯田城址との関連については、飯田城主やその構築時期などを明らかにした上で検討すべき課題である。

また、本遺跡の東方約3kmに位置する正院川尻城跡は、昭和59年から61年にかけて、珠洲市教育委員会が詳細な分布調査を実施している。調査の結果、城内の縄張りとその範囲が確認されるとともに、空堀などの構造が明らかになった。中でも第三の郭を区画する南北の空堀は、深さ5m以上に達する段掘り箱形の大規模なもので、堆積土層の観察によって、改築が行われていることが認められている。このことは、正院川尻城の城主を考える上で、重要な示唆を与えた。

その他、正院郷の中世遺跡として、正院町に所在する正院館薬師遺跡がある。館家裏の一画に、一石五輪塔を含む数10基もの五輪塔や、館薬師として崇拝されている3基の板碑をはじめとして30基近くの板碑が存在している。五輪塔はその塔形などから、室町中期から末期にかけての造立とされている。

註

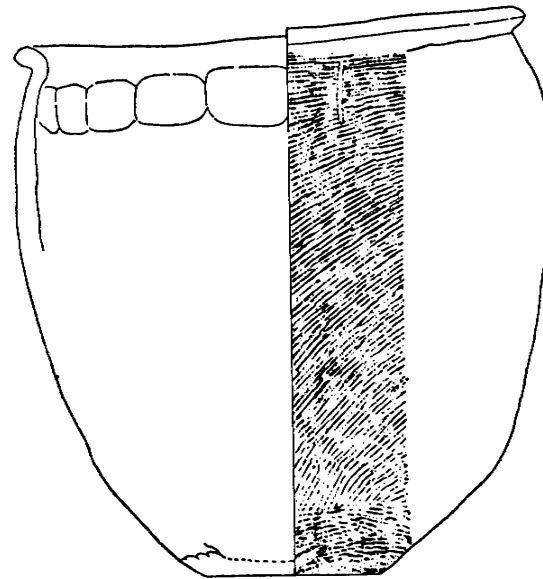
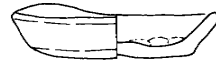
- (1) 粕野義夫・平山寅松「地形と地質」『珠洲市史 自然編』 珠洲市史編さん専門委員会 1976。
- (2) 田嶋明人「珠洲地域の横穴群と構造」『珠洲市史 考古編』 同上。
- (3) 田嶋明人「珠洲市域の古墳群分布調査」『石川考古』第148号 石川考古学研究会 1983。
- (4) 1991年に石川県立埋蔵文化財センターが分布調査を実施。
- (5) 註(4)に同じ。
- (6) 門脇禎二「珠洲と古代国家」『珠洲市史 通史編』 珠洲市史編さん専門委員会 1976。
- (7) 註(6)文献に同じ。
- (8) 東四柳史明「中世の珠洲」『珠洲市史 通史編』 珠洲市史編さん専門委員会 1976。
- (9) 吉岡康暢「珠洲焼から越前焼へ」『日本海と北国文化』 小学館 1990。
- (10) 吉岡康暢「総論 珠洲古陶」『珠洲の名陶』 珠洲市立珠洲焼資料館 1989。
- (11) 註(8)文献に同じ。
- (12) 平田天秋「飯田城」『石川県城館跡分布調査報告』 石川考古学福究会 1988。
- (13) 浜野伸雄・東四柳史明・平田天秋『正院川尻城跡』 珠洲市教育委員会

1987。

- (14) 櫻井甚一「珠洲の歴史考古資料」『珠洲市史 歴史考古編』 珠洲市史編さん専門委員会 1976。

参考文献

- 若林喜三郎・高澤裕一監修『石川県の地名』日本歴史地名大系17 平凡社 1991。
『珠洲市史 考古編』 珠洲市史編さん専門委員会 1976。
『珠洲市史 通史編』 同上。
森田平次『能登志徴』 石川県図書館協会 1938。
児玉幸多・坪井清足監修『日本城郭大系 第7巻』 新人物往来社 1980。



第3図 飯田町地内出土遺物 (上1/3・下1/6)

II 遺跡調査の概要

1. 調査に至る経過

都市計画道路（3、4、2）飯田島田線は、のと鉄道珠洲駅前交差点から、鉄道に並行し南走する（第4図参照）。昭和橋で、若山川を渡り国道249号と交差し、飯田町北方の丘陵（通称城山）の裾部をかすめ、珠洲市役所の裏を抜け、上戸町北方の北陸電力飯田変電所手前で左折し、国道249号に接続する。昭和37年ごろに計画され、昭和48年に認可を受け、部分的に工事を進めながら、本遺跡が確認されるまでに市道122号より北東はすでに完成されていた。

昭和62年に石川県立埋蔵文化財センターが珠洲土木事務所の依頼を受け、路線内の埋蔵文化財分布調査を実施した。分布調査の対象となった区間は、珠洲市役所前の道路と交差する地点から、市道122号と交差する地点までで、幅16m、延長約350mである。設けられた13の試掘孔の内6つから遺物が出土し、西勝寺の裏手から市道122号までの延長約280mの区間において埋蔵文化財の存在が確認された。また、市道122号から南西の約60mについては路盤工事により包含層が削平されていることも確認されている。

昭和63年には諸般の事情により発掘調査は実施されなかった。同年8月、珠洲商工会議所、飯田町商店街協同組合から石川県立埋蔵文化財センター、石川県教育長あてに発掘調査の早急な実施を願う陳情書が提出されている。これによれば、都市計画道路の早期完成により、商店街再開発と過疎からの脱却をめざすとし、この工事の遅れは、若山川改修工事にも影響を及ぼすものであり、道路改良工事区域内の遺跡発掘調査の早急な実施を願うとされている。

平成元年3月10日付けで珠洲土木事務所から本遺跡についての発掘調査依頼が提出され、これを受けて石川県立埋蔵文化財センターは、同年5月から12月上旬

までの予定で発掘調査計画をたて、5月上旬までに準備を終え、5月15日から現地での発掘調査を開始した。

2. 調査の経過

4月中旬ごろから発掘調査の準備を行う。発掘調査区域は、幅16m、延長約280mであり、一度に全域の調査を実施することは不可能と考え、2つの地区に分け発掘調査を行う予定で計画をたてた。

4月下旬に現地を確認し、珠洲土木事務所との打ち合せを行った。まず、幅16mの調査対象区であったがすでに片側、一部両側に道路側溝が埋設されており、16mの幅では調査ができないことが確認された。また、調査地内には水道管が埋設されており、その移設等の関係から、2分割の調査は事実上不可能で、調査区を3分割して発掘調査を実施せねばならないこととなった。その他、作業員の手配や調査区内の樹木の伐採等を珠洲土木事務所にお願ひし、現地での調査開始を5月15日とした。

5月15日より重機による表土除去作業を開始した。最初の調査区は西勝寺横の道路から東側の次の道路と交差する区画とし、城山裾を走る道路下には水道管が埋設されているため、今回は対象外とした。このため調査区の東側では徐々に幅がせばまることとなった。

表土除去はこの幅のせばまった地点から開始し、西へと進めていった。延長約80m、約900m²ほどの面積であったが、表土、客土および丘陵の崩落土と思われる土が50~90cmほど堆積しており、0.8m³、0.4m³のバックホーを各1台使用し、5日間の時間を要した。排土はすべて搬出している。この段階では溝状の遺構が確認されたのみで、遺物の出土もそう多くなかった。また、厚い表土等におおわれながらも遺物包含層は削平された部分がかかりあり、攪乱等も多い。

5月23日までに機材搬入等を終了し、作業員を導入して包含層の掘り下げに取りかかる。表土除去とは反対に調査区の西側から始め東側へと進めていった。作業員は珠洲市教育委員会の御協力で30人を越える人数

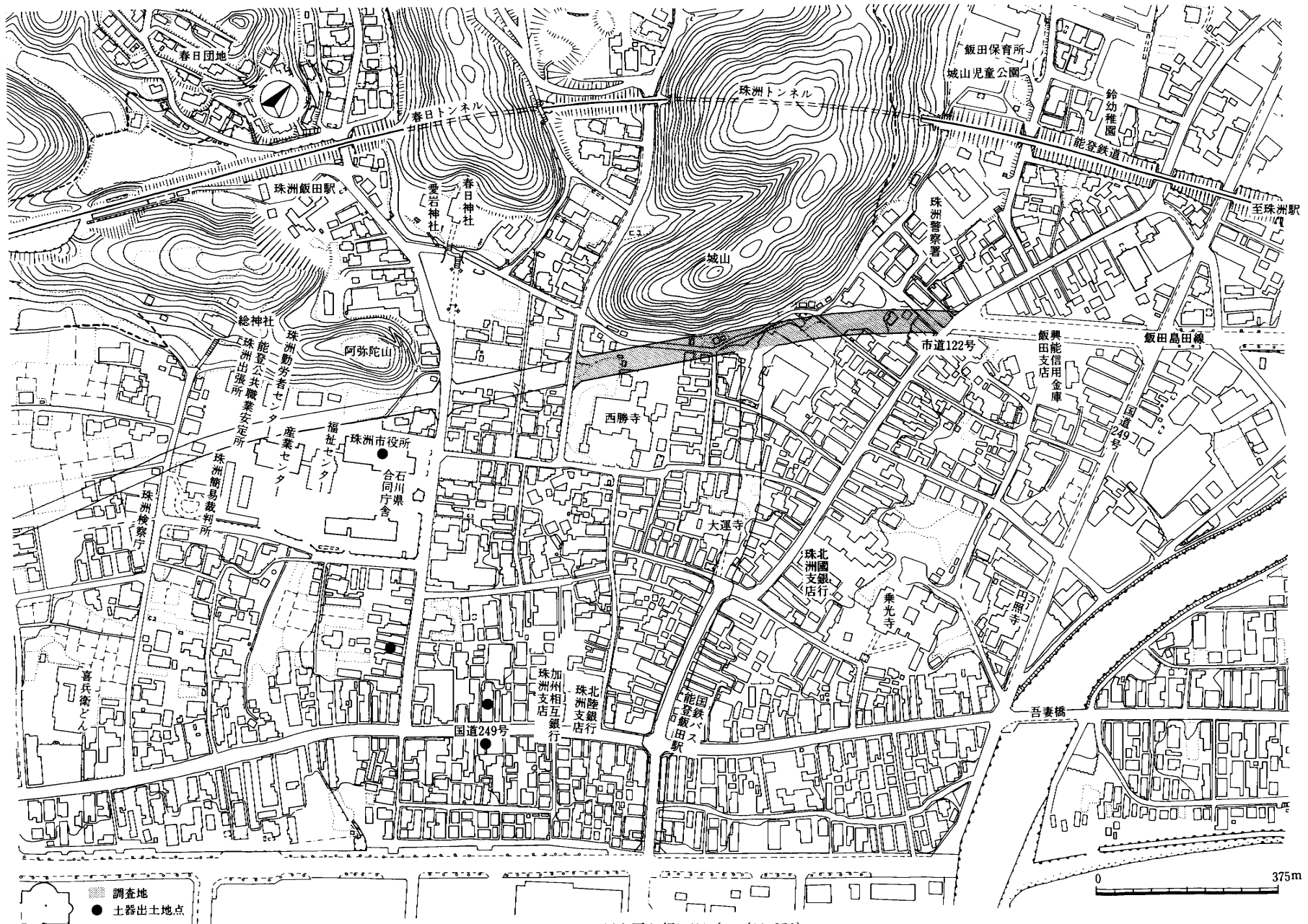
が集まり、天候に恵まれたおかげで順調に進んだ。6月1日から長期研修生の加賀の参加があり、6月の第1週までにはほぼ遺構検出を終了している。A区では大溝、B区では畝溝と多数の柱穴、C、D区では多数の溝が確認された。また、C区南壁にかかって珠洲焼大甕が直立した状態で検出されている。

遺構検出はベース面である黄灰色砂層の上面で実施した。遺構覆土は、黒色土、黒色土に丘陵崩落土のブロックを含むもの、灰色土に丘陵崩落土ブロックを含むもの等が認められた。この内、灰色土に丘陵崩落土ブロックを含む土層は、客土あるいは攪乱層との判別がむずかしく、この時点では近代以降の所産という認識であった。

6月6日からは遺構の掘り下げに取りかかる。6月中旬からは雨にたたられ、現場の排水作業を繰り返しながら遺構の掘り下げを進めていった。ベース面が砂層であり、掘り上げた遺構は大きな雨が降るとくずれて変形していった。これに対しては、土のうをつめるなどの対策が考えだされたが、柱穴はすでに400近くまで検出されておりこの様な方法は不可能であった。結局成すすべもなく崩落にまかせざるを得なかった。

7月に入りやや天候が回復し、遺構の掘り下げも急ピッチで進んだ。10日までには遺構掘り下げも終了し、航空測量の準備に取りかかる。15日には第1回の航空測量を無事終了している。この最初の調査区（第1調査区とする。）では、井戸4基、土坑9基、柱穴状の穴約400、溝70条以上が検出されている。井戸は樋を井戸側に使用したもの、割り抜き材を用いるもの、曲げ物を重ねるものなどがある。溝は畝溝と考えられるものや、居住域を区画するもの等さまざまであるが、現在の家や道路に平行、直交の方向をとる物がほとんどで、古代より町の構造がほとんど変化していないことをうかがわせる。

遺物は古代と中世の物が認められるが、中世の物が多い。青磁、白磁等は少なく、また、加賀地方で見られる様な非クロ整形の中世土師器がほとんど見あた





第5図 遺構の配置と周辺 (1/2,500)

らず独自の様相を示しそうに思われた。

航空測量後は井戸掘り方の掘り上げを行い、次調査区の表土剥ぎに取りかかる。また、飯田町西寺町の祭事の為、調査区の東端を埋めもどした。

今回の調査区(第2調査区とする。)は第1調査区の東から1本東方の道路と交差する部分で延長約80mである。また、水道管の移設が9月上旬までに終了し、第1調査区横の道路部分についても調査を実施した。面積は約1,500m²である。

8月中は天候に恵まれ、調査は順調に進んだ。G区までは遺構が南に片寄り、中世段階には丘陵が張り出していたものと思われる。H区の76号溝から東方はやはり多数の柱穴、溝が確認された。

9月に入り雨にたたらははじめた。とくに前半は雨が多く排水作業の続く毎日であった。9月も下旬に入ると天候が快復し、10月になると青天続きで調査も快調に進んだ。第1調査区横の道路下には、現道と同様な方向の溝が検出され、これに切られる様な形で樋を水溜に使用した13号井戸が確認された。

10月中旬までに遺構の掘り下げを終え、26日には第2回目の航空測量を実施した。また、10月中旬に次調査(第3調査区とする)の表土剥ぎを実施している。

第2調査区では井戸5基と多数の溝、柱穴様の穴を検出した。井戸は珠洲焼の甕を水溜に用いたもの、曲物を水溜に用いたものなどがある。溝は第1調査区の様相と同じであるが、調査区に斜行する溝が確認されている。いずれにしても、現在の町並みと同じ様な方向であることに変わりはない。

遺物については第1調査区と同様である。ただ、古代でもやや古手の物が出土したり、製塩土器が目につくようになる。また、H区の76号溝から舟形木製品が出土している。

第3調査区はほとんどが路盤工事により削平を受けている。とくに東側は著しい。延長は約70m、面積は約800m²である。北側は現道により調査のできなかった部分もあるが、遺構は攪乱等により削平されている

ことを確認している。延長約70m、面積は約800m²である。

削平を受けていることもあって遺構検出は短期で終了し、10月下旬には遺構の掘り下げを開始する。11月の前半は再び雨模様の日が続くものの、調査区が浅いため排水は遺構のみとなり、多少楽になる。調査区東端では、市道122号に平行する落ち込みが検出された。

中旬には一度遺構面が白くなるほどのあられが降るが、このころには遺構はほとんど掘り上がる。21日には第3回目の航空測量を実施し、23日には現地説明会を行った。30日までに機材等の搬出を終え、現地作業はこの日で終了となった。

第3調査区では大形の掘立柱建物1棟、井戸6基、溝数条、土抗、柱穴が数基検出された。削平の為に遺構密度は低い。井戸はH区でややまとまって検出されている。

遺物では、底部にへら切り痕を残す中世土師器が出土している。また、17号井戸覆土から、中形の珠洲焼甕1個体が出土している。古代の遺物は調査の北東端の落ち込みを除いてほとんど見られなくなる。

3. 基本層序と遺構の概要

調査地は通称城山という丘陵の側面裾をかすめる位置にある。道路敷ゆえの長狭な調査区であり、微地形の変化はとらえづらいつののだが、調査地区内では丘陵に最も近づくE、F区付近が最も高く、両側へわずかな傾斜を持つ。また、丘陵側が高く、飯田湾側が低い。

飯田町市街地を見ると市道122号東側で、比高1～2mの段差が若山川に並走する様に続き、また、南側では、国道249号から20～30mの地点に傾斜の変換点が海岸線に平行して続いている。後述する様に西端はつかみきれないが、遺跡はこういう範囲に広がっていると思われる。

第8図に基本層序を示した。2A区南壁の一部分である。多少の変位は認められるが、削平された第3調査区を除いて、全調査で同様な推積が確認される。遺

物はIII層からV層に含まれる。基本的には、III、IV層が中世、V層が古代以前の遺物包含層である。II層は丘陵崩落土主体土で近代(一部近世を含むかも知れない。)から現代の遺物を含むが、III、IV層も共に丘陵崩落土である黄灰色土ブロックを混じえており区別づらく、第1調査区の調査途中までは同一層と考えていた。また、V層黒灰色砂質土は古代以前としたものの、部分的には、黄灰色土ブロックを混じえ、中世の遺物を含む。遺構覆土ではIV層、V層の判別ができない物が多い。VI層は黄褐色の砂層で、調査区内ではVI層上面から約2mほど、小礫層を狭みながらつづくことを確認している。約1mほど深さで湧水がはじまる。

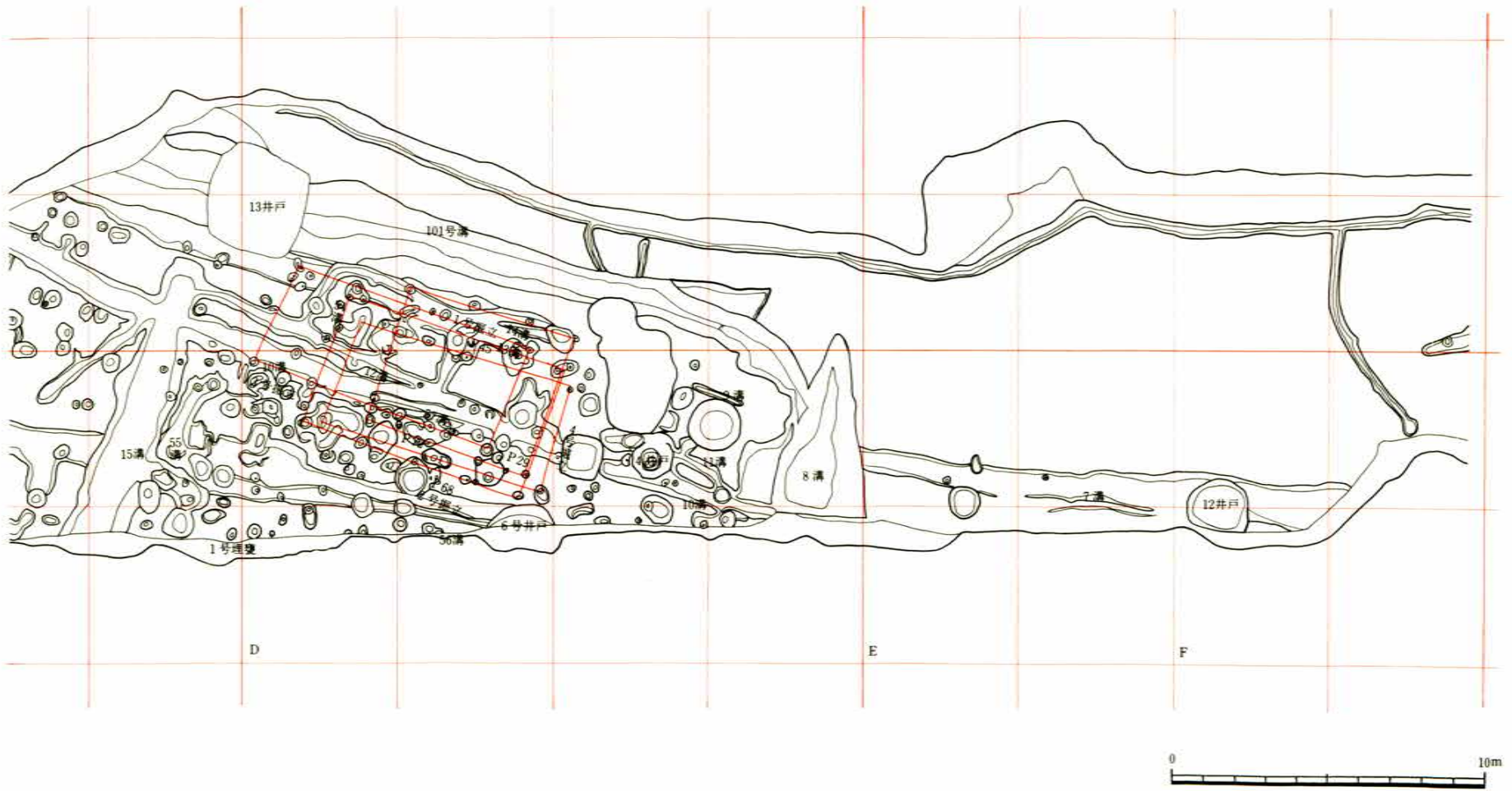
遺構は、井戸20基、土坑11基、溝100条以上、柱穴様の穴400以上を検出した。掘立柱建物は柱穴の重複が激しいことと、調査幅が約14mということもあって12棟を復元したに留まる。井戸1基につき1棟という換算をしても20棟は存在することになり、柱穴の数からしても想当な数があったものと思われる。

井戸は20基としたが、構築材を除去した様な物も含めれば、もう少し数がふえよう。木質の構築材を用いたものでさまざまな物がある。石組の物は検出されていない。また、M区にやや集中が見られる。

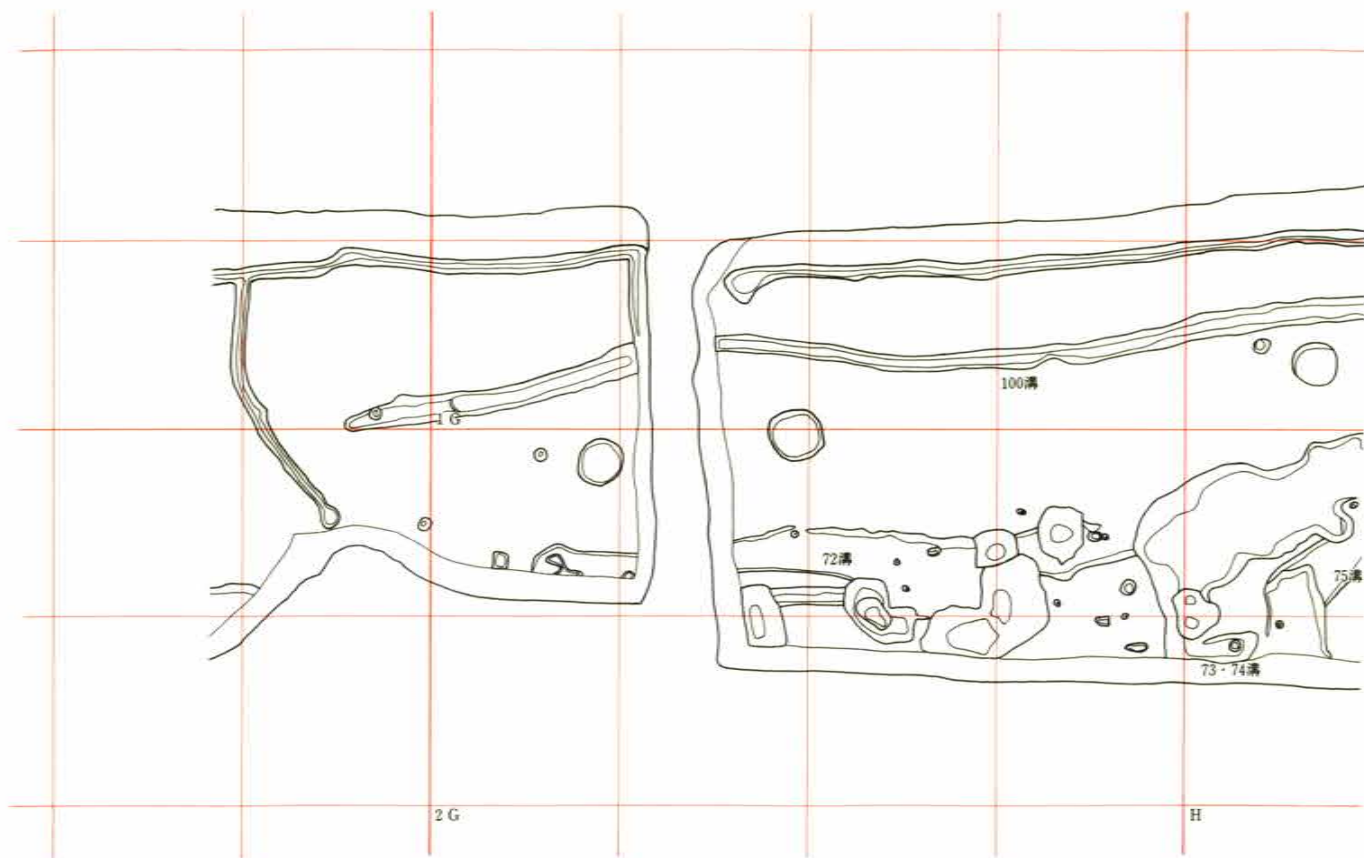
溝は居住域を区画する様な物から畝溝までさまざまであり、畝溝に限れば、B区とI区にその集中が見られる。

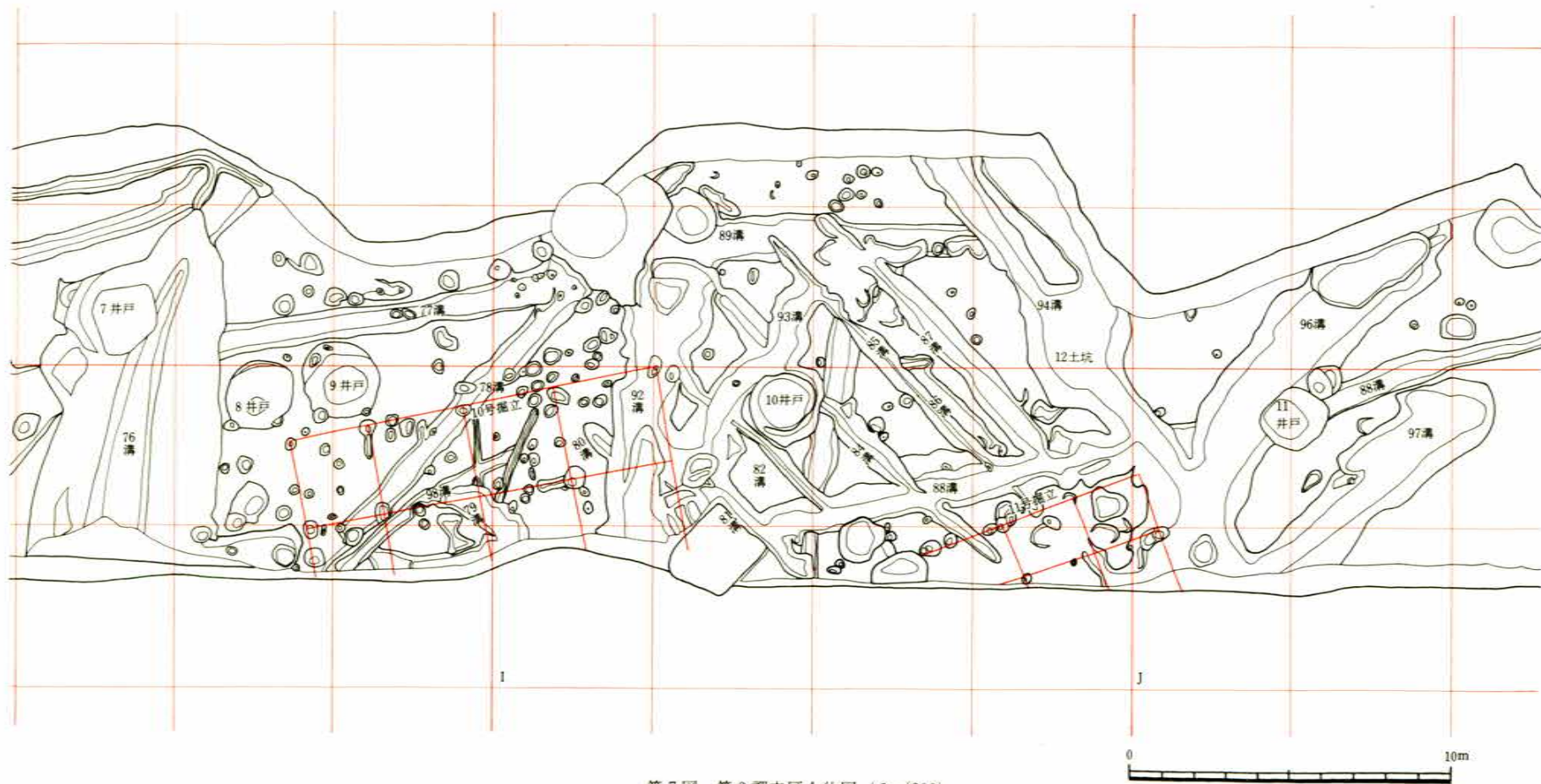
遺構の配置はJ字状に張り出す城山の影響を受け、第1調査区では、北西-南東かこれに直交方向に溝、掘立柱建物が作られ、第3調査区ではこれが、東西か南北に変わる。第2調査区ではこの両者が錯綜した状況を示す。また101号溝、102号溝、第3調査区北端落ち込みなどは現道と完全にオーバーラップし、溝や掘立柱建物の方向は現在の飯田町の道路、建物と大きく異なっていない。



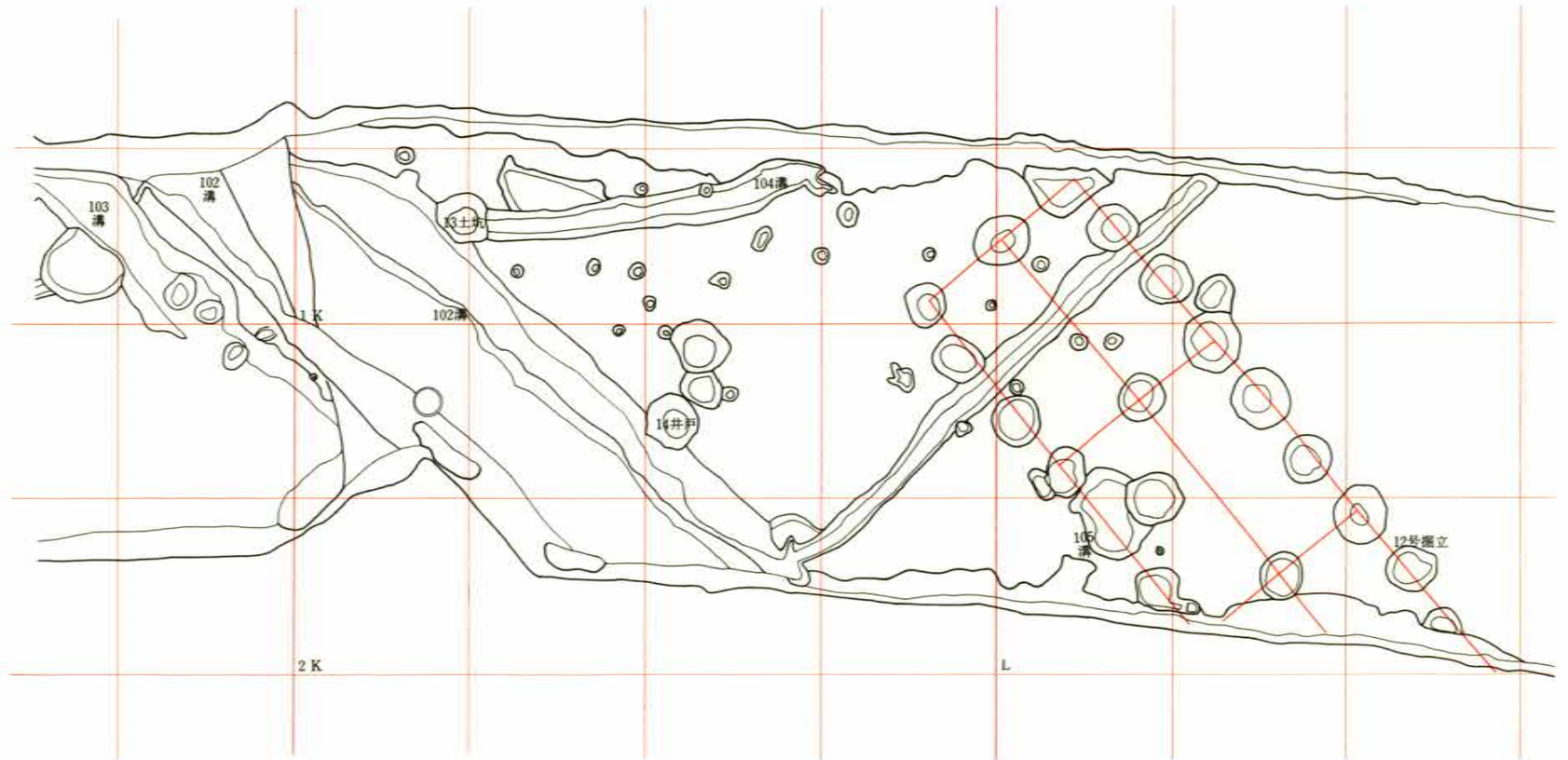


第6図 第1調査区全体図 (1/200)



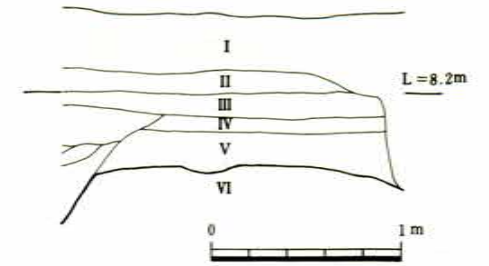


第7図 第2調査区全体図 (1/200)





第9図 第3調査区全体図 (1/200)



- I 表土
- II 黄茶灰色砂質土 (黄灰色ブロック含む)
- III 灰色砂質土 (黄灰色ブロック含む)
- IV 暗灰色砂質土 (黄灰色粒子含む)
- V 黒灰色砂質土
- VI 黄褐色砂 (ベース)

第8図 基本土層 (2A区) (S=1/30)

III 遺構と遺物

1. 掘立柱建物

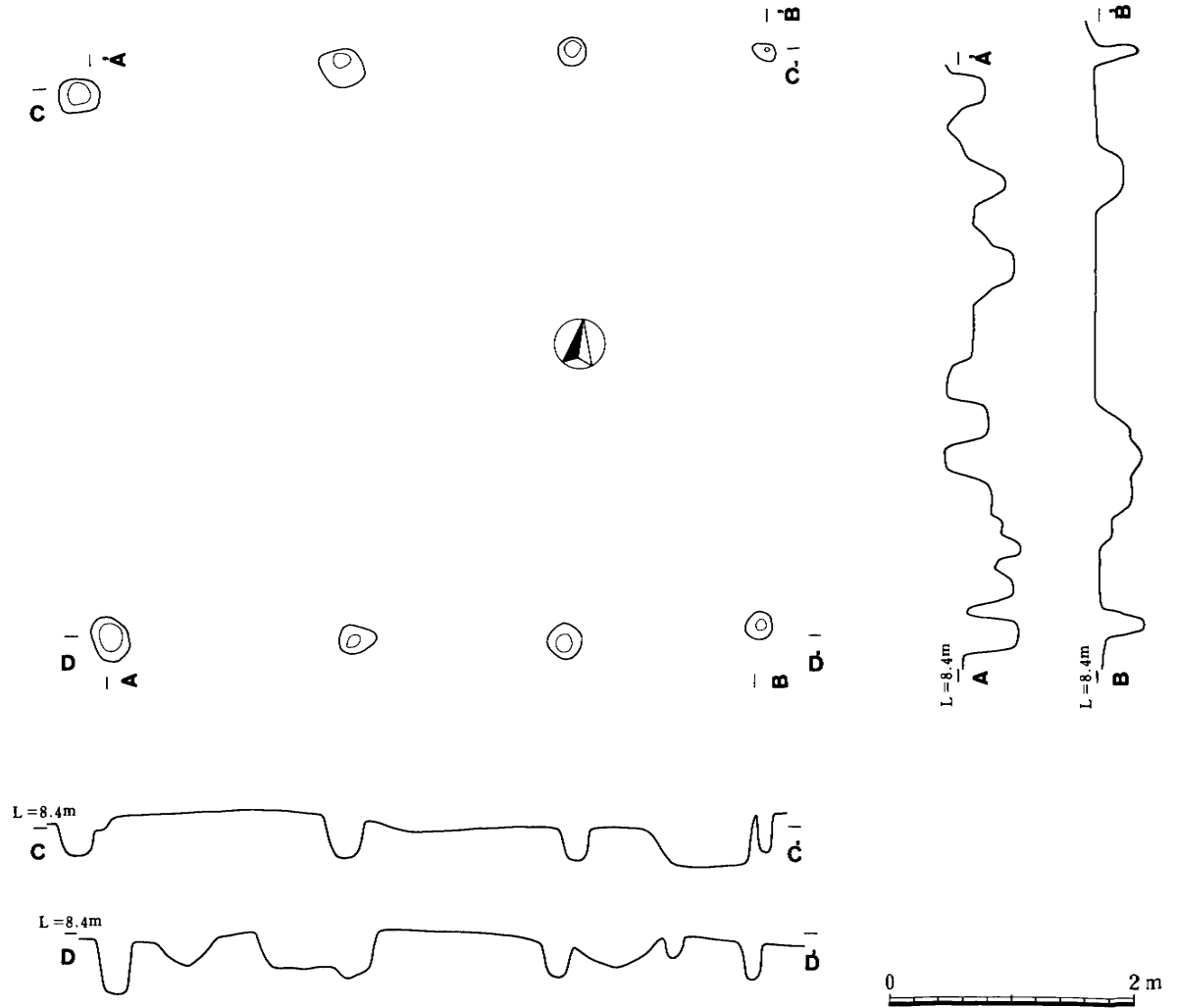
掘立柱建物は12棟を復元したにとどまる。また、その全様を明かにし得たものも少ない。幅14mの調査区に多数の遺構が重複することと、ベース面が砂層で、たび重なる降雨により、遺構自体が失なわれたことがその大きな理由である。400を越える柱穴や、20基の井戸からすれば、本来存在した建物はこれをはるかにうまわるものであろう。

1号掘立柱建物（第6図、第10図）

D区に位置する。3間×1間に復元したものはっきりとしない。梁行間の柱穴はさだかではないし、東柱についても同様である。北側、東側に延びる可能性も否定し得ない。桁行約5.3m、梁行4.6mを測る。桁行の東側柱間は他に比べやや短い。

柱穴掘り方は略円形で径は25cm前後、深さは40cm前後で、同じ桁行内での柱穴底レベルは安定しているが、梁行では南側がやや低い。地形の影響によるものであろうか。柱穴覆土は黒色の粘質土で、黄褐色の崩落土ブロックを混じえる。切り合い関係にある他の遺構との関係はとらえ切れず、溝を掘り下げて初めて柱穴が確認できるといった状況である。これは他の柱穴についても同様で、遺構検出時にはやや不規則な平行溝が検出され、その間に柱穴がいくつかあるといった状態であった。

D区で検出された他の建物同様、8号溝、15号溝、101号溝、13号井戸、4号井戸等との関係がうかがわれる。建物群中一番北に位置することと、101号溝が、ややこの1号掘立柱建物をさけている様に見られることから、8号溝、15号溝、101号溝に区画された敷地内に建てられていたのではと考えている。柱穴からは時期を特定出来る遺物の出土はないが、これらの溝とほぼ同時期と考えている。



第10図 1号掘立柱建物（1/60）

2号掘立柱建物（第11図）

1号掘立柱建物と同様D区で検出された。4間×2間に復元した。西側梁行間の柱穴と東柱はさだかでない。北側桁行の欠落した柱穴は検出されていない可能性が高い。南側、東側に延びる可能性もある。桁行約7.2m、梁行約4.2mを測る。

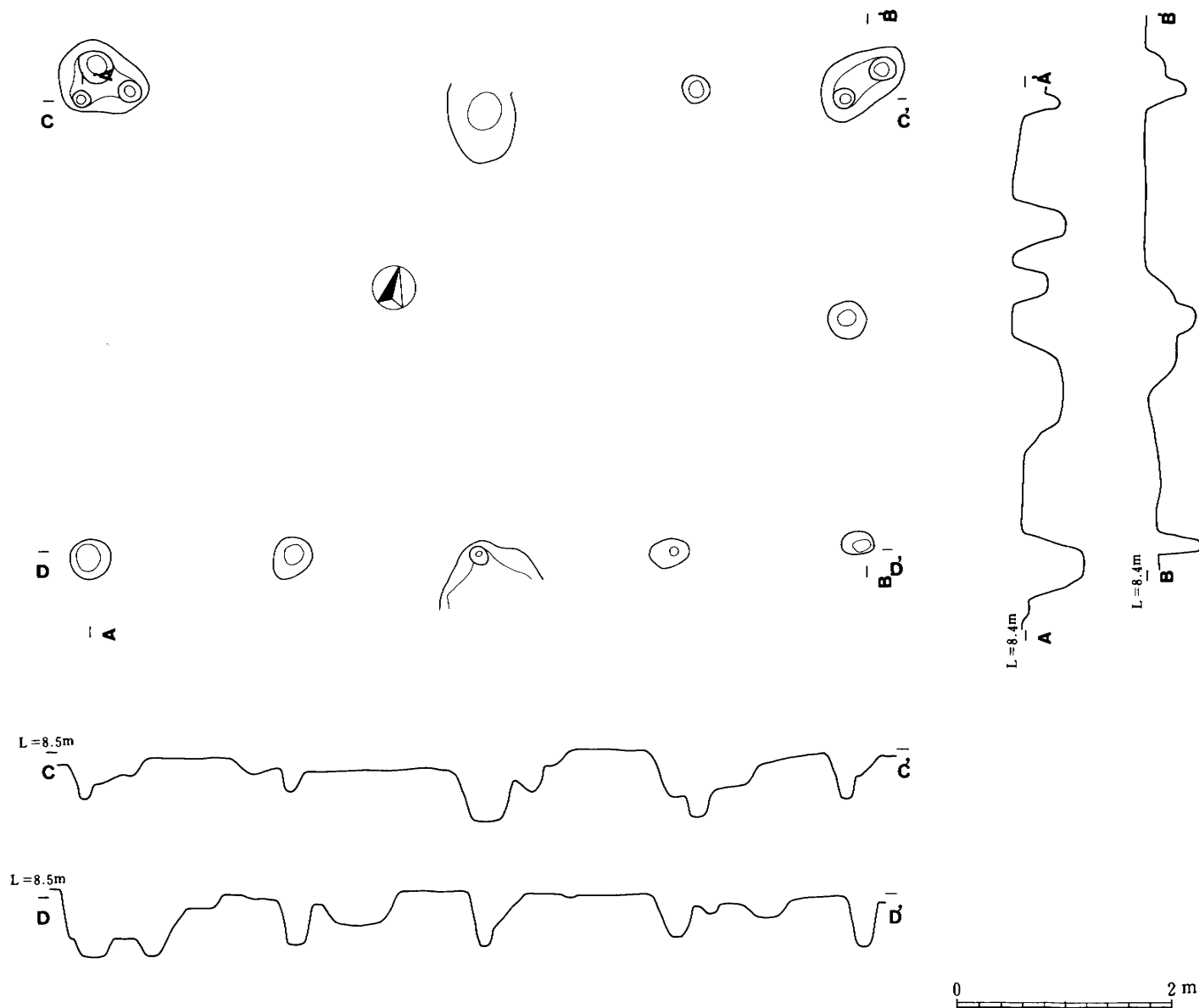
柱穴掘り方は略円形で径は30cm前後、深さは40cm前後であるが、北側桁行中央の柱穴は径50cmを越える。柱穴覆土は1号掘立柱建物と同様であるが、前述の北側桁行中央柱穴は上層に黒色土、下層に黄色砂、柱穴掘り方底にはうすく黒色土が推積していた。他の柱穴は掘り方が掘りきれていない可能性もある。柱穴底レベルは北西角柱を除いて同じ桁行列内で安定している。梁行列では1号掘立柱建物同様南側がやや低い。

他の遺構との切り合い関係は1号掘立柱建物と同様とらえられなかったが、54号溝が建物北東コーナーをとりまくようにL字に配されており関連するのであろうか。

また、北側桁行中央のP45から中世土師器小皿が出土しているが、同様な特徴を持つものが101号溝からも出土しておりやはりなんらかの関連をもつと思われる。これらより、第1号掘立柱建物同様溝で区画された敷地内に立てられたものと考えられる。1号掘立柱建物がさらに東へ1間分延びるとすれば、同一規模の建物の位置をずらせた建て変えとも考えられる。

3号掘立柱建物（第12図）

D区の建物群の内では一番西寄りに位置する。4間×1間に復元したが、これも前述と同様はっきりとしたものではない。桁行8m、梁行3.5mを測る。柱間は両端の柱



第11図 2号掘立柱建物（1/60）

間がやや長い。

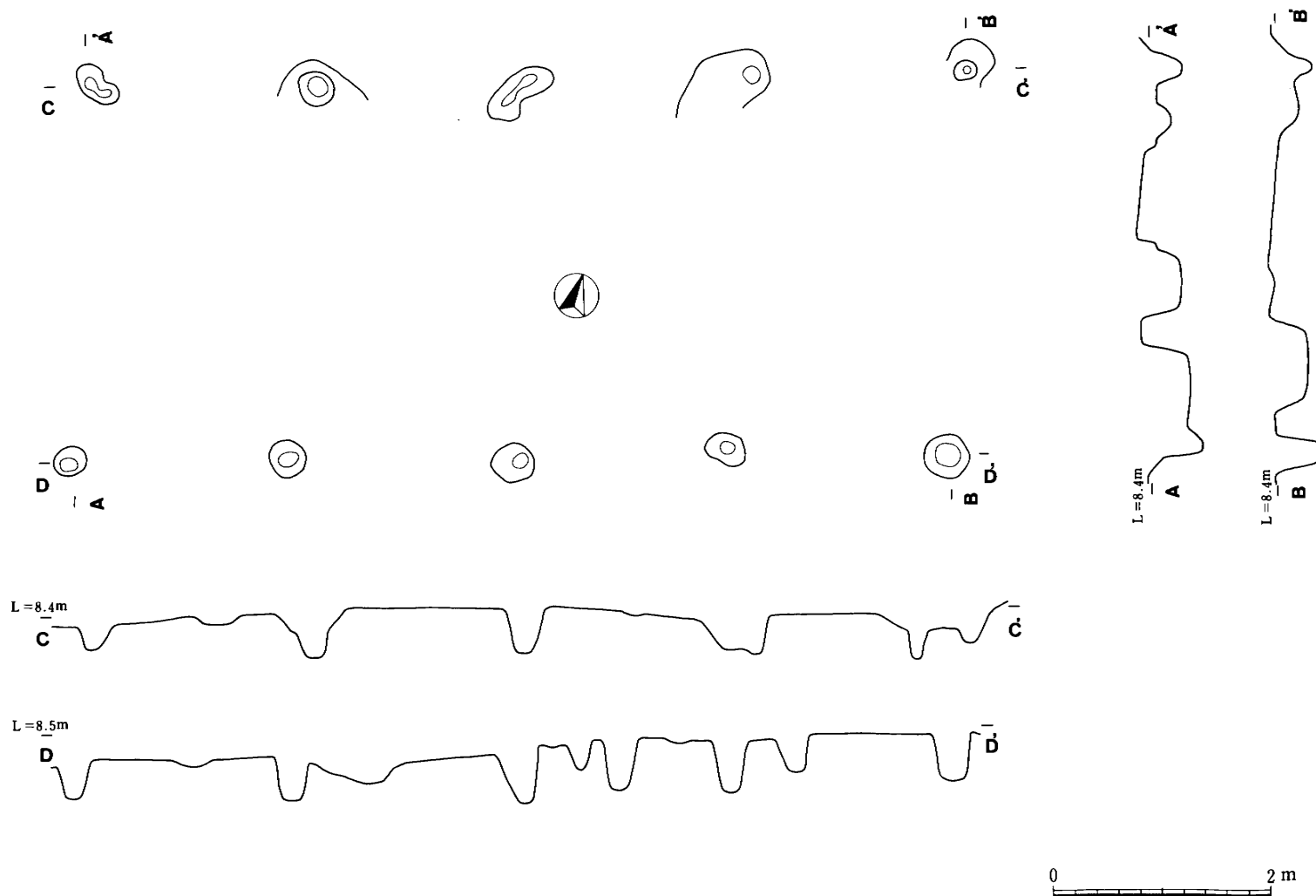
柱穴掘り方は略円形で径30cm、深さ40cm前後と、前述の建物と同様である。柱穴底レベルはややバラつく。梁行の柱穴底レベルはやはり南側が低い。柱穴覆土は、黒色の粘質土に黄褐色の丘陵崩落土が混じる。2号掘立柱建物の柱穴の様に大きな掘り方を持つ可能性は低い。

他の遺構との関連では、建物の北西角の柱穴が101号溝と接する様な位置にあることから、区画とはやや関係がうすれるものと言えよう。13号井戸も同様な理由から関係を持たないと思われる。積極的に関連をうかがわせる溝状遺構は見あたらないが15号溝あたりと関連するのであろうか。また、4号井戸、6号井戸とも位置関係からすれば、同時であっても問題はない。

4号掘立柱建物（第13図）

D区の建物群の内一番東に位置する。4間×1間に復元したが、これもはっきりとはしない。西側桁行7.4m、梁行3.6mを測る。3号掘立柱建物とほぼ同じ規模である。

柱穴掘り方は、大きい物は径90cm前後、小さい物は径30cm前後とバラつきが大きい。2号掘立柱建物の様に掘り方が掘りきれていないのか



第12図 3号掘立柱建物（1/60）

もしれない。柱穴覆土も2号掘立柱建物と同様である。柱穴底レベルは桁行間ではほぼそろっており、梁行では若干南側が低い。

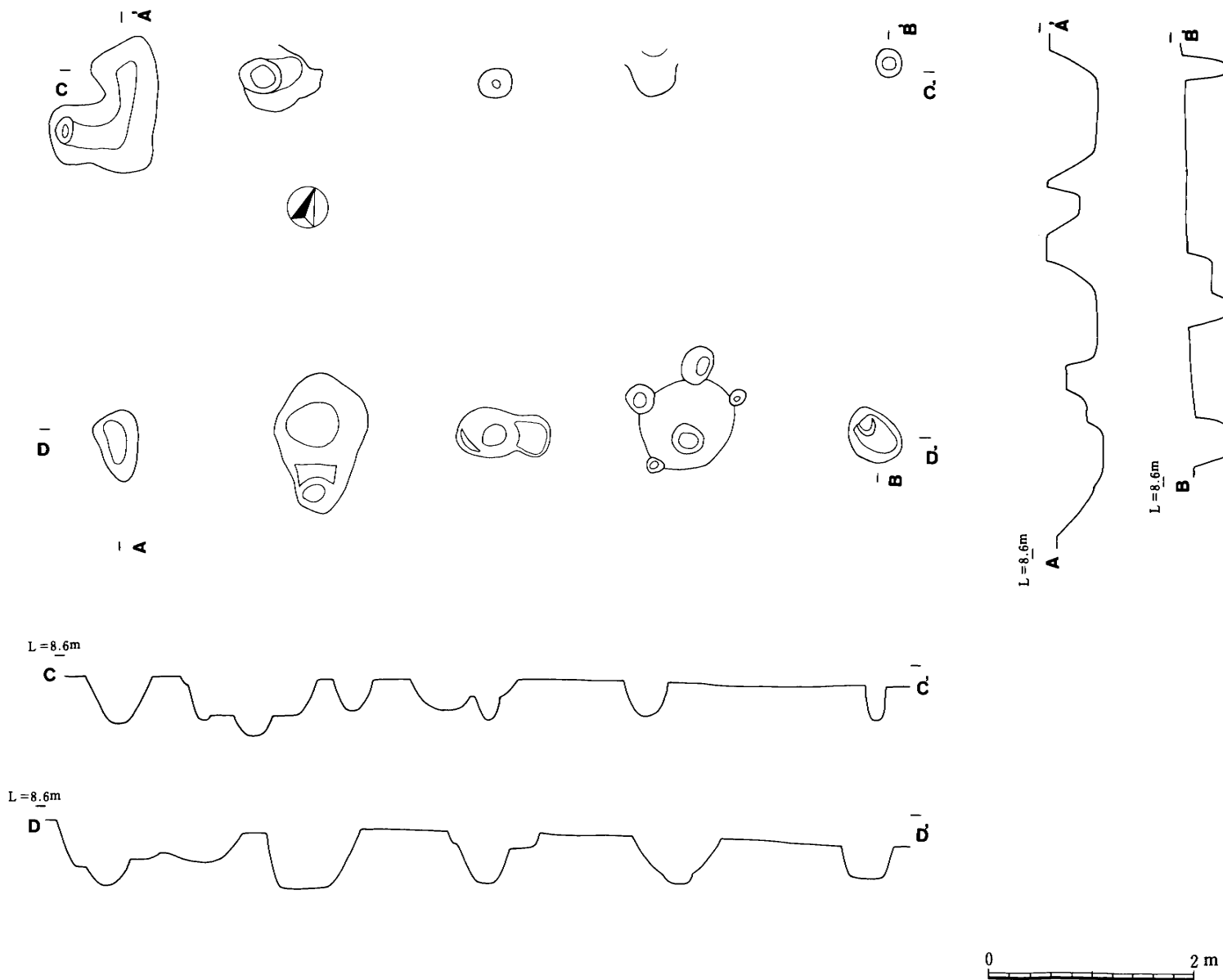
4号掘立柱建物は13号溝と平行した位置にあり、その関連がうかがわれる。13号溝は、攪乱等での連続が追えないものの、9号溝、7号溝とつらなるものと思われ、10号溝を山側へ移したものと考えている。13号溝は101号溝に切られていることから、4号掘立柱建物が13号溝と同時期とすれば、D区で検出された建物群中最も古いものと考えられよう。

D区付近ではさらに建物が存在すると思われるが建てきれないでいる。とくに54号溝と同様な形の12号溝にかこまれた建物の存在や10号溝と平行する建物の想定可能であろう。

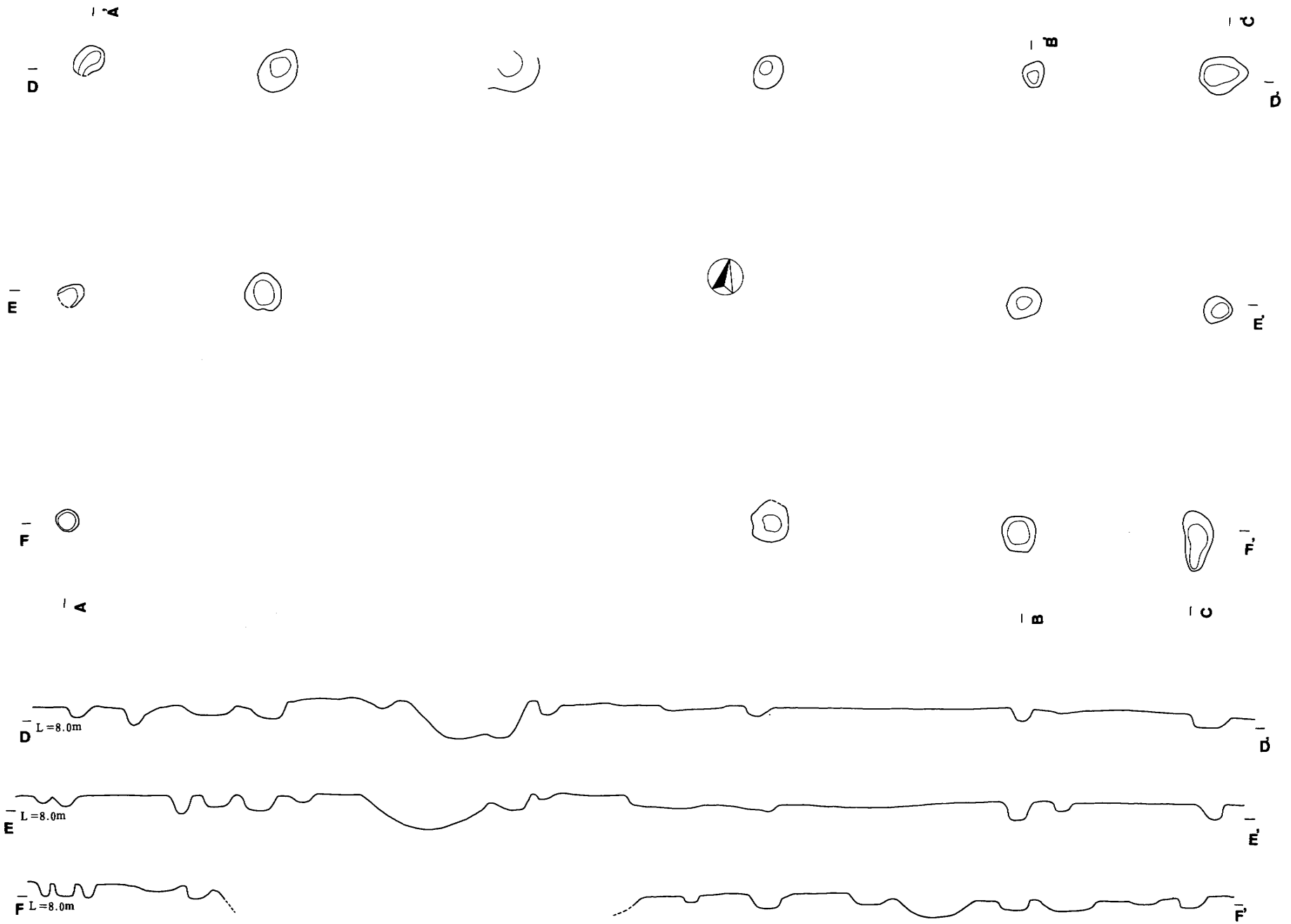
5号掘立柱建物（第14図）

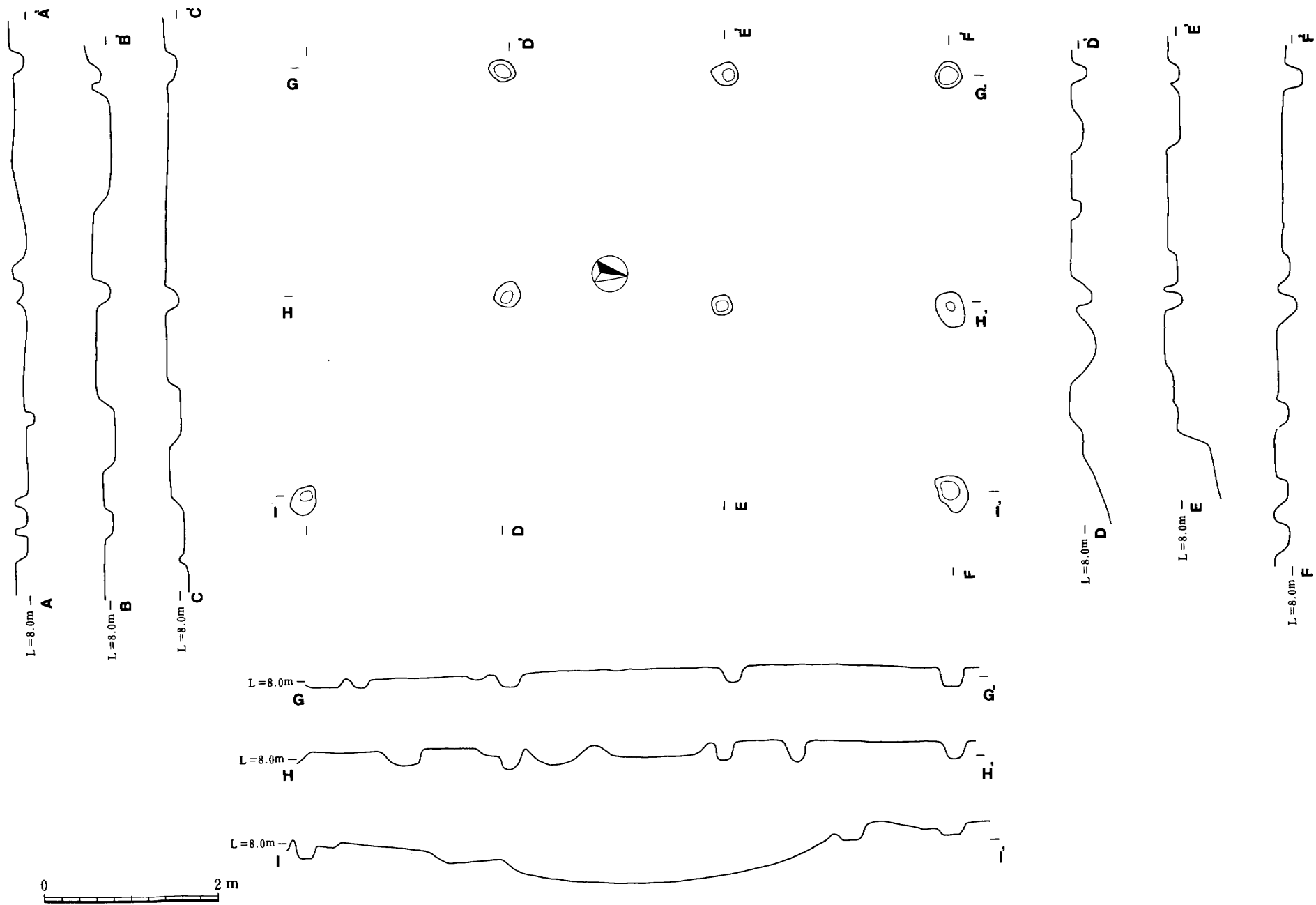
B区、C区にまたがって検出された。5間×2間の総柱建物である。本遺跡で検出された掘立柱建物の内、規模を確定出来る数少ない1例である。桁行12.8m、梁行5.2mを測る。桁行両端の柱穴間が他に比べ短く。庇であろうか。

柱穴掘り方は略円形で径40cm前後、深さ15cm前後である。柱穴底レベルは桁行間では安定し、梁行では南側がやや低い。柱穴覆土は黒色の粘質土で、丘陵崩落土は含まない。P328からは土師器皿底部が出土し、図示しなかったが他



第13図 4号掘立柱建物（1/60）





第15图 6号掘立柱建物 (1/60)

の柱穴からは須恵器甕胴部片が出土している。

6号掘立柱建物（第15図）

B区に位置する。3間×2間の総柱建物である。これまで述べてきた建物がすべて東西棟であったのに対し、6号掘立柱建物は南北棟である。規模は、桁行7.3m、梁行4.7mを測る。

柱穴の掘り方は略円形で径30cm前後、深さ20cm前後である。柱穴底レベルは桁行間同しでは安定しているが、梁行間では南側が若干低い。柱穴覆土は黒色の粘質土で丘陵崩落土の黄灰色ブロックは含まない。P306から土師器椀が出土している。

第7号掘立柱建物（第16図）

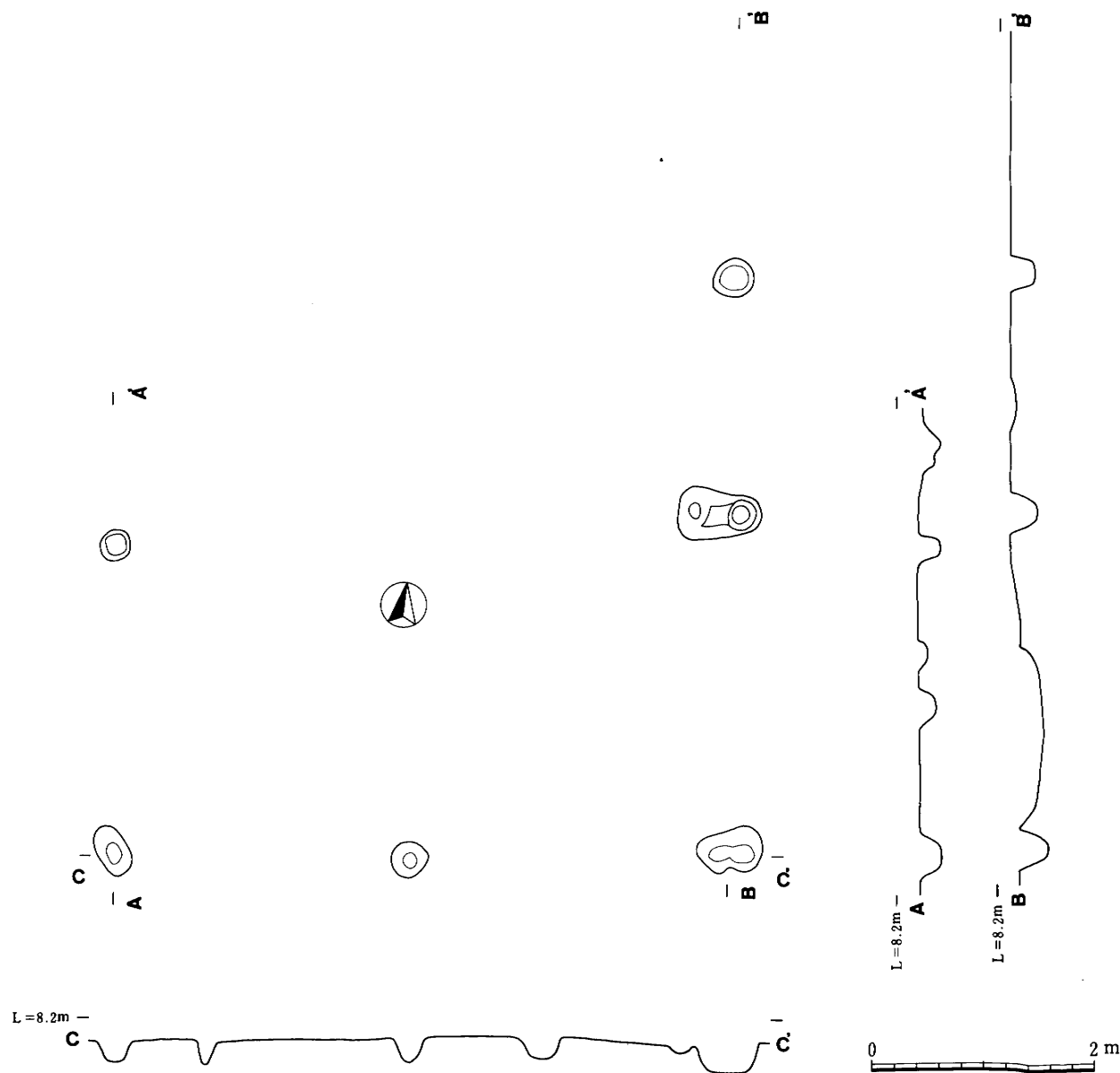
B区で検出された。第6号掘立柱建物の西隣りに位置し、北側は調査区外へ延びると思われる。2間以上×2間の南北棟と想定し、桁行5.1m以上、梁行5.5mを測る。東側桁行の南から2番目と3番目の柱穴間が短かく、あるいは3番目の柱穴はあてはまらないのかもしれない。

柱穴の掘り方は略円形で径30cm前後、深さ20cm前後で、柱穴底レベルは南側がやや低い。柱穴覆土は黒色の粘質土で丘陵崩落土の黄灰色ブロックを少量含む。図示し得る遺物の出土はない。

8号掘立柱建物（第17図）

B区で検出された。7号掘立柱建物とは重なる位置にある。5間以上×2間の東西棟で桁行9m以上、梁行4.5mを測る。西側梁行は101号溝と重なるものか、あるいはこれで完結するものなのか確認できなかった。ただし、101号溝を越えて柱穴が見つかっておらず、延びても1間と思われる。

柱穴掘り方は略円形で径40cm前後、深さ30cm前後である。柱穴底レベルはややバラつく感がある。柱穴覆土は黄色に近い暗灰褐色の粘質土で、丘陵崩落土の黄灰色ブロックを含む。同様な土層は1号井戸、2号井戸、101号溝、108号溝、109号溝等で見られ、当初は近代の攪乱と考えていた。柱穴から出土した遺物で図示したものはないが、P191から越前焼甕の胴部片が



第16図 7号掘立柱建物（1/60）

土している。

他の遺構との関係を見ると、101号溝とは近接しすぎており直接関係は持たないと思われる。位置的、方向的に108号溝あたりと関連があるのかも知れない。井戸では1号井戸あたりが覆土等からして関連がありそうに思われる。

B区、C区についてもまだまだ建物が存在したと思われるが柱穴が多すぎて建てきれなかった。ただ、5号掘立柱建物より北には建物はなく、8号掘立柱建物より南には比較的柱穴が少ない。

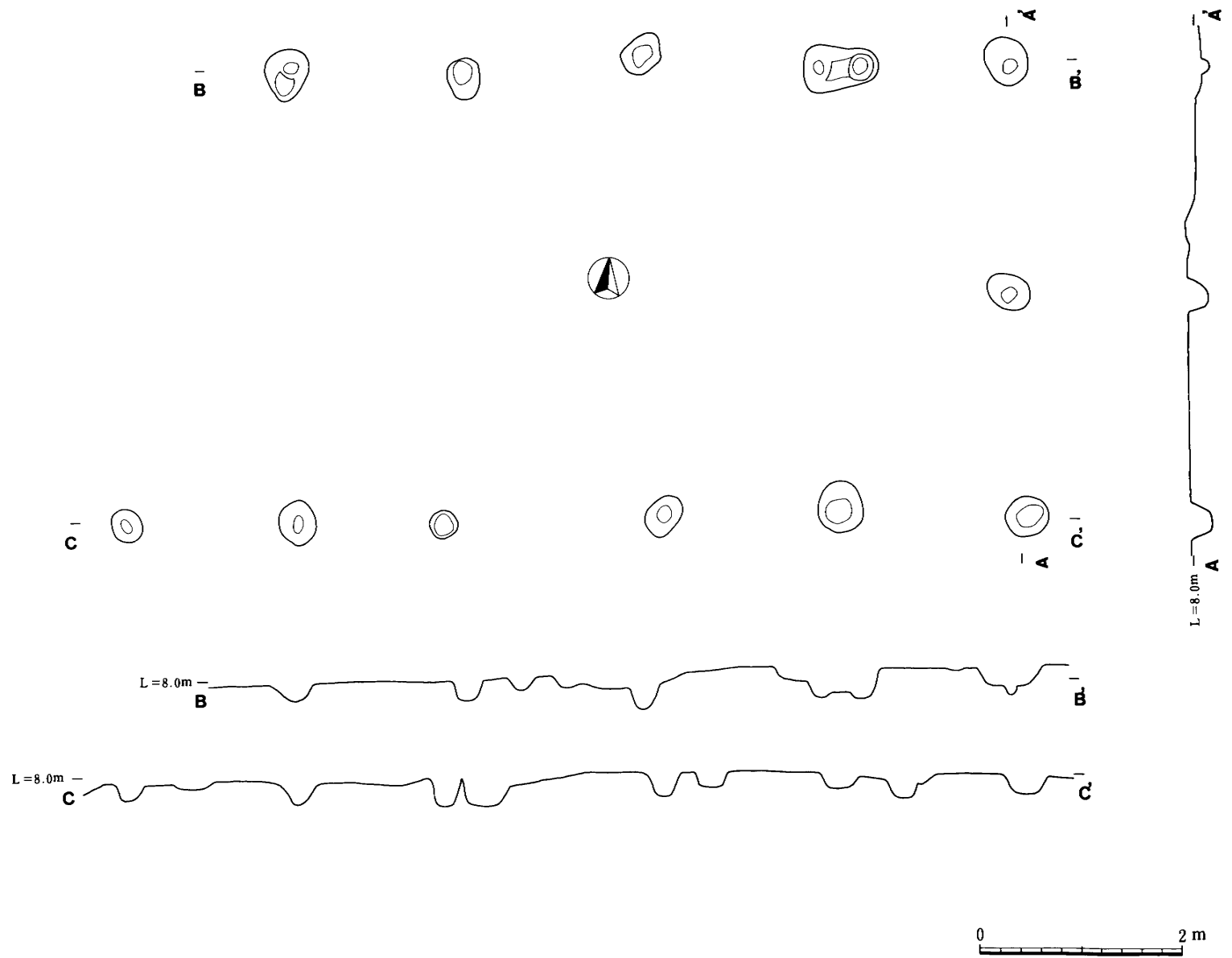
9号掘立柱建物（第18図）

調査区西端で検出された、3間以上×2間以上と想定している。規模は確認できる範囲で桁行6.8m以上、梁行4.4m以上である。側柱のみの建物としたが、総柱の建物の可能性もある。そうした場合、桁行、梁行ともに調査区外に延びる可能性がある。

柱穴の掘り方は略円形で径40cm前後、深さ30cm前後である。柱穴底レベルはバラつきが認められる。柱穴覆土は黒色粘質土で、丘陵崩落土の黄灰色土ブロックは含まれない。

他の遺構との関係はとらえきれないが、柱穴は109号溝に切られている。

A区で検出された建物は9号掘立柱建物1棟のみであるが、まだ他に1～2棟は存在する可能性が高い。特に5号溝より南の調査区



第17図 8号掘立柱建物（1/60）

南西隅で検出された柱穴は掘り方が大きくしっかりしたものが多い。

10号掘立柱建物（第9図）

H、I区にまたがって検出された。4間×1間以上の総柱建物と想定した。南側は調査区外に延びる。

柱穴掘り方は略円形で径50cm前後、深さ30cm前後である。柱穴底レベルは桁行間では安定しているが梁行では南側が低い。柱穴覆土は黒色の粘質土で、丘陵崩落土を含む。

他の遺構との関連を見ると、ほぼ77号溝と平行しており関係をうかがわせる。井戸では、8号井戸、9号井戸、10号井戸が隣接するものの関係はつかめなかった。

11号掘立柱建物（第20図）

I、J区にまたがって検出された。3間×1間以上の総柱建物と推定した。規模は桁行7m、梁行2m以上である。

柱穴掘り方は略円形で径40cm前後、深さは30cm前後であるが、深さはバラつきが大きい。柱穴覆土は黒色の粘質土で、丘陵崩落土はほとんど含んでいない。

他の遺構との関連を見ると、11号掘立柱建物は88号溝とほぼ平行しており関係をうかがわせる。ただし、近接しすぎているきらいがある。また、10号井戸、11号井戸とも隣接するが、関係はわからない。これらの井戸と11号掘立柱建



第18図 9号掘立柱建物（1/60）

物が関連のあるものとするならば、80号溝との関係は否定される。

第2調査区において復元のできた建物は上記の2棟のみである。第1調査区の東端あたりから、第2調査区のG区付近は丘陵が張り出していた様で、この付近には柱穴等が少ない。H、I区は柱穴も多く、まだまだ建物が存在しそうである。また、この付近では交差する溝がめだち、区画の交差する地点と思われる。とすれば、75号溝、70溝に平行する建物が存在したと思われるが、復元できなかった。

12号掘立柱建物（第21図）

L区を中心に一部K区にかかって検出された。8間以上×2間の規模となり、東側はさらに調査区外に延びる。3間×2間の建物が連結した様な構造で、3間ごとに束柱が設けられている。桁行12.6m以上、梁行4.2mを測る。

柱穴掘り方は略円形で径110cm前後、深さ60cm前後で、柱穴底レベルは安定している。柱穴覆土は暗灰色の粘質土で丘陵崩落土の黄灰色ブロックを多量に含む。柱穴から出土した遺物は小片で多時期にわたるが、近世以降と思われる陶磁器の小片が含まれている。

12号掘立柱建物は他の掘立柱建物に比べ、柱穴掘り方が大きく、その間隔もせまい。また、構造も異なる。同様な構造の建物は、石川県津幡町刈安野々宮遺跡(西野他 1988)で検出例があるものの、柱穴の間隔等が異なる。刈安野々宮遺跡例は中世の所産とされているが、本例は柱穴出土遺物等からして、それよりも後出と思われる。

他の遺構との関連ははっきりとはしないが、第3調査区東端の溝状の落ち込みが、同様な遺物を出土している。溝状の方向も直交する様な方向であり関係をうかがわせている。

第3調査区では削平が著しいためか、5基の井戸を検出しながら、掘立柱建物は、12号掘立柱建物1棟のみしか検出されなかった。遺跡の広がりも南北には延びるものの東側は徐々に低くなり、若山川の形成した

低地へと移行するため、これ以上の広がりはないと思われる。

柱穴出土遺物（第22図）

柱穴から出土した遺物は少なく小片が多いため、図示できたものは少数にとどまる。たび重なる降雨による崩落で、柱穴の番号が不明となったものや、柱穴その物が流れてしまったものが多数ある。ここでは位置不明となった柱穴を含み、柱穴出土遺物として取りあげた遺物について述べる。

1は1B-c3区のP306出土のもので、P306は6号掘立柱建物を構成する柱穴の1つである。土師器有台椀で口径15.5cmを計る。橙色で砂粒を多く含む。10世紀代の物と思われる。

2は1B-c3区のP227出土である。内面黒色の土師器で椀であろうか。外面にはケズリが施され、内面はミガキあげられている。また、内面には漆状の物が付着している。

3、4は製塩土器で、3は位置不明となったP323(B区付近と思われる。)出土である。口径16.2cmで口唇は折りがえされている。比較的大粒の砂粒を含む。4も位置不明となったP415(I区付近と思われる。)出土である。3に比べ細粒の砂粒を含む。3よりは大形である。

5は1C-b1区のP328出土である。P328は5号掘立柱建物を構成する柱穴の1つである。平高台様の高台を持つ土師器で小皿であろうか、底径は4.5cmを測る。淡い橙色で、細かい砂粒とシャーモットを含む。10世紀後半から11世紀代の所産であろう。

6は1B-b4区のP188出土である。土師器小皿で口径8.5cm、底径4.7cm、器高1.5cmを計る。底部には糸切り痕が、内面には同心円状のロクロナデ痕が残る。11世紀後半であろうか。

7は位置不明となったP430(I区付近と思われる。)出土である。土師器小皿で口径6.6cm、底径6cm、器高1.5cmを測る。乳灰色を呈し、細かい砂粒を含む。口唇部がナデ調整され断面は三角形を呈す。

8も7と同様な土師器小皿である。口径7.5cm、底径5.8cm、器高1.1cmを計る。7に比べ開きぎみとなる。色調、胎土等は類似している。2D-a2区のP29より出土している。

9は2D-a2区P68より出土している。土師器小皿で口径6.3cm、底径5.4cm、器高1.2cmを計る。色調は淡い橙色を呈し、細かい砂粒を多く含む。底部が厚く内底面からのたちあがりは3mm程度しかない。

10、11、12は2D-a2区のP72より出土したものである。P72はいくつかの柱穴が切り合っており、3点の共伴には若干の問題を残す。

10は7、8と同様な形態の土師器小皿である。口径7.3cm、底径6.1cm、器高1.3cmを計る。ちょうど7をひとまわり大きくした様な形態となる。橙色を呈し細かい砂粒を含む。

11は9に類似する。口径6.6cm、5.3cm、器高1.2cmを計る。9もややゆがみを持つが、11はゆがみが著しい。内外底面に指頭圧痕が見られるが、意図的なものであろうか。色調は乳灰色を示し、胎土には細かい砂粒を多く含む。

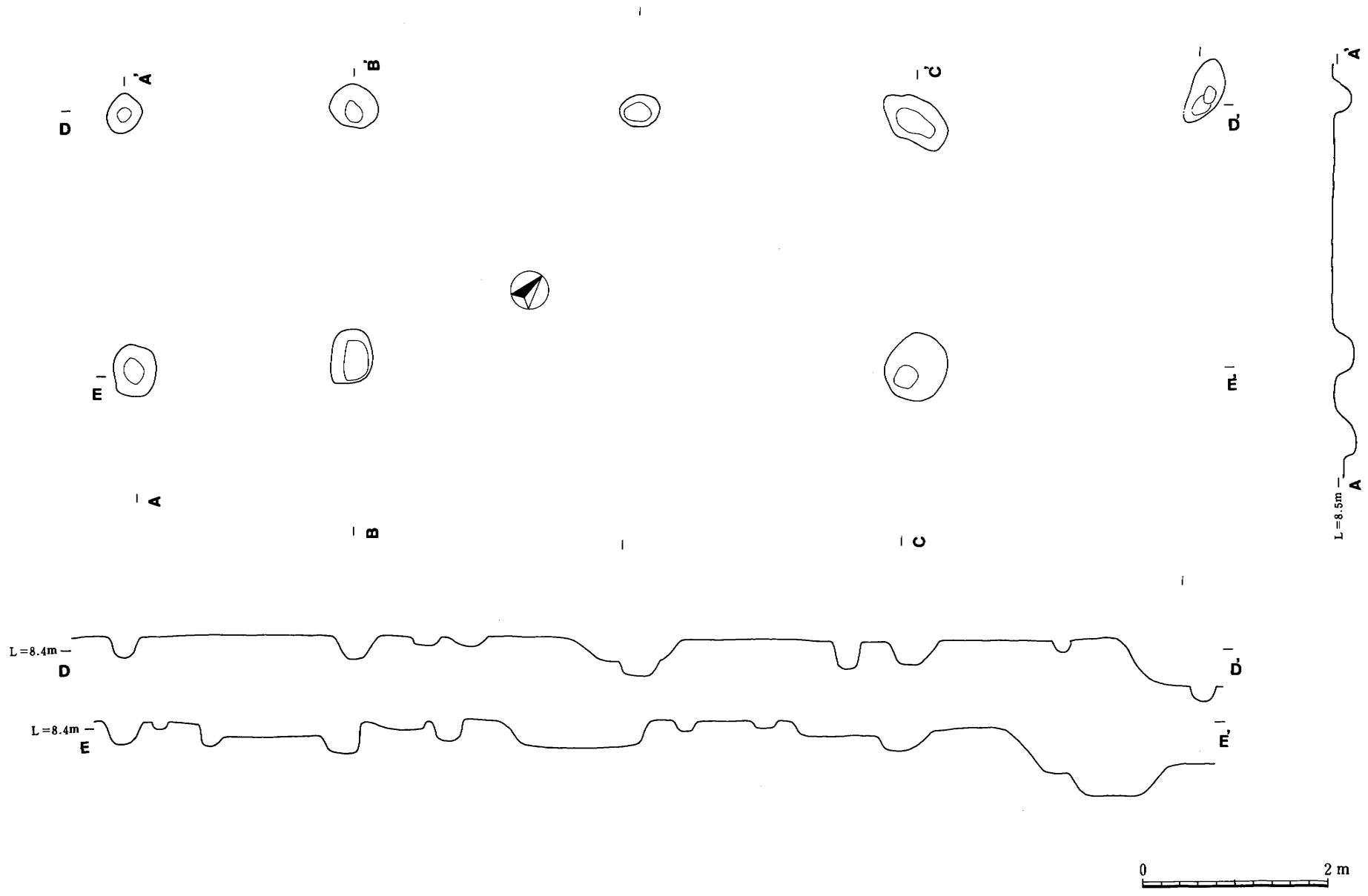
12は土師器椀で口径10.4cm、底径5.4cm、器高3.3cmを計る。口唇部はナデ調整され、7、8、10と同様断面が三角形を呈する。内底面はやや丸みを持って仕上げられている。やや暗い乳灰色を呈し、細かい砂粒を含む。口縁端部には内外に油痕が残る。

13~15はP45から出土したもので、P45は2号掘立柱建物を構成する柱穴の1つである。また、P45は13号溝等と切り合っており、共伴には若干の問題を残す。

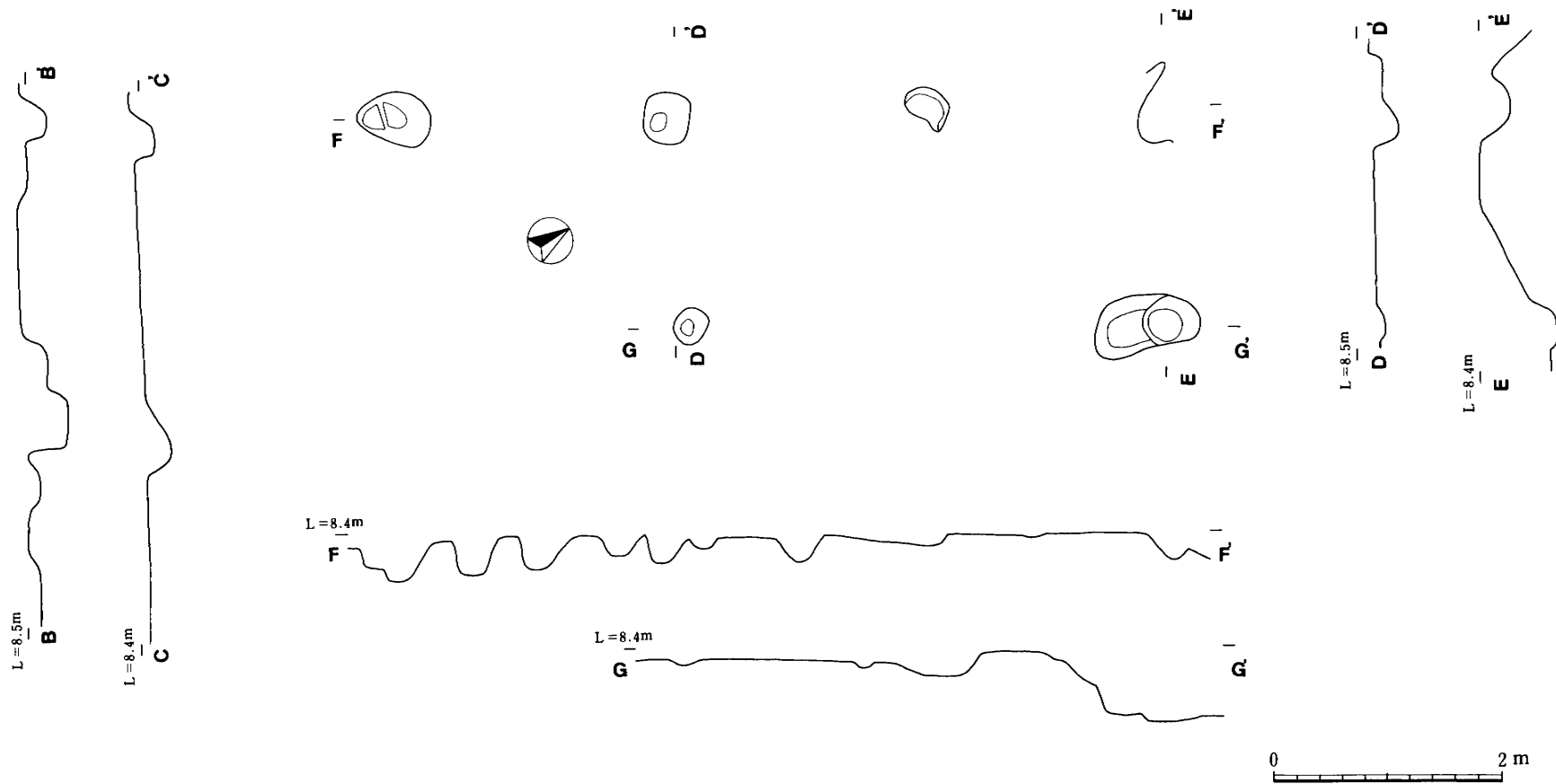
13は口径7.5cm、底径5.7cm、器高1.4cmを測る土師器小皿である。口唇部が引き出されやや鋭角となる。乳灰色を呈し、砂粒はこれまでの物に比べて少ない。

14は底径4.2cmを計る。小皿の底部であろうか、乳灰色を呈し、砂粒はあまり含まない。

15は口径7.5cm、底径5cm、器高1.7cmを計る土師器小皿で、13と比べると薄手の体部をもつが、やはり口唇は引きだされ鋭角となる。やや暗い乳灰色を呈し



第19图 10号掘立柱建物 (1/60)



第20図 11号掘立柱建物 (1/60)

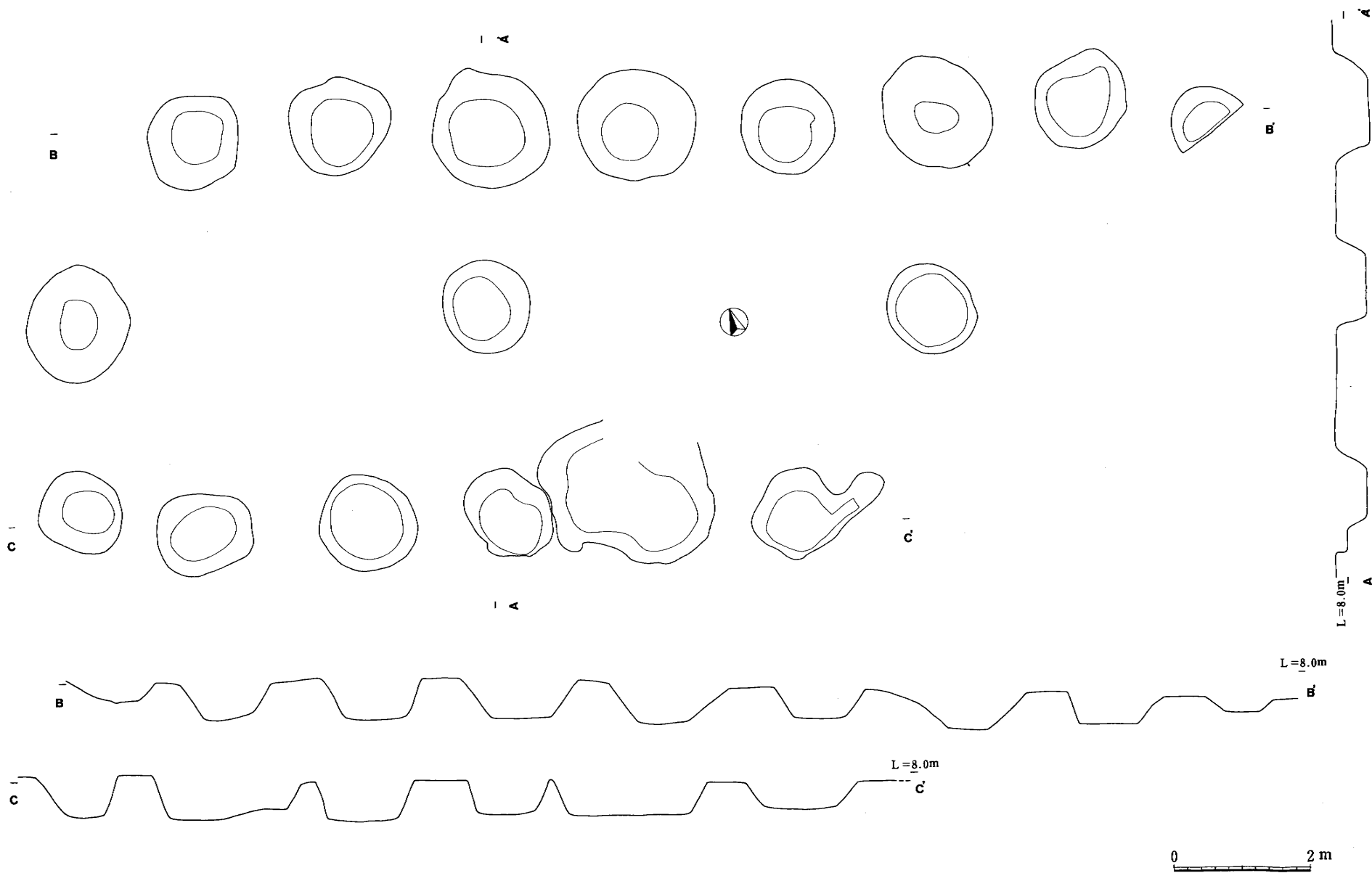
細かい砂粒を含む。

16は口径12.7cm、底径8.1cm、器高2.5cmを計る土師器皿で、やはり口唇部が引き出されている。底部縁にはヘラケズリが施されている。乳灰色を呈し、砂粒はあまり含まない。

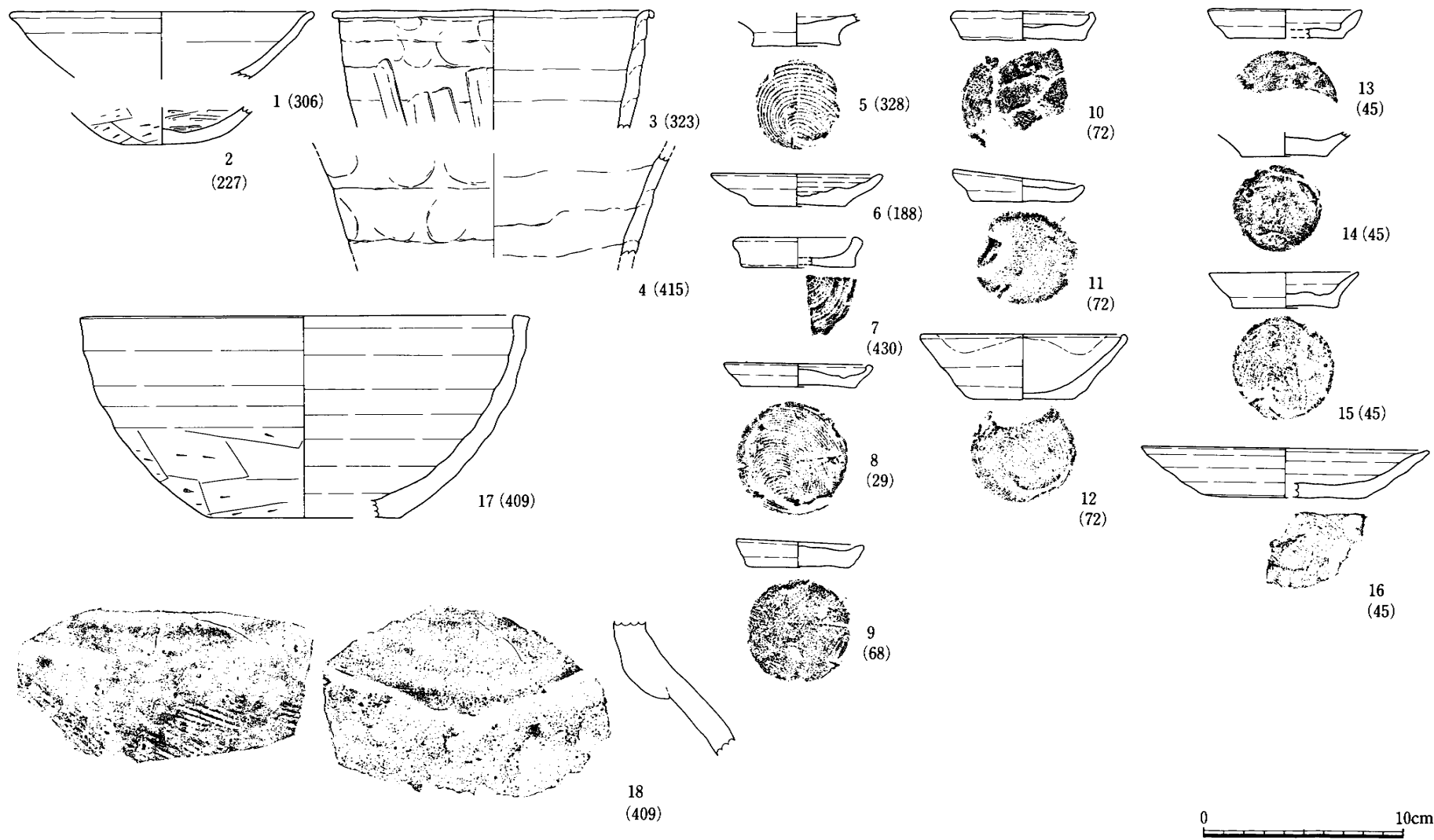
6～16の土師器は12世紀以降と思われる。

17、18は位置不明となったP409(H、J区付近と思われる。)出土である。17は珠洲焼片口鉢で口径22.8cm、底径9.6cm、器高10.2cmを計る。体部外面下半に

はケズリが施される。18は珠洲焼甕の口縁部片である。ともに12世紀代の所産であろう。



第21图 12号掘立柱建物 (1/80)



第22図 柱穴出土遺物 (1/3) () は柱穴番号

2. 井戸

井戸は20号まで番号を付けた。内、6号井戸については調査区壁面の倒壊により、記録を残すことができなかった。5号井戸は5号土坑と重複しており、土坑の項で述べる。

20基の井戸の内、なんらかの施設を残す物は16基で残りの4基は構造材が抜き取られたと判断したものである。本遺跡で検出された井戸は、小型で浅めの物が多い。その為、土坑として取りあつたものの中に構造材の抜き取られた井戸を含む可能性が高い。

井戸の分布を見ると、丘陵の張り出し部と思われるG区付近で見られない他は、調査区全体で検出されている。掘立柱建物の検出された付近にやや集中する傾向がうかがえる。第3調査区M区付近は特に集中するものの、この付近は上部が削平されており、建物の有無については不明である。集中の度合からすると、建物付近の集中とは異なる様な感じを受ける。

1号井戸

遺構(第23図)

2B区中央で検出された。検出時は暗灰色の粘質土に、丘陵崩落土を混じえる部分が不整形を呈し確認され、これと切り合う遺構のすべてが古いということをこの時点で確認している。

井戸の構造物は、上位に縦板組隅柱横棧どめの構築物が、中位に桶が、下位には珠洲焼壺の底部が埋設されていた。上位の構造物が井桁であるのか、井戸側であるのか判断しがたいが、中位の桶との間に薄く小砂利が敷かれており、上位の物を井桁と考えておく。

井桁は0.6m×0.6mの方形を呈し、隅柱のみ深く埋設されている。横棧は平行する2本のみ確認された。隅柱の内1本は下端にホゾを有しており、他の構造材の転用と考えられる。

井戸側として用いられた桶は逆位に埋設されており下端は桶の原形をとどめていない。竹製のタガが3条巡らされていたが、取り上げ時にバラバラになってし

まった。

下位の珠洲焼壺の底部は底が抜かれており、水溜として利用されたものであろう。また、この水溜は、井戸側と位置がずれている。

井戸掘り方は2.5m×2.2mの不整形円形を呈し、井戸側を取り囲む様に段を有する。深さは最深部で1.5mを計る。これとは別に、水溜を中心とする一辺1.8mほどの隅円方形の段があり、井戸が造り変えられたことを示している。

遺物(第24図)

19は、水溜として利用されていた珠洲焼壺である。口径43.8cm、器高60cm以上で、胴部最大径は胴上位にあり、54.6cmを計る、胴部は卵形を呈し、口縁は短く直立しわずかに外反する。胴部下位には叩き目を有するが、それより上位ではこれが消されている。15世紀代の物であろうか。なお、口縁部や胴部片は若干が井戸掘り方に含まれていたが、C区やD区でも出土している。

20は井戸側として利用されていた桶である。口径61.8cm、残存高82.2cmを計る。幅8~13cmの縦板を組み合せている。中外面ともにケズリ痕を残すが、側面は痕跡が観察できないくらい丁寧に削られている。

21は隅柱である。現存長66cm、径9.9cmを計る。上端には貫通する長方形のボゾ穴が穿たれている。また、図化しなかったものの中に下端にボゾを造り出したものがある。建築部材の転用であろうか。

この他に須恵器片、土師器片が出土している。

2号井戸

遺構(第6、25図)

B区、C区にまたがり、調査区幅員のほぼ中央付近に位置する。大型の遺構で覆土が攪乱と区別しづらく、遺構の時期、性格ともに判断できなかった。坑底に井戸側埋設部の痕跡が確認できたため井戸と判断した。

検出段階では、暗灰色から黒灰色の粘質土に丘陵崩落土を多量に混在する部分が、大きく不整形に広がるといった状況であった。

湧水が激しく、土層断面を倒壊寸前に図化できたが、遺構自体はその後の降雨等で倒壊を繰り返し、本来の形を図化できなかった。よって平面形は第6図の全体図を参考してもらいたい。土層断面図は、グリッドの方向に添う様に、ほぼ井戸中央を通る様な位置で記録している。井戸側等の構造物は残っていなかった。

井戸掘り方は径5m程の不整形円形で、皿状に落ち込む底に、一辺2m程の方形基調の掘り込みを有する。この部分が、井戸構造物の位置を示すのであろう。深さは最深部で1.2m程である。

この2号井戸の南側に6号溝が接続する様な状況を示している。他の溝状遺構と切りあっているのははっきりとはしないのだが、6号溝は2号井戸に付随する施設である可能性を持つ。

2号井戸埋土の推積状況を見ると、井戸側裏ごめの存在を積極的に示す状況はなく、施設は方形基調の掘り込みのみであったのかもしれない。

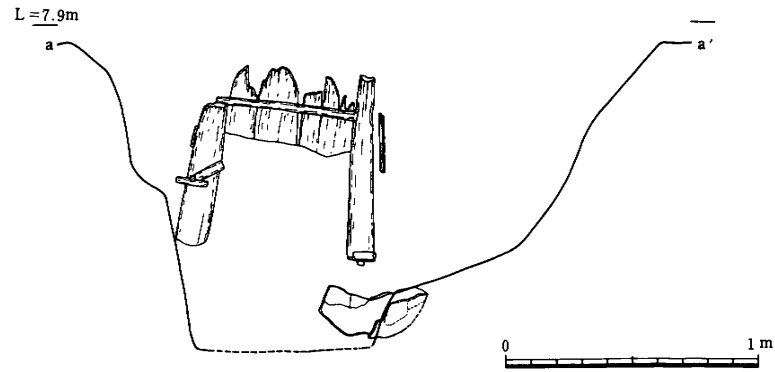
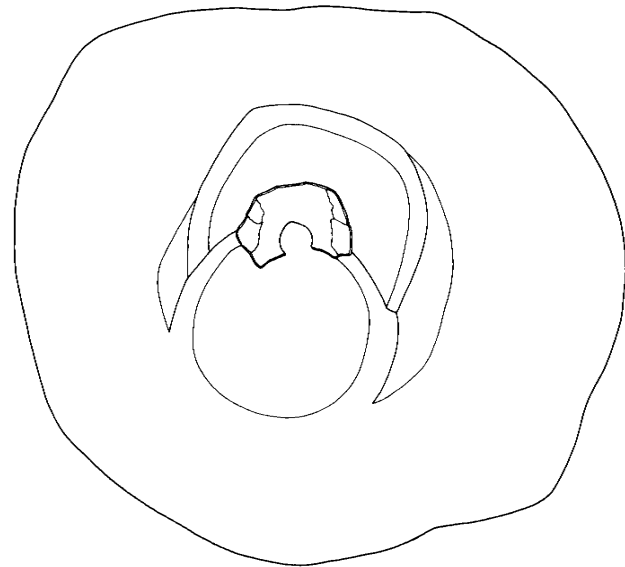
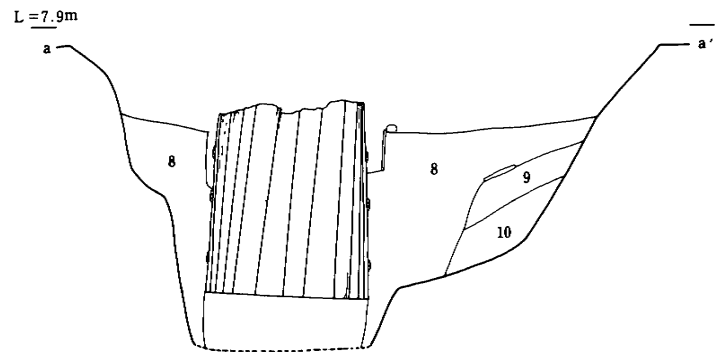
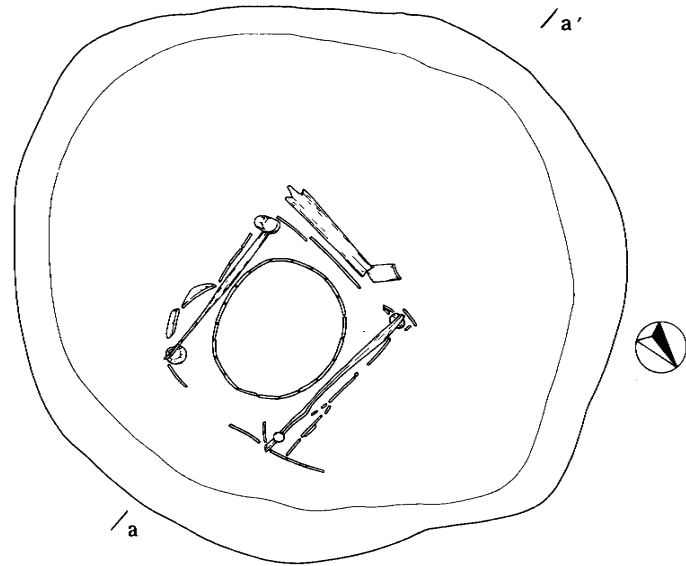
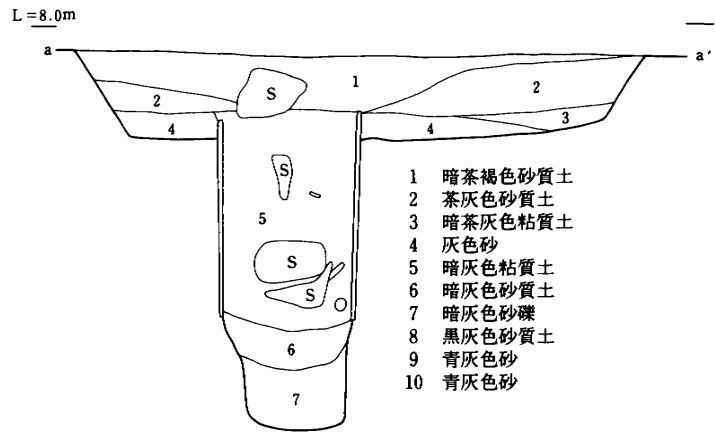
遺物(第26図)

22は土師器小皿で口径7.7cm、底径6.8cm、器高1.2cmを計る。口唇外縁が面取りされ、断面形が三角形を呈する。淡い橙色を示し、細かい砂粒を含む。

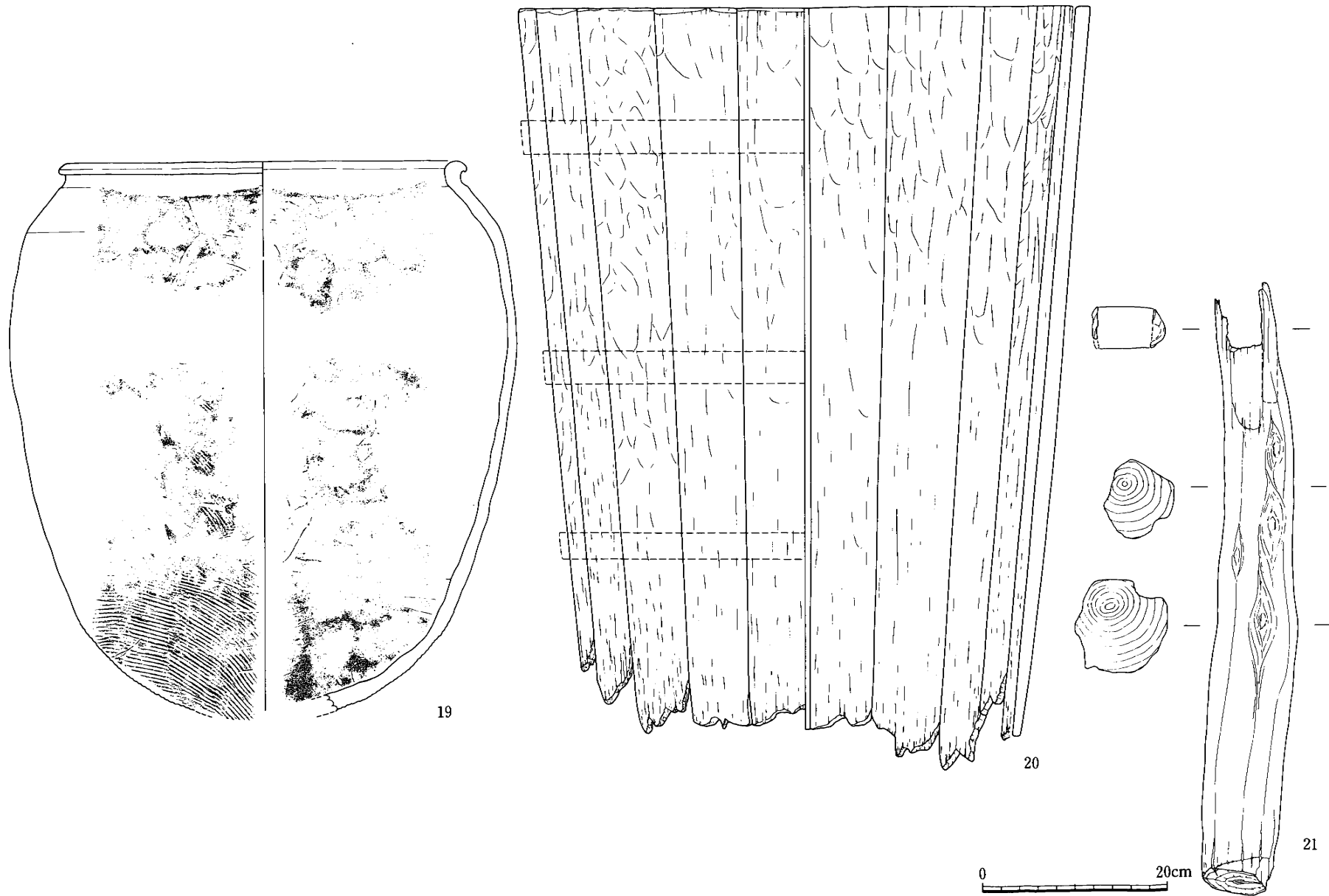
23は土師器皿で口径10.7cm、底径6.6cm、器高3.3cmを計る。体部は直線的に関き、口縁はわずかに内湾する。内面は暗い茶灰色、外面は淡い茶灰色を呈し、細かい砂粒を含む。

24、25、28、29は瀬戸系陶器である。24は灰釉の平碗で口径15.8cmを計る。胎土の為かやや黄味をおびる。25、28はおろし皿である。25は口径16.2cmを計り、灰色地に淡い緑灰色に発色した釉が口縁部に付近に施されている。28は底径約11.3cmを計る。灰色を呈し、釉は垂れたものが付着するのみである。29は盤と思われる。口径26.5cmを計る。釉は底部まで至らず、内面にはハケの痕跡をのこす。淡い緑灰色を呈する。

26は白磁碗で底径6.9cmを計る。背の低い高台で内側は斜めにカットされている。内面の底部と体部の境には沈線状の段を有する。



第23图 1号井戸 (1/30)



第24図 1号井戸出土遺物 (1/6)

27は珠洲焼の瓶であろうか。短くたち上る口頸部は径4.7cmを計る。上から見ると口頸部を巡る様に樹文がヘラで描かれている。

この他、須恵器片や珠洲焼甕、片口鉢の破片等が若干出土しているが、2号井戸の時期ははっきりと特定できない。

3号井戸

遺構(第27図)

2C-a1区で6号溝掘り下げ時に確認された。上部を6号溝により破壊されている。上部は井桁として、横板を相欠きによって井籠に組み、その交点外側に杭が打ち込まれている。横板は何段か組まれていた様である。井戸側は丸太材を剥ぎ抜いた物が用いられている。

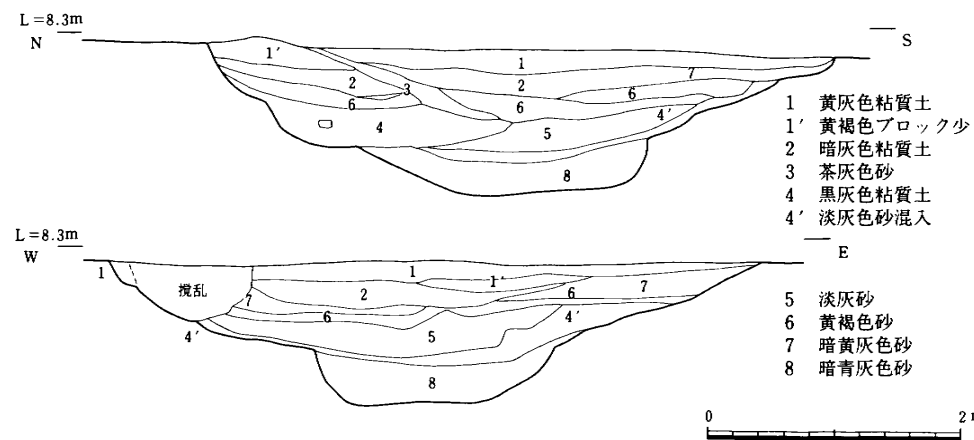
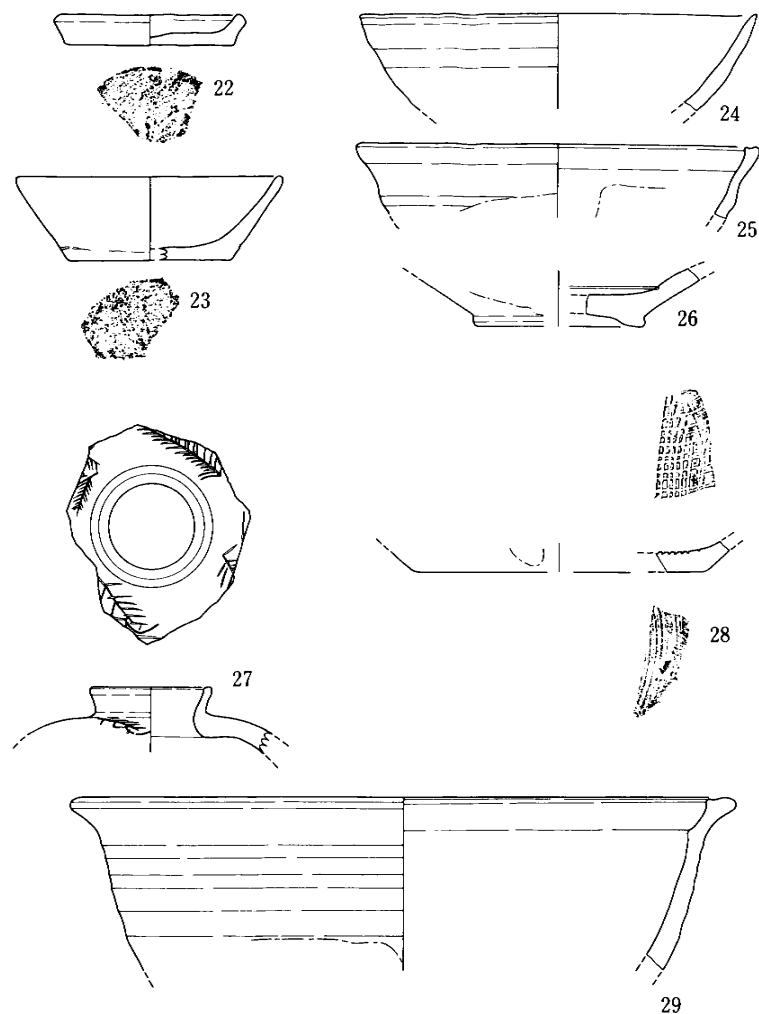
井戸掘り方は一辺2.7m程の隅円方形を呈し、井戸側埋設部分が一段深く掘り込まれている。深さは最深部で1.3m程である。

出土土器は少なく、細片のみである。掘り方からは須恵器片、土師器片が出土している。

遺物(第28図)

30は井戸側として用いられていた丸太剥ぎ材である。下端径47cm、上端径64cm、高さ94cmを計る。厚さはほぼ一定で4.5cm程である。外面は縦方向のケズリ痕がきれいに連続している。下端外面はやや鋭角にそぎ落とされている。内面は下部にケズリ痕を残すが外面ほど明瞭ではない。中位から上位にかけてはほとんど見られない。

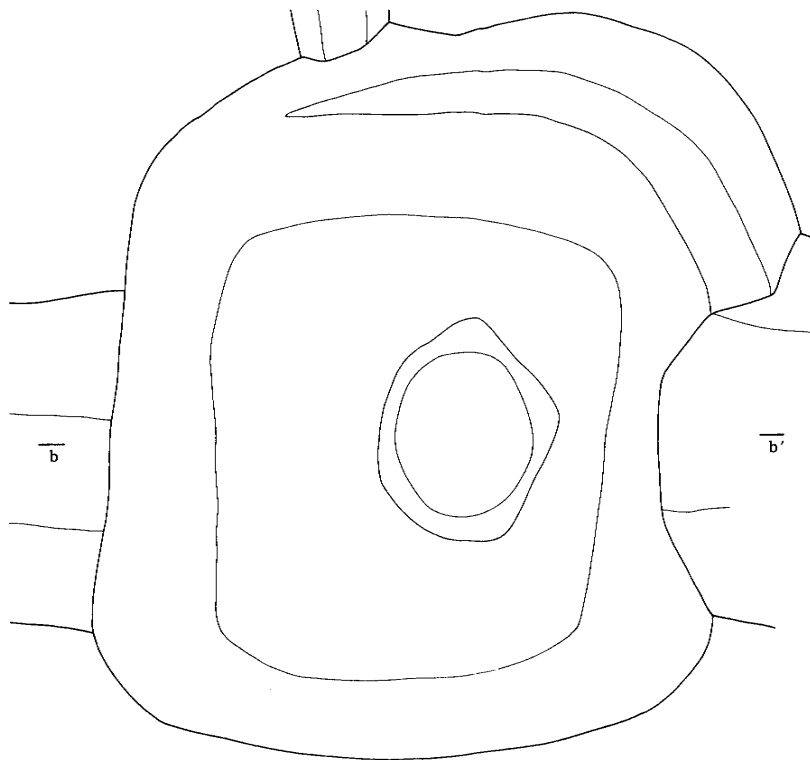
31は井桁として組まれていた横板である。長さ105.6cm、幅12.6cmで、厚さは



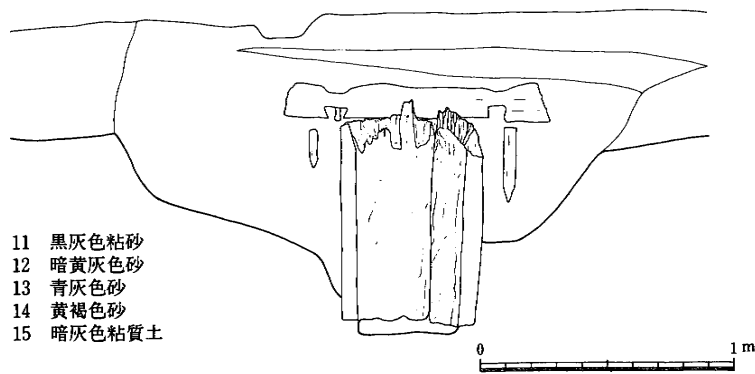
第25図 2号井戸土層断面図(1/60)



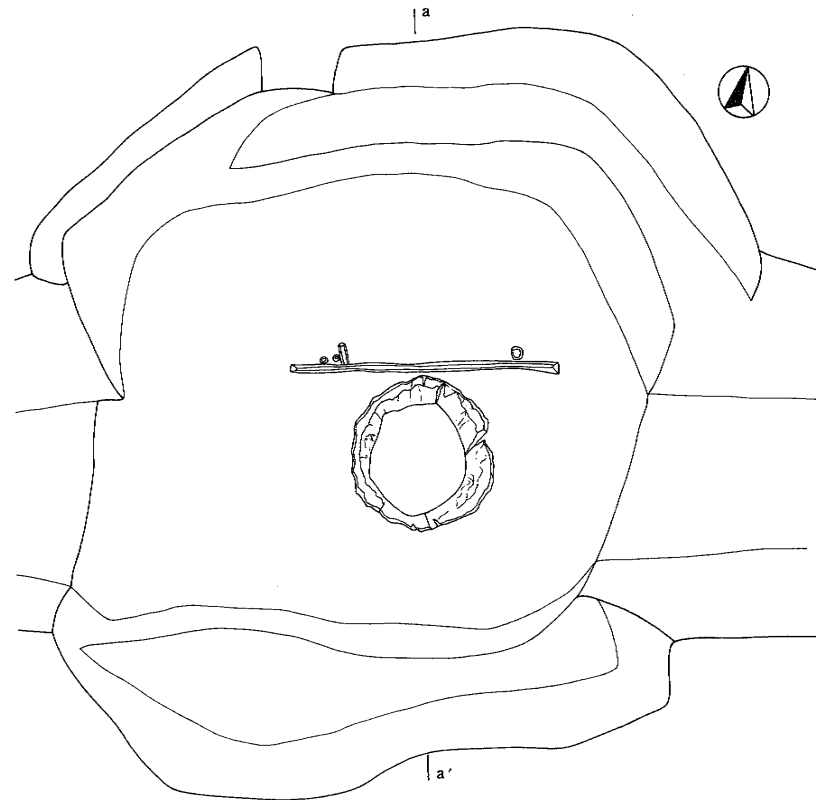
第26図 2号井戸出土遺物(1/3)



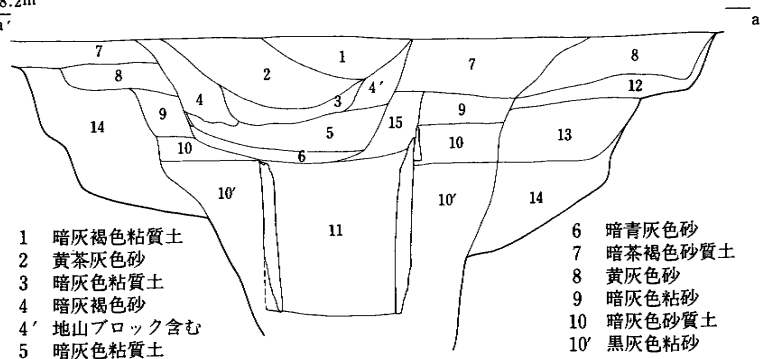
$L = \frac{8.2m}{b}$



- 11 黒灰色粘砂
- 12 暗黄灰色砂
- 13 青灰色砂
- 14 黄褐色砂
- 15 暗灰色粘質土

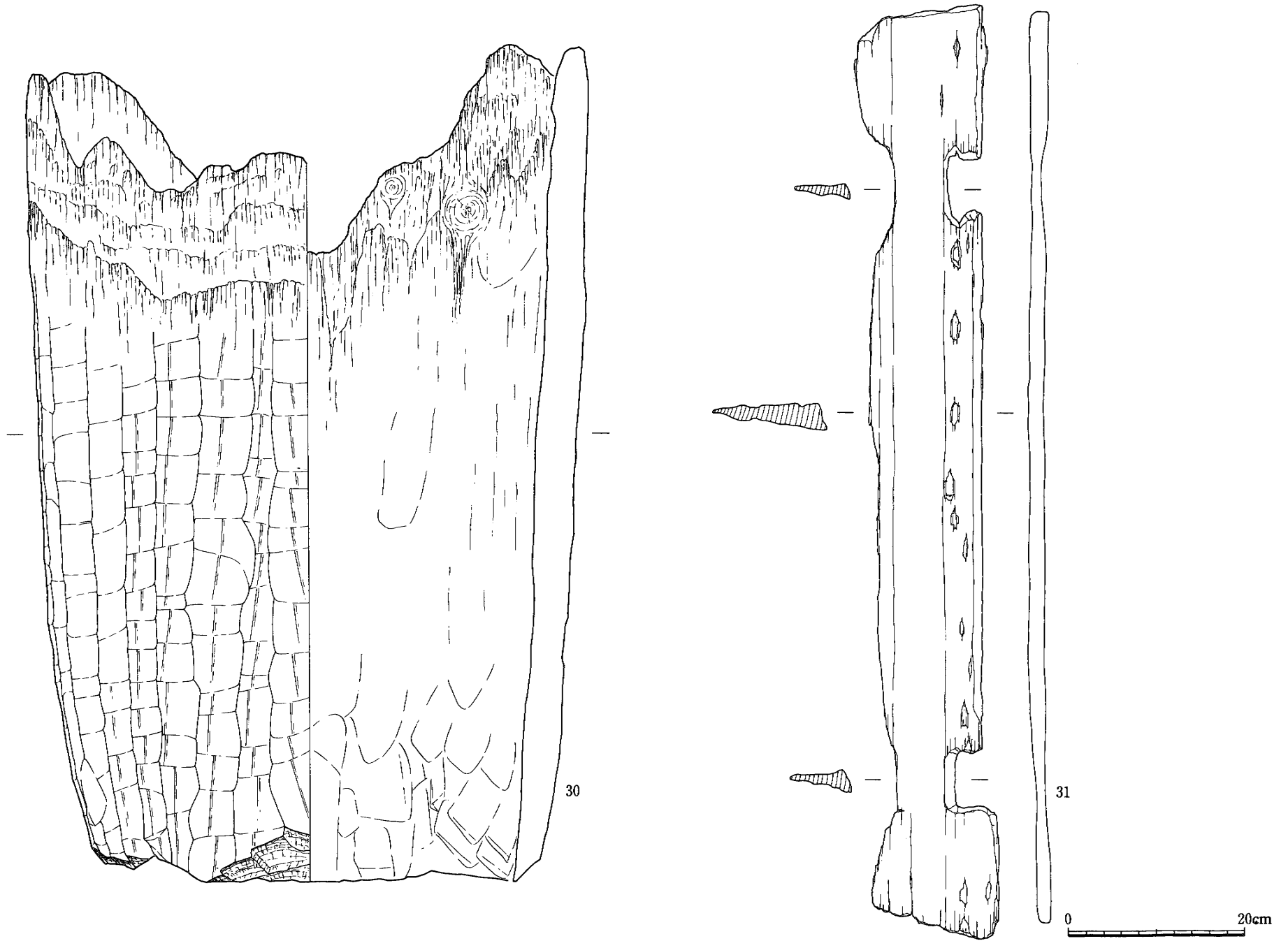


$L = \frac{8.2m}{a'}$

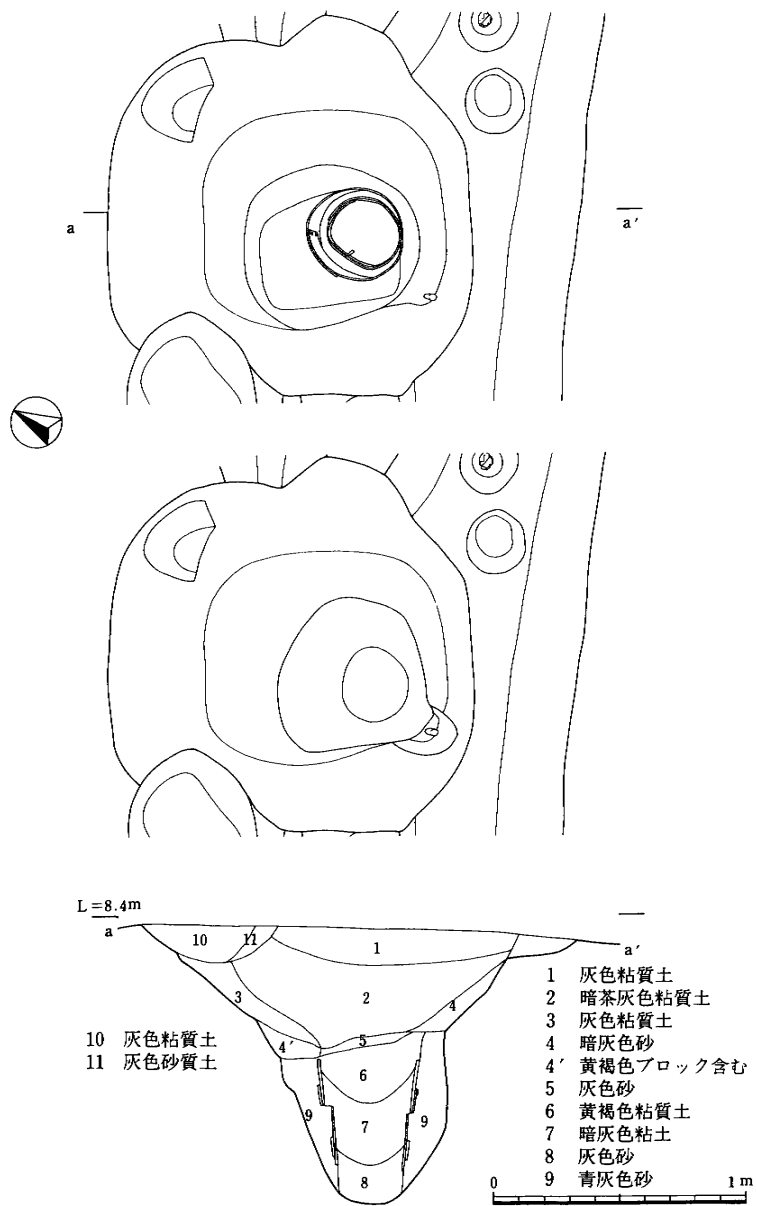


- 1 暗灰褐色粘質土
- 2 黄茶灰色砂
- 3 暗灰色粘質土
- 4 暗灰褐色砂
- 4' 地山ブロック含む
- 5 暗灰色粘質土
- 6 暗青灰色砂
- 7 暗茶褐色砂質土
- 8 黄灰色砂
- 9 暗灰色粘砂
- 10 暗灰色砂質土
- 10' 黒灰色粘砂
- 11
- 12
- 13
- 14
- 15

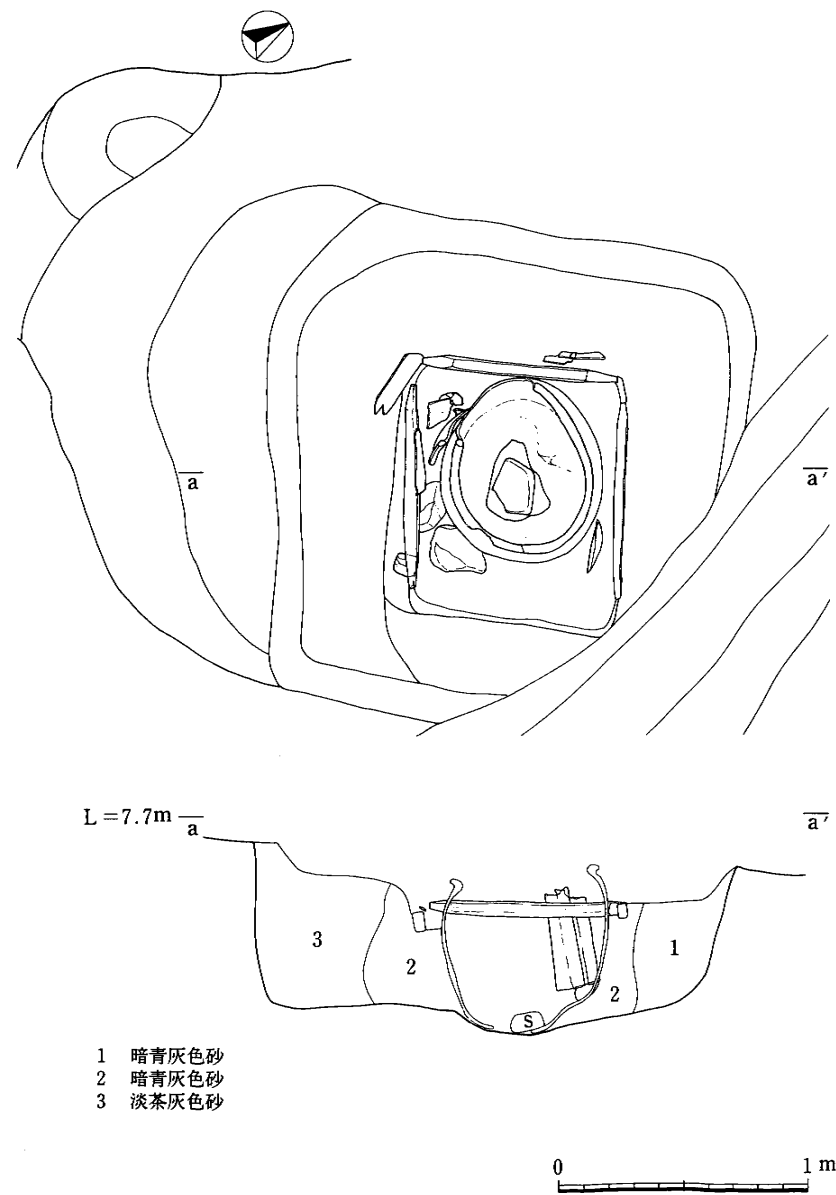
第27図 3号井戸 (1/30)



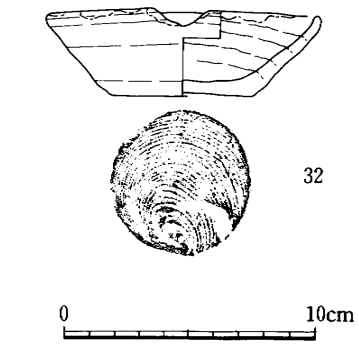
第28図 3号井戸出土遺物(1/6)



第29図 4号井戸 (1/30)

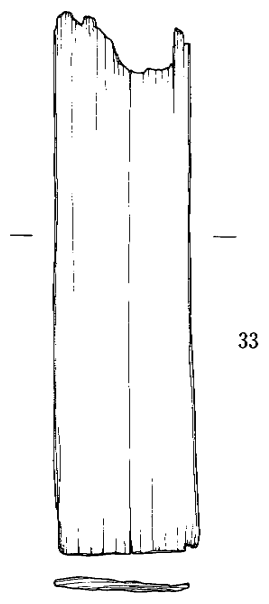


第30図 7号井戸 (1/30)

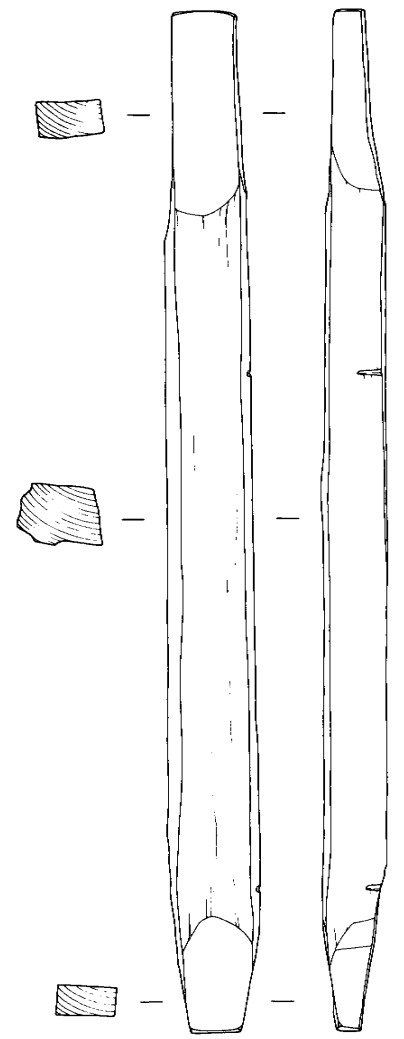


32

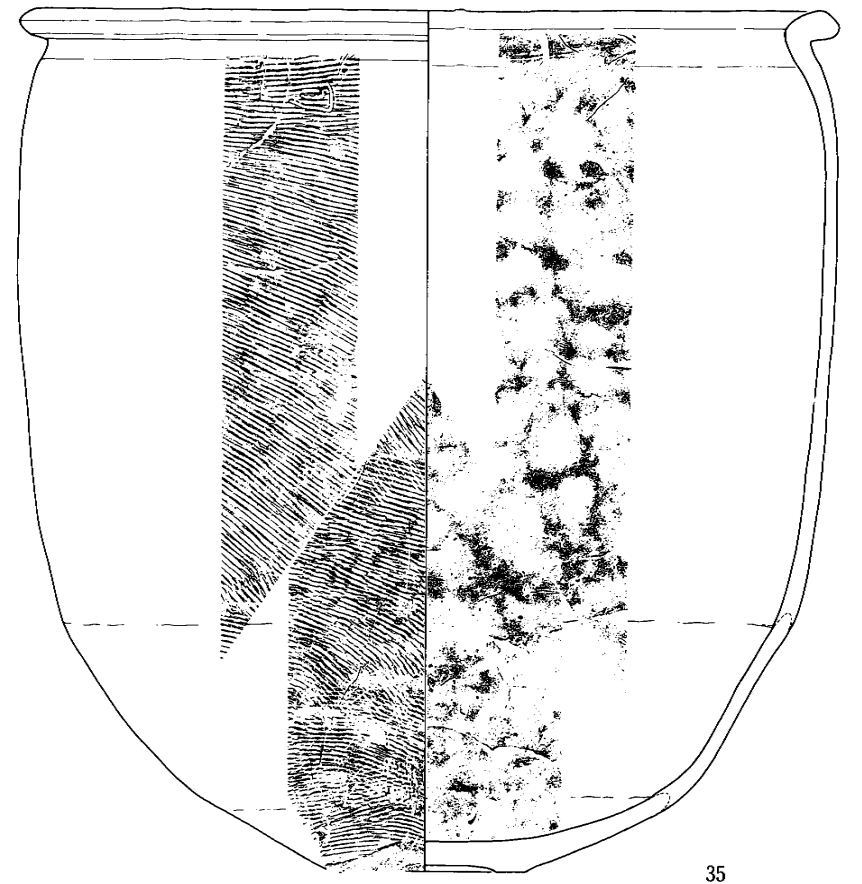
0 10cm



33



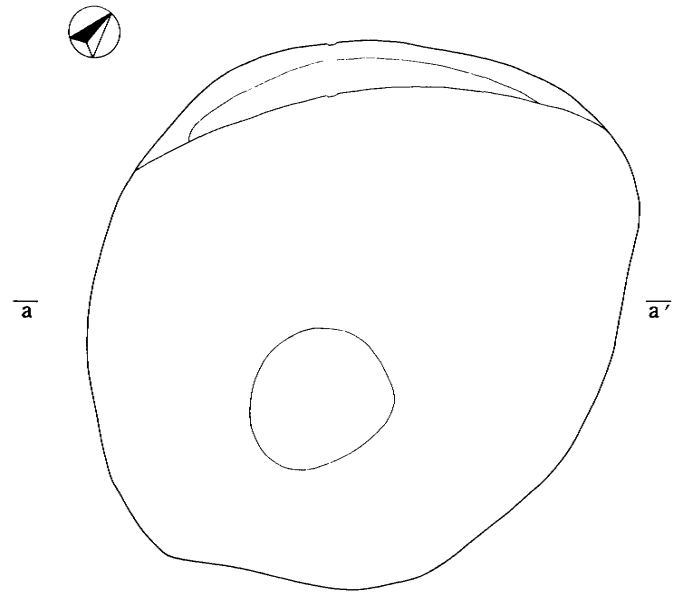
34



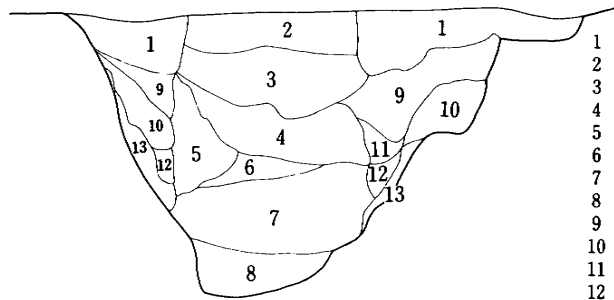
35

0 20cm

第31図 4・7号井戸出土遺物 (1/6 32は1/3)



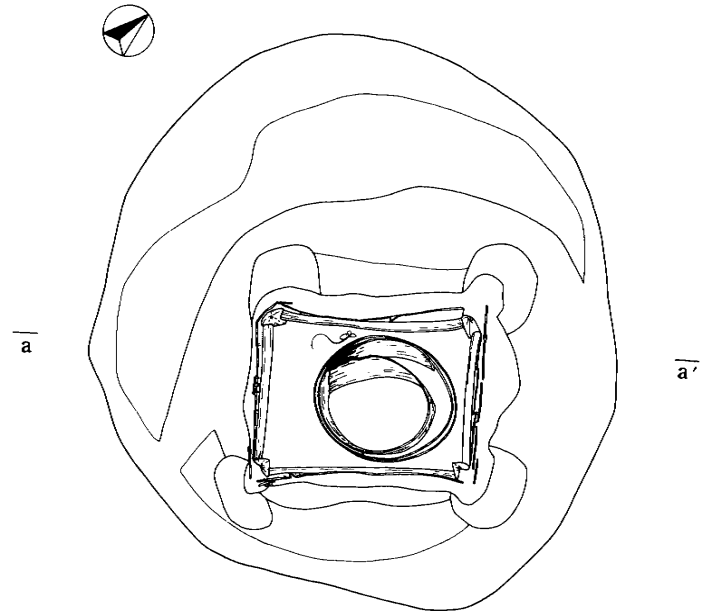
L = 8.7m
a



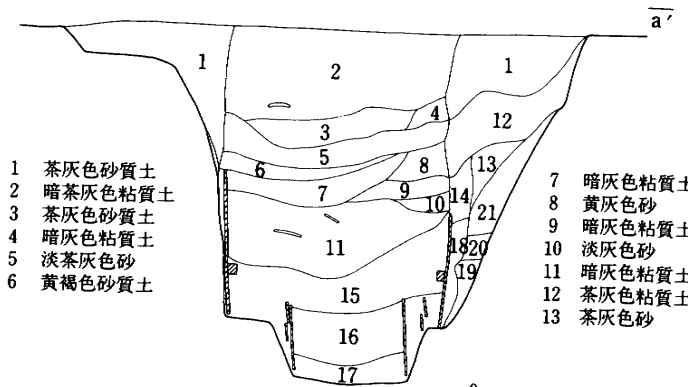
- 1 茶灰色砂質土
- 2 暗茶灰色粘質土
- 3 暗灰色粘質土
- 4 暗灰色粘質土
- 5 暗灰色粘質土
- 6 灰色砂
- 7 暗灰色粘質砂質土
- 8 黄灰色砂
- 9 暗灰色粘質土
- 10 茶灰色砂質土
- 11 暗灰色粘質土
- 12 暗灰色粘質土
- 13 淡茶灰色砂

0 1 m

第32図 8号井戸 (1/30)



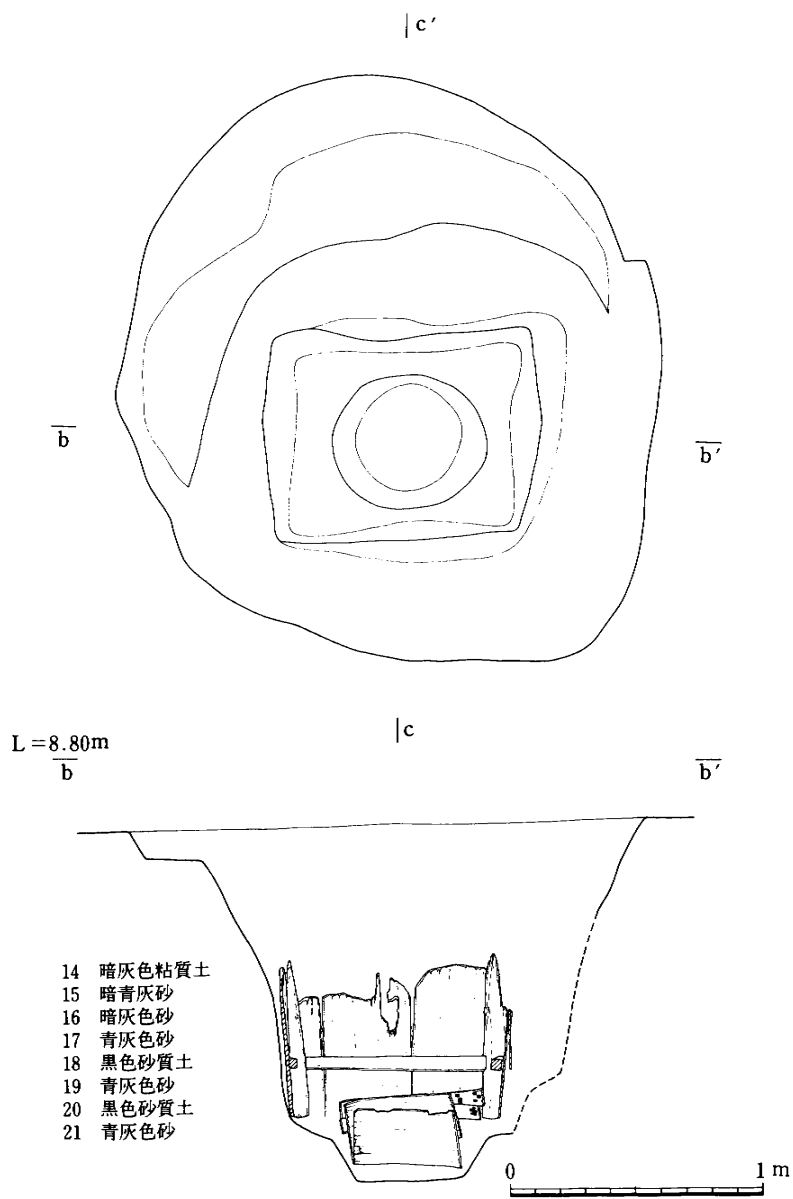
L = 8.7m
a



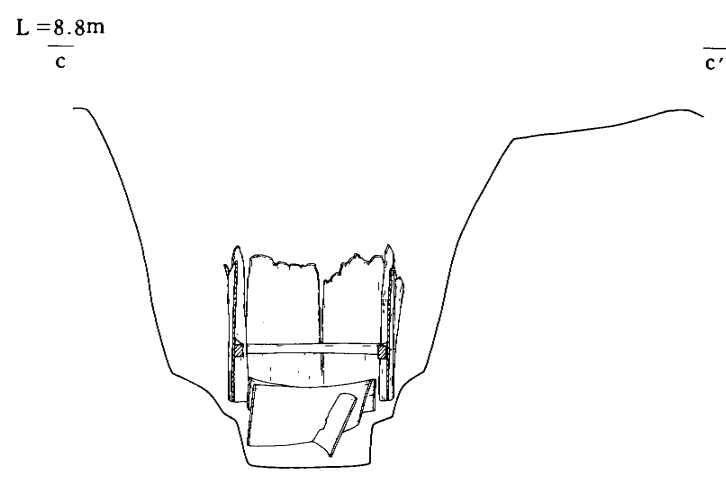
- 1 茶灰色砂質土
- 2 暗茶灰色粘質土
- 3 茶灰色砂質土
- 4 暗灰色粘質土
- 5 淡茶灰色砂
- 6 黄褐色砂質土
- 7 暗灰色粘質土
- 8 黄灰色砂
- 9 暗灰色粘質土
- 10 淡灰色砂
- 11 暗灰色粘質土
- 12 茶灰色粘質土
- 13 茶灰色砂

0 1 m

第33図 9号井戸 (1) (1/30)



第34図 9号井戸〔2〕(1/30)



最大で3cmを計る。横断面形は三角形状を呈す。両端から、15cmほど入った部方に幅6cm程の相欠きを入れてる。下部の相欠きは明瞭だが上部の物は不明瞭になってしまっている。

3号井戸の時期を特定できる遺物はないが、中世に至る遺物の出土はない。

4号井戸
遺構(第29図)

2D-c1区で検出されている。土層断面の観察から10号溝より新しく、11号溝より古いことが確認されている。大小の曲物を2段に重ね井戸側としている。上部の施設は残っていなかったが、南西角に杭が残っている事から何らかの構造物が存在していた可能性が高い。

井戸掘り方は1辺1.4m程の隅円方形を呈し、井戸側部分も同形に掘り凹めた2段掘りとなる。深さは最深部で93cm程である。井戸側はやや隅に寄った位置に埋設されている。

遺物(第31図32)

井戸側に使用されていた曲物は遺存状態が悪く図化していない。いずれも下部にタガがまかれるものである。

32は井戸埋土中位あたりから出土した土師器碗である。口径10.7cm、底径5.7cm、器高3.3cmを計る。口唇外面はナデられ、明瞭ではないものの面取りされた様になる。内面には粘土紐の巻き上げ痕が明瞭に残っている。また、口縁端部内面には油痕が全周し、割れ口にも付着している。P72出土の第22図12に器形、法量、色調、胎土とも極似している。

他は小片であり図化していない。

7号井戸
遺構(第30図)

1H-b4区で検出された。76号溝掘り下げ時に確認され、溝により上部が破壊されている。縦板組隅柱横棧どめの井戸側を持ち、珠洲焼大甕が水溜として埋設されていた。縦板は数枚、横棧は3本、隅柱は1本が残存していた。甕は口縁の一

部が破損し、底が抜かれている。この穴をふさぐような位置に礫があるが意図的な物であるかはわからない。破損した口縁部は甕のすぐ横の位置にあり、井戸使用時か、溝掘削時にこわれた物であろう。甕底部横に礫2個でささえをしたのち、打ち割った底部片とともに水溜掘り方は埋めもどされている。よって甕は、わずかに底部片を欠くものの完形品であり、井戸構築時に、底が抜かれたものと考えられる。水溜の掘り方は一辺1.9m程の隅円方形で、溝底から0.7m程の深さである。底はほぼ平らで、甕の置かれていた部分がわずかに凹む。井戸本来の深さは約1.5mである。井戸本来の掘り方ははっきりとはしないが、一辺3m程の隅円方形と思われる。土器等は若干の破片のみしか出土しなかった。

遺物 (第31図33~35)

33は井戸側に用いられた縦板で、上部は欠損している。現存長43.2cm、幅10.8cm、最大厚は0.9cmである。

34は井戸側横棧の内的一本である。長さ81cm、幅6.6cm、厚さ4.8cmを計る。両端を削りホゾ状に仕上げている。削り出す長さは両端で異なる。

35は水溜として利用されていた珠洲焼甕である。全体にややゆがんでおり、口縁は楕円形となっている。図化した位置で口径65.4cm、胴部最大径64.8cm、器高68.4cmを計る。口縁は短く外反し、胴部はずん胴である。底部はあげ底状となる。14世紀代の所産であろうか。

8号井戸

遺構 (第32図)

2H-C1区に位置する。本井戸は井戸構造材が残っておらず、土層断面からすると構造材は抜き取られたと思われる。

井戸掘り方は不整形を呈し、2.2m×2.1m程の規模である。深さは1.1mを計る。土層断面図の1、9~13層が掘り方埋土、2~8層が、構造材抜き取り後の推積土と考えられる。時期を特定できる様な遺物の出土はない。

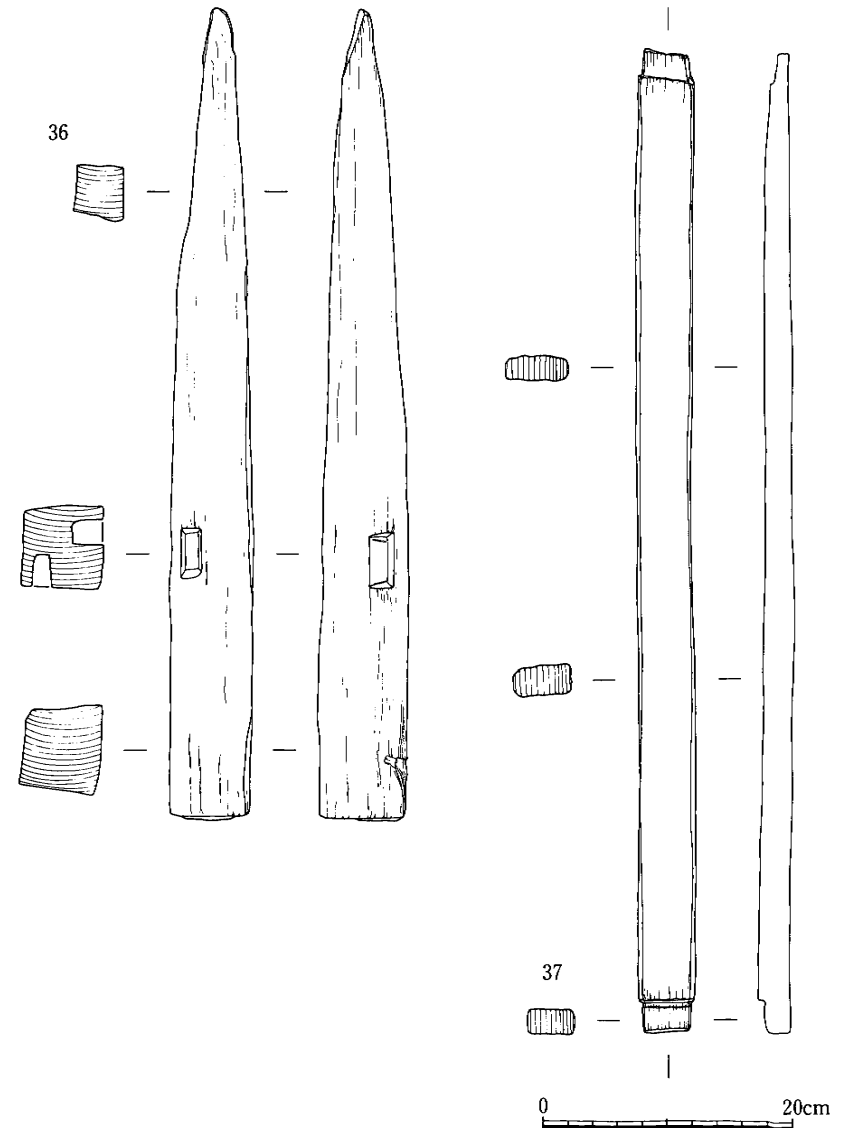
9号井戸

遺構 (第33、34図)

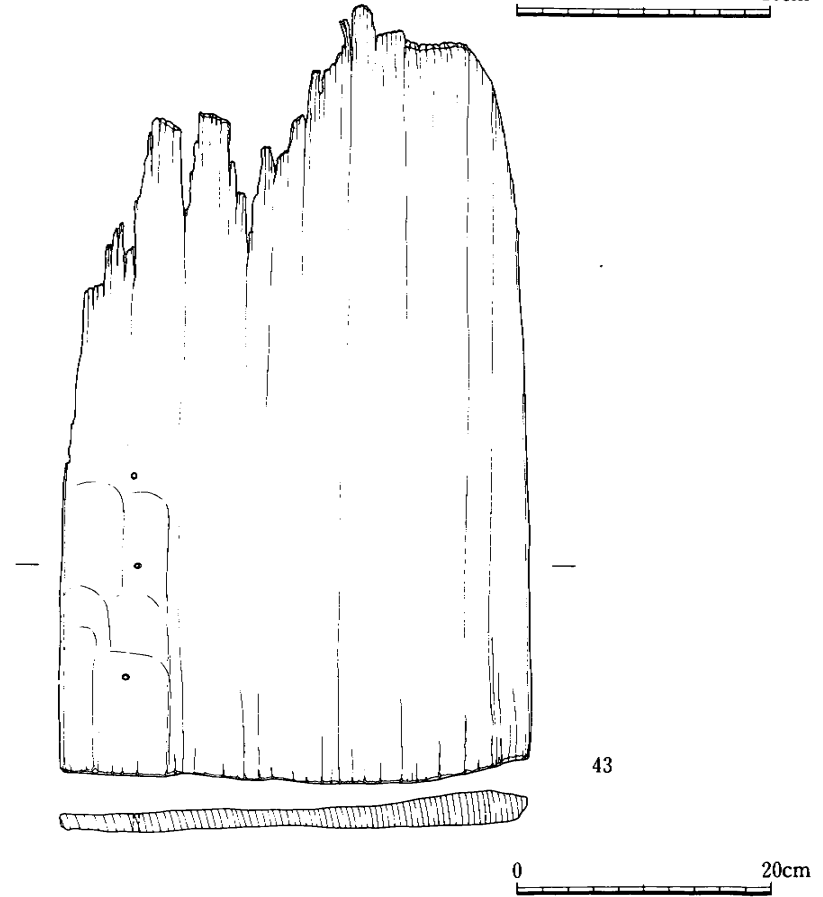
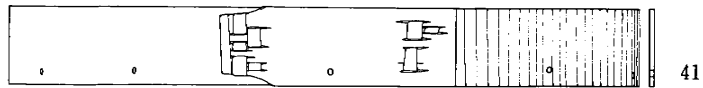
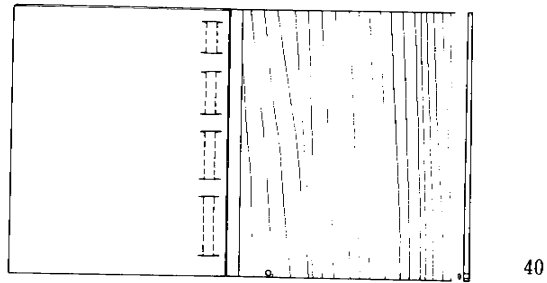
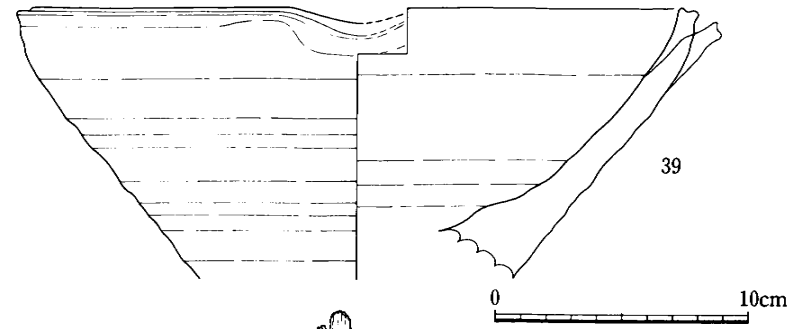
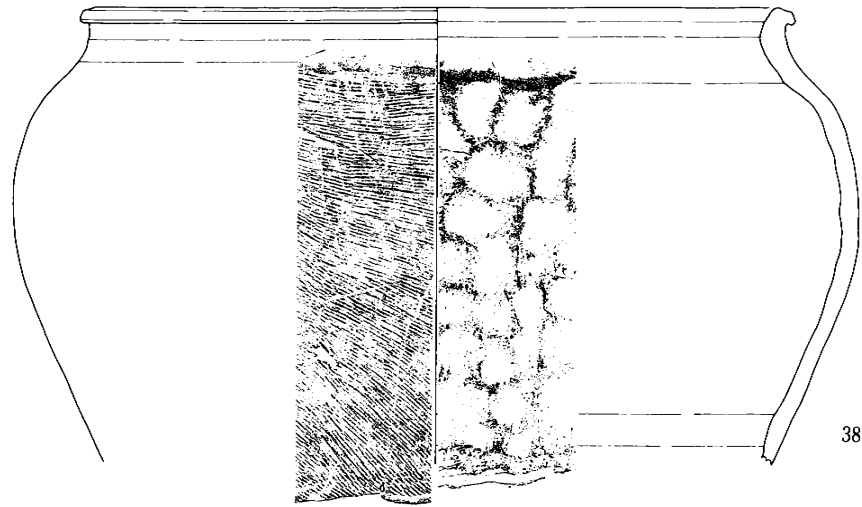
1H、2H区にまたがって検出された。8号井戸と並ぶ様な位置にある。縦板組隅柱横棧どめの井戸側を持ち、底には曲物を用いた水溜が設けられている。井戸側は、0.9m×0.7mの長方形を呈し、高さ、現存長で0.6m程を計る。縦板は厚く、幅の広いものが多く用いられ、2重とした部分もある。井戸掘り方にはこの井戸側を三カ月状にとり囲む様な平坦面が設けられている。

水溜には曲物が3点用いられており、径20cm、高さ6cm程の物2点を上位に、径37cm、高さ21cm程の物1点を下位に用いている。

井戸掘り方は、径7.2m程の円形であるが、前述した様に平坦面が設けられている。井戸側埋設部分は一辺1.6m程の隅円方形の掘り込みとなり、底付近は井戸側



第35図 9号井戸出土遺物 (1/6)



第36図 9号井戸出土遺物 (1/6 39は1/3)

と同形の形となる。さらにその中央には径0.6m程の円形に水溜埋設部が掘り込まれている。深さは検出面から1.4mを計る。

井戸の覆土からは本遺跡の井戸としてはわりと多くの遺物が出土している。覆土下部からは小形の曲物が1点出土しているが、残りが悪く凶化していない。覆土中位から上位にかけては珠洲焼片や土師器片が出土しており、珠洲焼2点を凶化している。いずれも他の遺構、包含層と接合関係を持ち、井戸内に廃棄されたものと思われる。

遺物 (第35、36図)

36は井戸側隅柱の内の1本である。他も同様な形態である。長さ64.2cm、幅6.6cm、厚さ6.6cmである。上部が尖頭状を成す角材で、下から19cm程の所に長さ3.6cm、幅1.8cm、深さ2.5cm程のホゾ穴が、片側に寄った位置に穿たれている。ホゾ穴が寄った方が縦板側である。

37は横棧の内の1本で長さ78cm、幅4.5cm、厚さ2.4cmを計る。ホゾは外側のみを落とし造り出すものである。ホゾを造り出した側を縦板側に組み、組み込んだ状態で隅柱の側面と面一となる。

38は珠洲焼甕である。口径57cm、胴部最大径67.8cmを計る。やや肩の張る胴部形態となり、最大径は上位にある。口縁部は胴部肩のすばまりから連続する様内傾して立ち上り、短くくの字に外反する。端部は短くやや下方に引き出され、上面には凹線状の凹みが残る。13世紀代の物と思われる。同一個体の破片が72、92号溝や、G～I区の包含層から出土している。

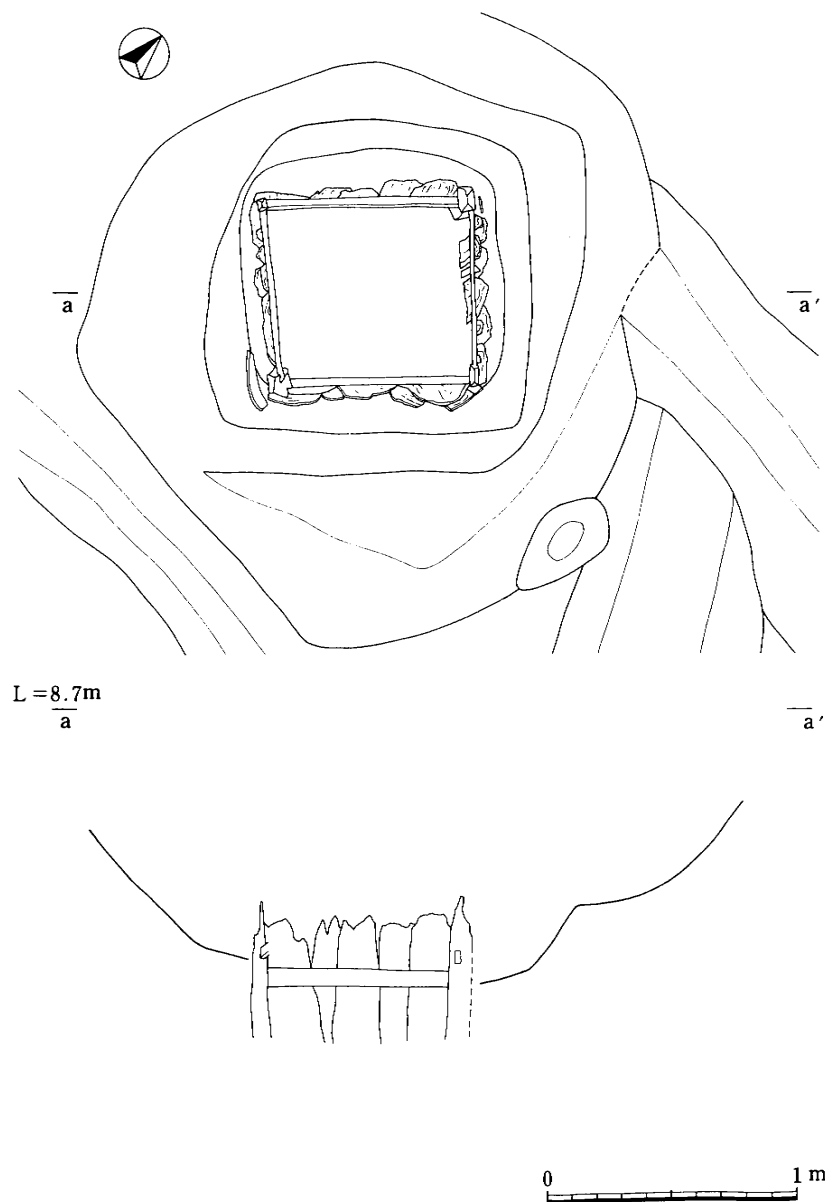
39は片口鉢である。口径28cm、器高10.8cm以上、底径は12cm強となろう。底部から直線的に開き、口縁部でやや直立ぎみとなる。口唇部は凹線状となる。卸し目は施されず、内面には底部から体部にかけて、自然釉が付着している。これも13世紀代であろう。やはり、72、92号溝から同一個体の破片が出土している。

40～42は水溜に使用された曲物である。42は径36.6cm、器高21.1cmを計る。綴じ皮は検出時点ですでに失われていた。1列4段綴じで、下端に6ヶ所の木釘穴が残る。内2孔は並列している。内面には縦平行線のケビキを施す。

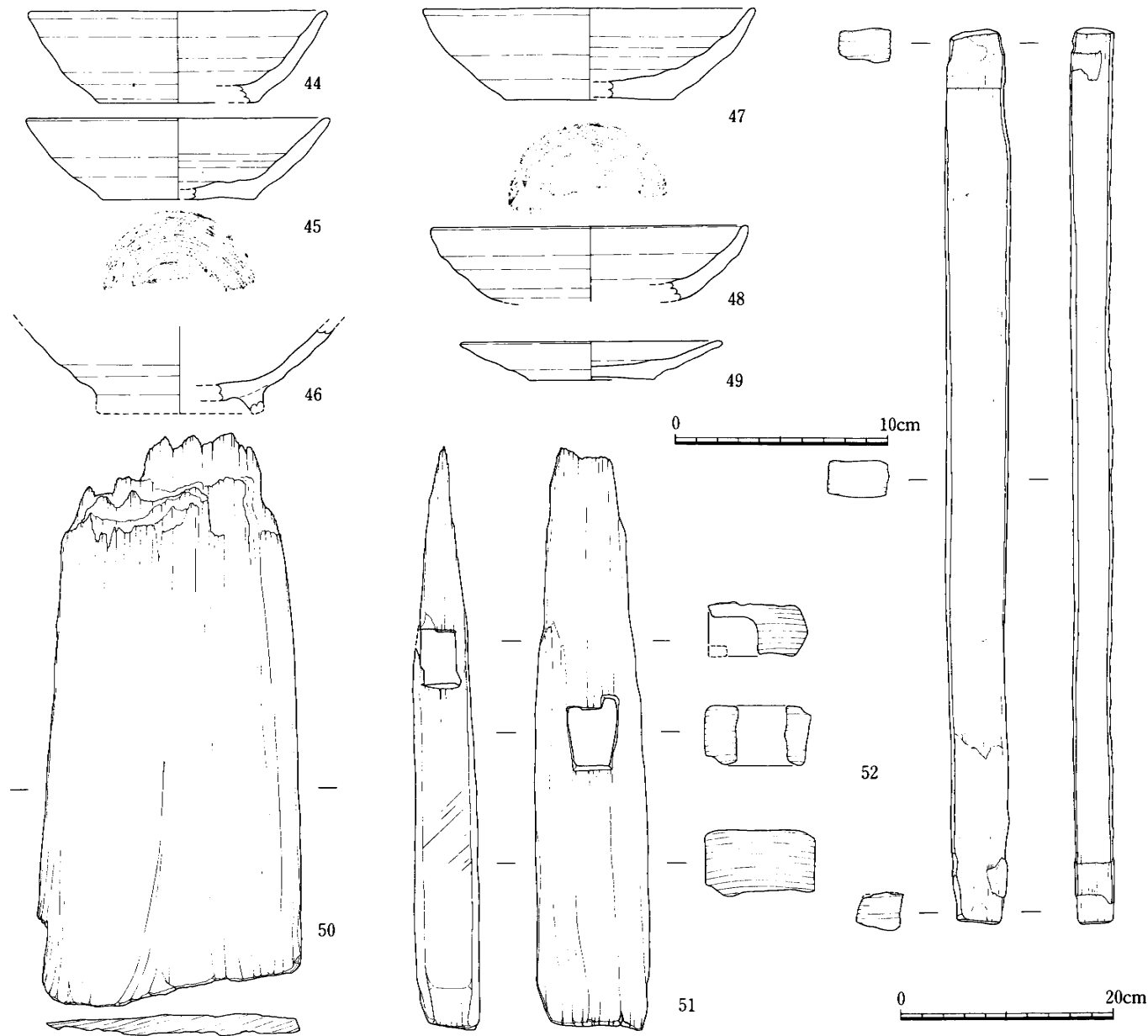
41はタガ部分と思われる。径51.6cm、器高6cm、を計る。接合部は広くとられ、外側端は幅を狭くしている。綴じ合せは2ヶ所で外側端側が3段、2段の2列、内面端側が2段、1段の2列である。下端に9ヶ所の木釘穴が残り、内面に縦平行線のケビキが施される。

42もタガ部分と思われる。径52.2cm、器高6.5cm計り、41よりひとまわり大きい。41と同様接合部は広くとられ、外側端を幅狭に加工している綴じ合せも2ヶ所で、2段、1段、1段の3列と2段、1段の2列としている。この両側にも綴じ痕が認められる。

43は井戸側縦板の内の1枚である。縦板は凶化した様な物が主体を占る。現存



第37図 10号井戸 (1/30)



第38図 10号井戸出土遺物 (44~49は 1 / 3 50~52は 1 / 6)

長61.8cm、幅37.8cm、最大厚2.5cmを計る。片側下方に削りの痕跡と小孔が3孔残されている。

10号井戸

遺構 (第37図)

2I-a2区で検出された。82、84、93号溝と切り合っているが、82、84号溝よりは古いが、93号溝との切り合いははっきりとつかめなかった。井戸側は縦板組隅柱横棧どめで、0.8m×0.6mの規模である。井戸掘り方はやや不整形な隅円方形と思われる、一辺は2.3m程である。南東側に平坦面を持ち、井戸側埋設部は1辺1.2m程の隅円方形に掘り込まれている。深さは0.9mとやや浅い。井戸覆土からは、土師器碗、皿、須恵器片が出土しているが、最下層から珠洲焼瓶かと思われる底部片が出土している。

遺物 (第38図)

44、45、47、48は土師器碗である。口径は14.3cm~16cm、底径7.5cm~7.8cm 器高4cm前後である。45は直線的に開く体部を有するが、他は内湾ぎみに立ち上がる。

46は土師器有台碗である。無台の物に比べ薄い作りとなっている。

49は土師器皿で口径12.5cm、底径6cm、器高1.8cmを計る。碗類に比べ胎土中の砂粒が多い。

50~52は井戸側の部材である。50は縦板で、現存長54cm、幅24.6cm、厚さ1.8cmを計る。縦板は凶化した様な物が主体を占める。51は隅柱である。現存長55.2cm、幅10.2cm、厚さ6cmを測る。ホゾ穴は位置をたがえて穿たれ、広い面に低位で貫通する穴を、狭い面上位の貫通しない穴をあけている。それぞれ下端から24cm、32.4cmを計る。52は横棧で、長さ84cm、幅5.4cm、厚さ3.6cmを計る。両端側面をわずかに削っている。

出土した土師器類はおそらく93号溝中の物が流れ込んだものと思われる。珠洲焼と思われる陶器片では時期の特定ができない。

11号井戸

遺構 (第39図)

2J—a1、a2区にまたがって検出された。96号溝に上部を破壊されている。また、井戸側等の遺存状態は極めて悪い。縦板組隅柱横棧どめの井戸側で曲物を水溜として用いたものと思われるが、隅柱や横棧は残っていない。井戸側の規模は1辺0.7m程と思われる。掘り方も上部がはっきりとしない。井戸側の部分は1辺1.4m程の方形に掘り込まれている。深さは0.6m程である。覆土上部から珠洲焼甕、壺の底部が重なった状態で出土している。

遺物 (第40図)

53、54は土師器小皿である。53は口径9.3cm、底径6.4cm、器高2cmを計る。体部には2段のナデが施されている。茶灰色を呈し、砂粒を含む。54は口径9.7cm、底径5.9cm、器高2cmを計る。やはり2段のナデが施されるが53ほど明瞭ではない。薄い橙色を呈し、砂粒を多く含む。

55は珠洲焼片口鉢である。底径10.2cmを計り、卸し目の条数は12条を数える。

56は珠洲焼甕底部と思われる。底径16.2cmを計る。外底面に陶片が付着している。

57は珠洲焼壺底部と思われる。底径は20.7cmを計る。内面には指頭圧痕が残る。

11号井戸の時期をはっきりと特定できる遺物はないが、13世紀代と思われる。

12号井戸

遺構 (第41図)

2F—a1、a3区にまたがって検出された。7号溝と切り合い関係にあるが、前後関係は、はっきりつかめなかった。縦板組隅柱横棧どめの井戸側を持ち、曲物を水溜として埋設している。井戸側の規模は0.8m×0.9mで、高さは0.9mを計る。縦板は横棧の他に横板でもとめられている。井戸掘り方は円形で径2mを計る。井戸側や水溜の為の掘り込みは持たない。深さは1.6mを計る。

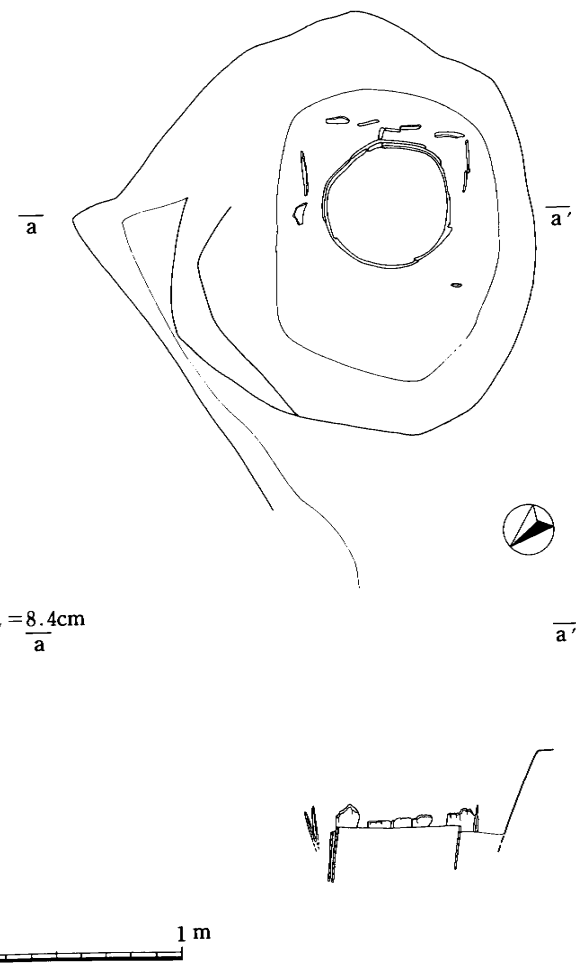
遺物 (第42図)

58～61は井戸側の部材である。58は隅柱である。現存長86.4cm、幅8.4cm、厚さ6cmで、ラフな五角柱に整形されている。ホゾ穴は段をずらして設けられ、幅広の側面の方が低位に設けられている。下端からはそれぞれ40cm、48cmを計る。

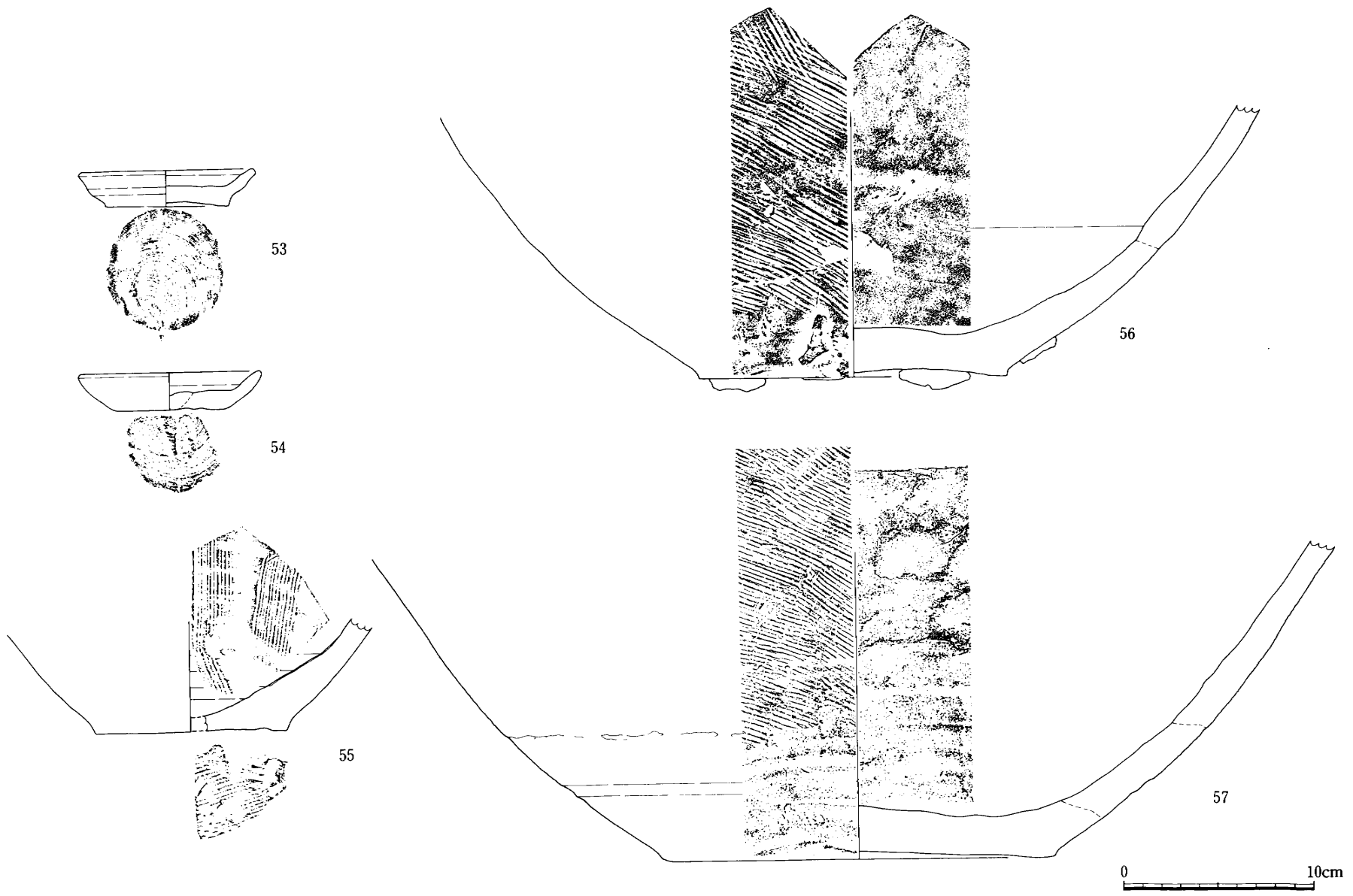
59は縦板で、現存長118.2cm、幅13.8cm、厚さ2.4cmを計る。縦板はこの手の物が主体を占る。

61は横棧で長さ85.8cm、幅6cm、厚さ3.6cmを計る。両端の広い側面を削りホゾを造り出す。

60は水溜となっていた曲物で径39cm、器高27cmを計る。上部にはタガが巻かれ、下端には木釘穴が認められる。曲物の本体の綴じ合せは1列4段、タガは2



第39図 11号井戸 (1/30)



第40図 11号井戸出土遺物 (1 / 3)

列で2段、4段となっている。本体内面には縦平行線のケビキが施される。

62は珠洲焼片口鉢と思われる。口径27.9cmを計る。口縁端部は強いナデが施され屈曲し、卸し目は施されていない。他に卸し目の施される物の破片がある。

13号井戸

遺構(第43図)

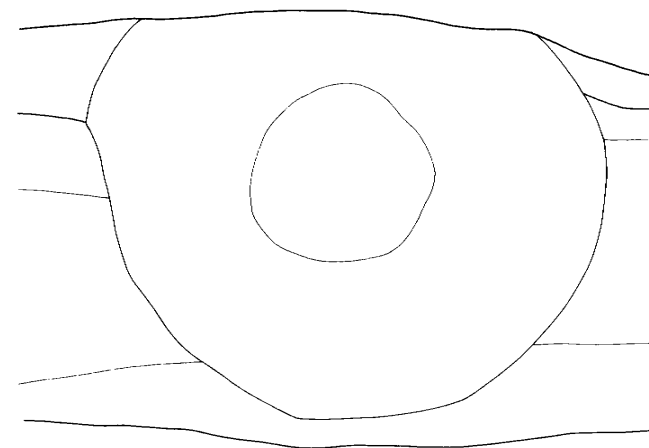
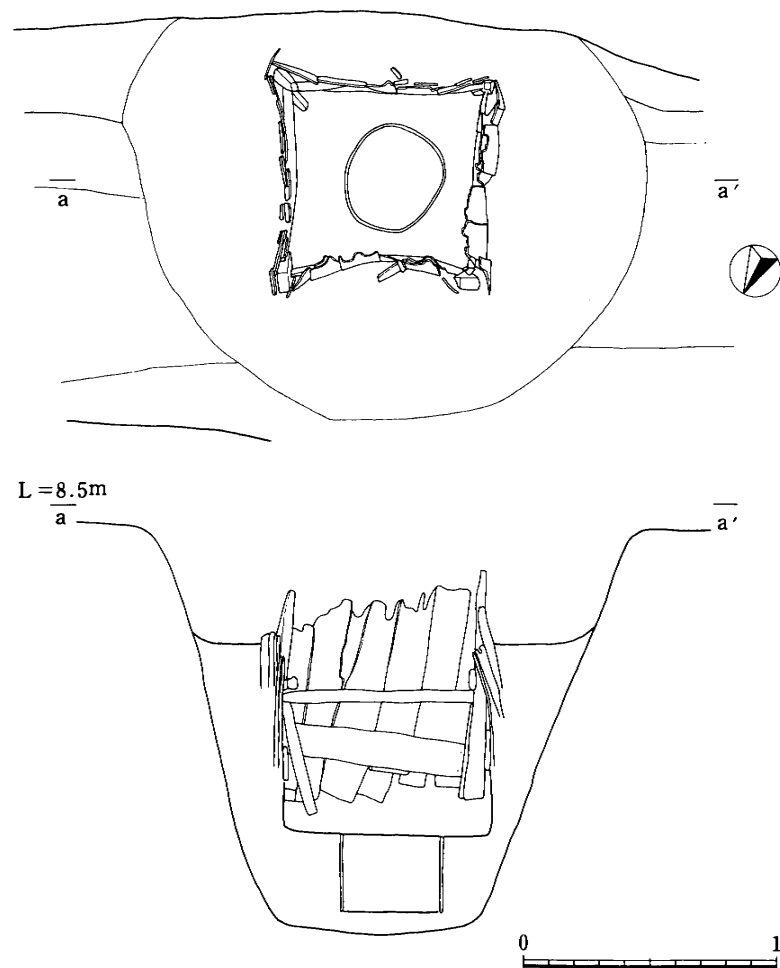
1C、1D区にまたがって位置する。101号溝掘り下げ時に確認され、上部は同溝により破壊されている。また、湧水が激しく、平面図すら正確な物を残せなかった。わずかな縦板と隅柱が1本残っており、縦板組隅柱横棧どめの井戸側を持った物と思われる。下位には小型の桶が水溜として埋設されていた。掘り方は1辺3m程の隅円方形と思われる。井戸側部分は1辺2m程の隅円方形に掘り込まれている。深さは1.8m程である。

遺物(第45図63、64、68)

63は水溜として用いられた桶である。口径50.7cm、底径45.3cm、器高41.4cmを計る。幅7cm程度の縦板を17枚用い組んでいる。タガが口縁部に1条、底部付近に2条巻かれていた痕跡がある。外面には削り痕が残るものの、側面は加工痕が見い出せないくらい丁寧に削られている。口唇外面は面取りが施される。

64は隅柱で現存長52.8cmで一端は折れている。本来は角材であったのだろうか。

68は木製の椀である。底径は8.4cmを計る。体部に1条の凹線が施されている。



第41図 12号井戸(1/30)

他に、珠洲焼壺、片口鉢の小片がある。

14号井戸

遺構(第44図)

2K-C1区に位置する。102号溝に上部半分をこわされている。縦板組隅柱横棧どめの井戸側を有する。井戸側の規模は0.6m×0.5mでやや小型である。高さは30cm程である。井戸掘り方は隅円長方形で1.6m×1.4mで、井戸側埋設部分は1辺0.7m程の隅円方形に掘り込まれている。深さは1m程である。

遺物(第45図)

図示したのは井戸側部材である。65は横棧で両端をたがいちがいに相い欠き状に加工している。長さ52.8cm、幅5.4cm、厚さ2.7cmを計る。

66は隅柱で両端を尖がらせている。横棧を受ける部分はコの字状に切り欠いている。横棧の1本をこの切り欠きで受け、交差するもう1本は柱側面できさえるものと思われる。長さ45.6cm、幅5.4cm、厚さ3.6cmを計る。

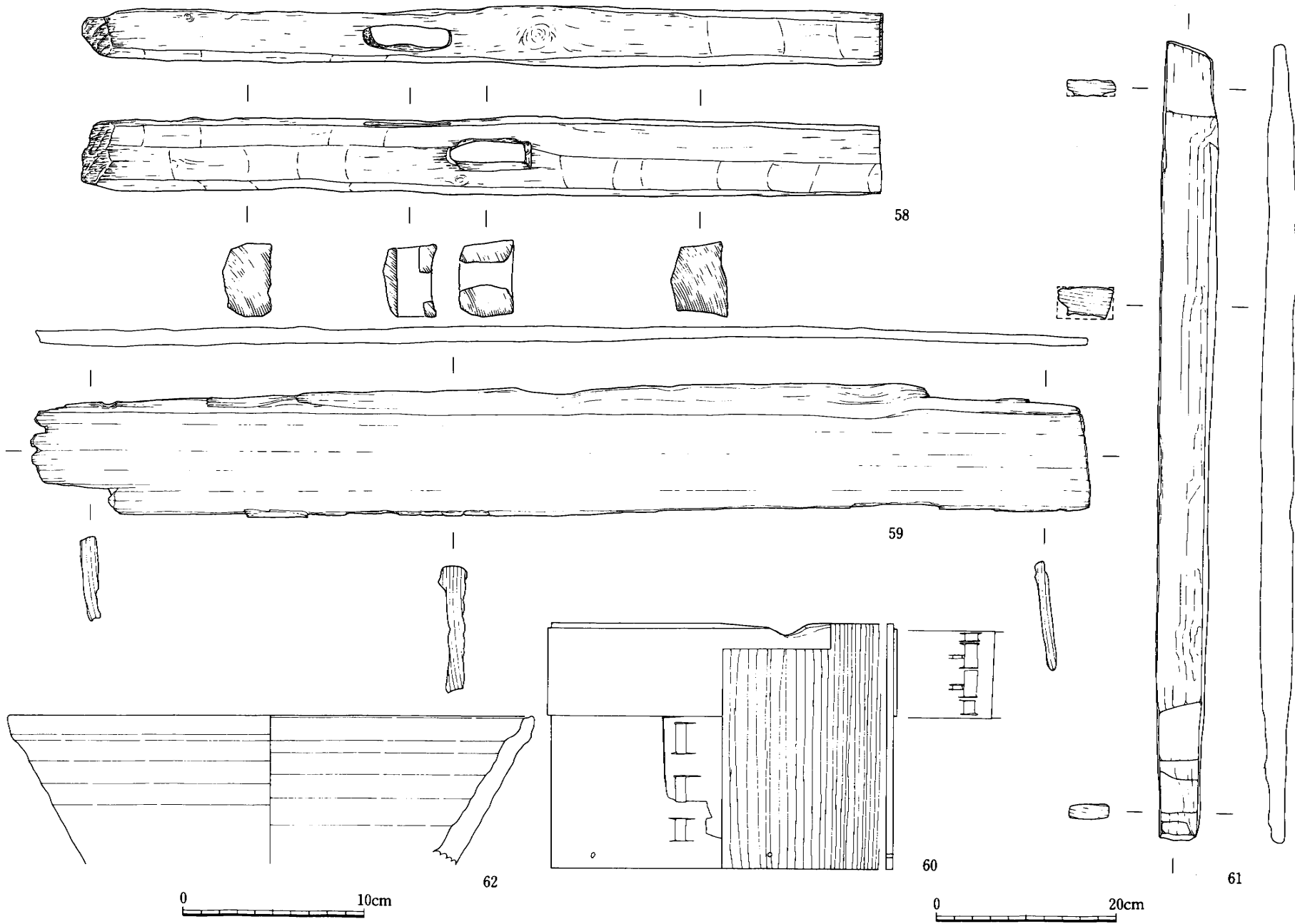
67は縦板である。現存長36cm、幅11.4cm、厚さ0.6cmを計る。

他に土師器小皿と珠洲焼小片がある。

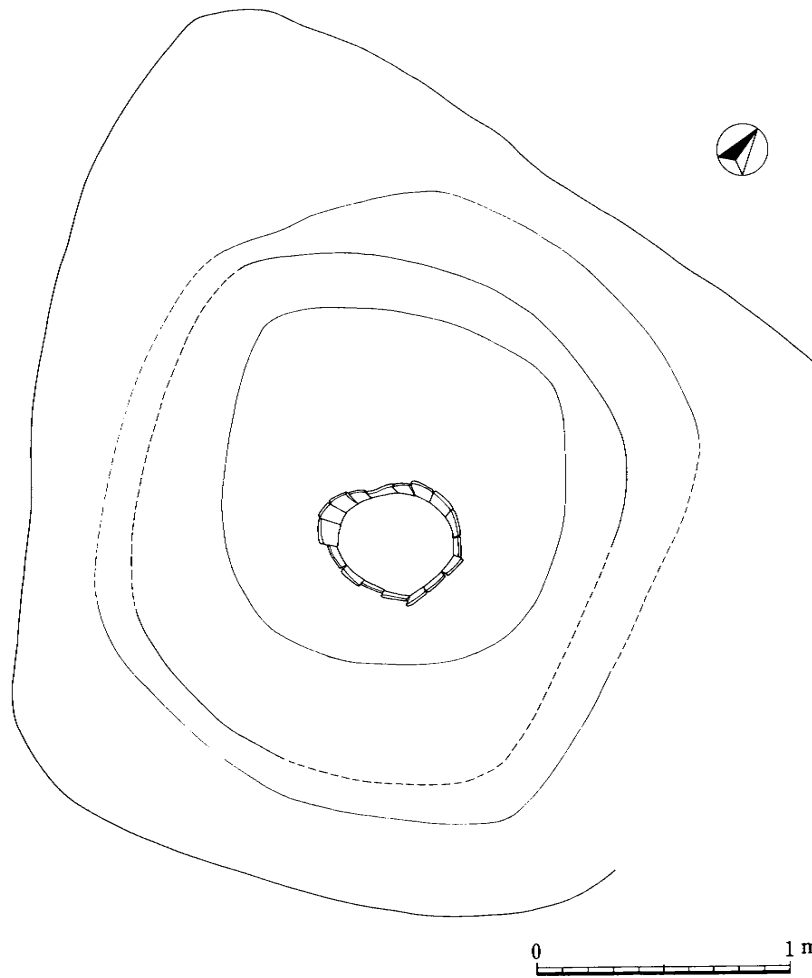
15号井戸

遺構(第46図)

2M-a1区に位置する。上部を攪乱により一部こわされている。また、106号溝



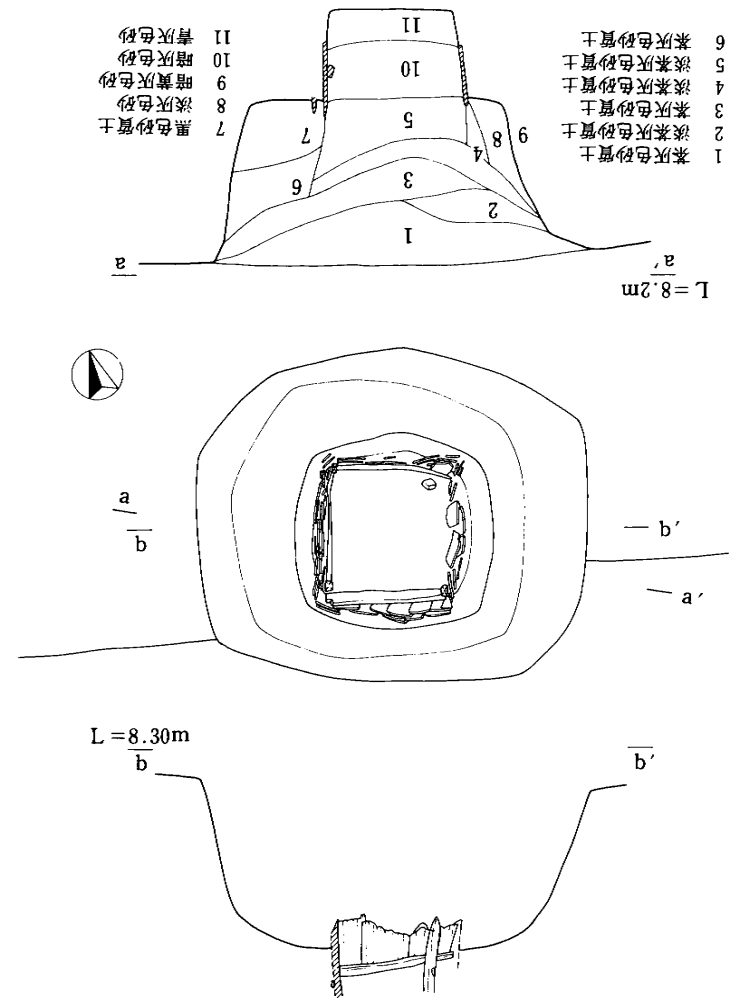
第42図 12号井戸出土遺物 (1/6) 62は (1/3)



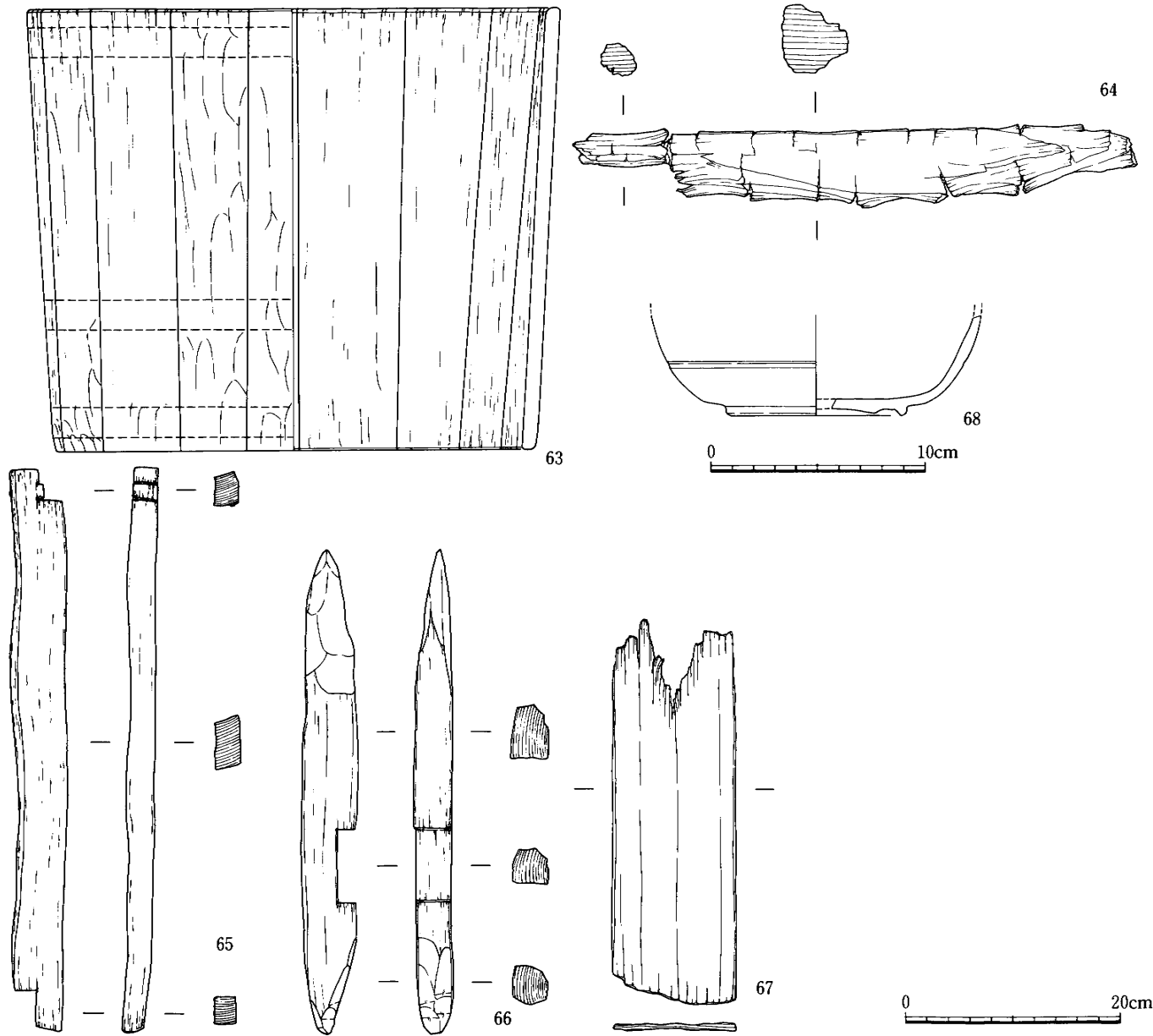
第43図 13号井戸 (1/30)

と切り合い関係にあるが、同溝より新しい。井戸側はこれまでの物と異なり、下部は横板井籠組とし、この上に隅柱と横棧を組み、これらの外側に縦板を並べるといった構造をとっている。上部の隅柱、横棧等は完全ではなく、抜き取られたと思われる。規模は1辺0.9mの方形で、上部の高さ0.4m、下部の井籠部分で0.33mを計る。

井戸掘り方は隅円方形で1辺1.8m、井戸側部分を同形に掘り込んでいる。井籠部分との差は10cm程と狭い。深さは1.2mを計る。



第44図 14号井戸 (1/30)



第45図 13・14号井戸出土遺物 (1/6 68は1/3) (63、64、68は13号井戸、65~67は14号井戸)

遺物 (第47~49図)

69は土師器小皿である。本遺跡では珍しい非クロ整形の物で、口径7.7cm、底径6cm、器高1.4cmを計る。体部に1段のナデを施し、底部には指頭圧痕が残る。橙色を呈し、細かい砂粒を含む。

70は珠洲焼甕の口縁部破片である。体部は焼けゆがみによって大きく波打っている。口縁は分厚い嘴状で、短く外反する。

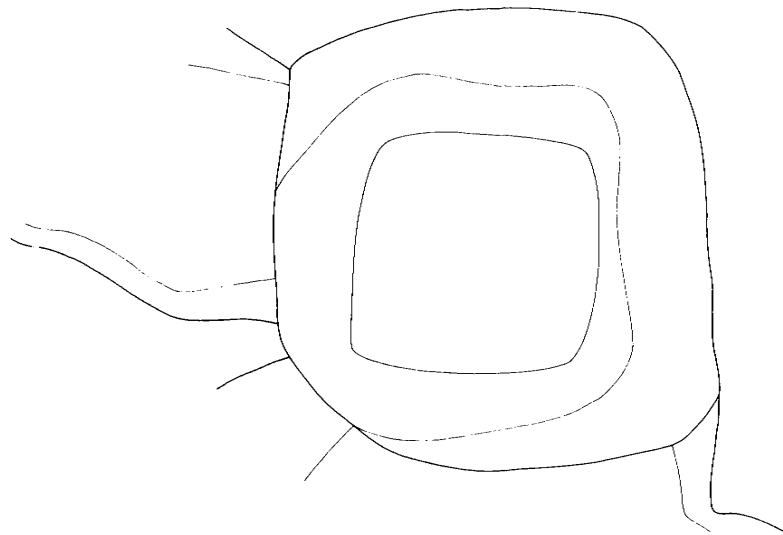
71は珠洲焼片口鉢である。口径は34.8cmを計る。体部は直線的に開き、口唇端部は平坦な外はぎ状に整形されている。卸し目は16条で、間隔をあけて施工される様である。

72も珠洲焼片口鉢である。口径は34.8cmと71と同じである。体部はわずかに内湾ぎみに立ち上がり、口唇端部等の整形は71に類似する。卸し目の条数は8条で波状に引かれている。まず、口縁に並走する1単位が引かれ、そこから、底面に向けて、やや間隔をあけて施されている。

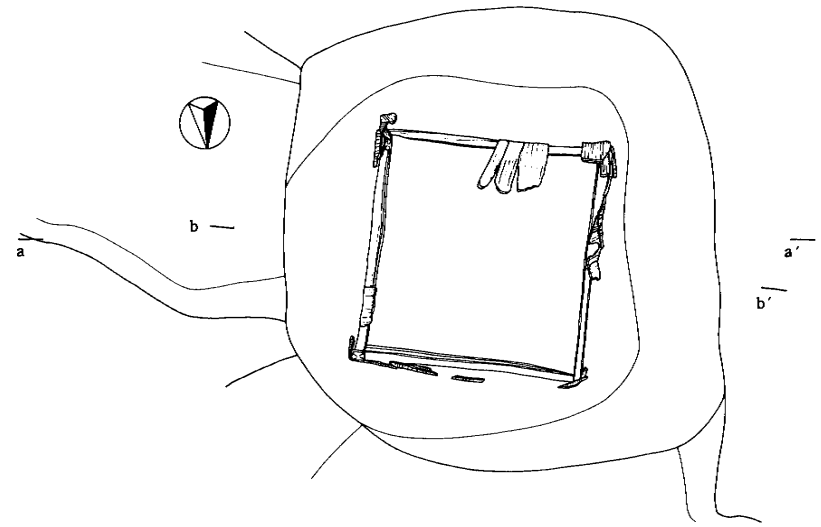
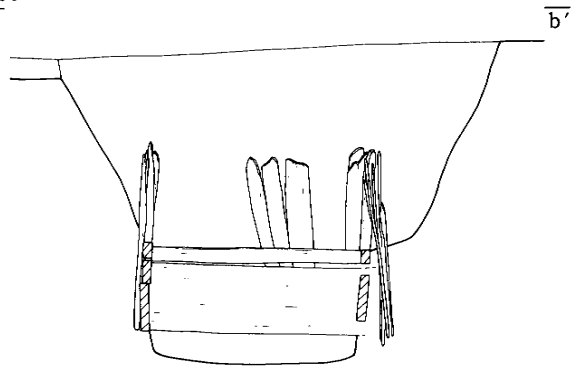
73、74は横板である。73は長さ92.4cm、幅5.7cm、厚さ2.4cm、74は長さ93.3cm、幅6cm、厚さ2.7cmである。目違いホゾで組まれている。73には片側端近くにもホゾ穴があり、転用がうかがえる。

77、78も横板である。77は長さ90cm、幅23.4cm、厚さ3.3cm、78は長さ90cm、幅27cm、厚さ3cmを計る。やはり目違いホゾ状に組まれている。また、井戸内側として組まれる面の両端ははつられている。横板は、75、76の様な幅の狭いものを上位に、77、78の様に幅の広いものが下位に2段に組まれるが、1面のみ3段となっている。

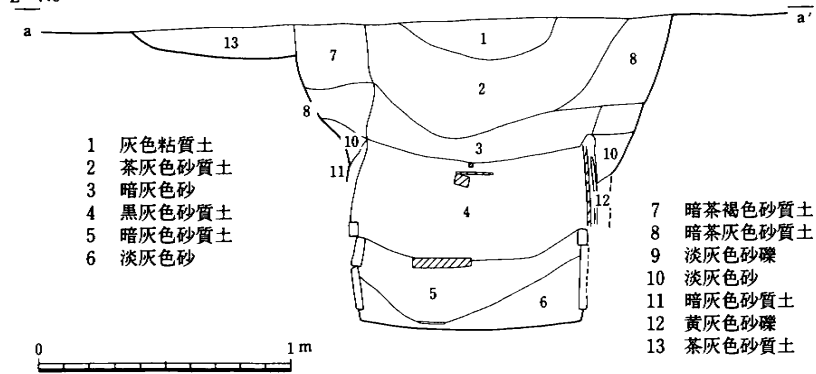
75はこの井籠組の上に乗せられていた隅柱である。現存長55.8cm、幅9.5cm、厚さ8.4cmを計る。上端が折れておりはっきりしないが、高さを変え切り欠きを入れ横棧を支持したものである。この切り欠きの状態からすれば、角材ではなく板状の物が用いられていた可能性が高い。



L = 7.90m
b



L = 7.8m



第46図 15号井戸 (1/30)

76は縦板である。現存長55.2cm、幅15.9cm、厚さ0.9cmを計る。多用されているのはこれよりも長く70cmを越えるものもある。

15号井戸はその出土遺物より13世紀ごろに構築されたものと思われる。

16号井戸

遺構 (第50図)

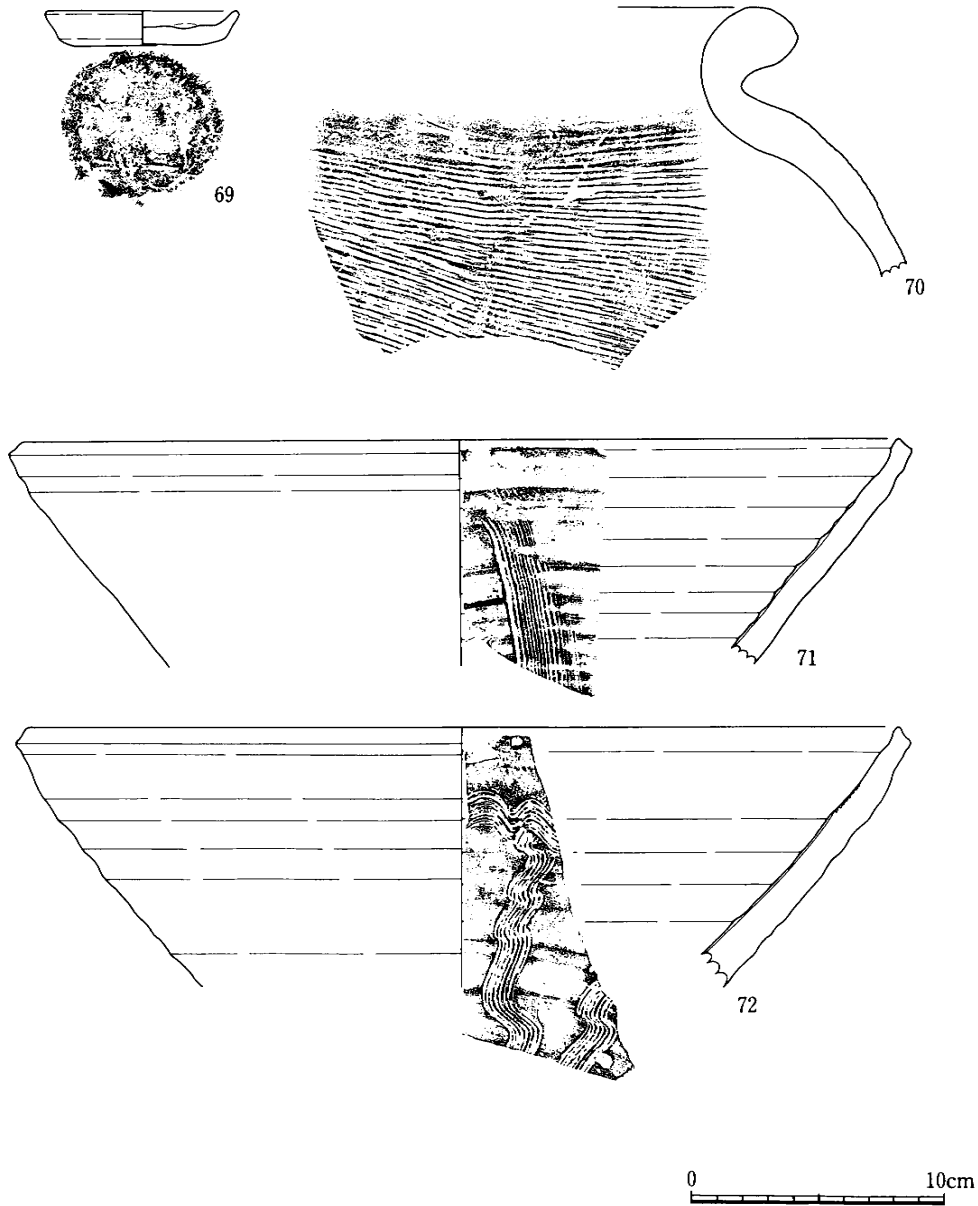
2M—a3区に位置する。上部を攪乱によってこわされている他、106号溝と切り合う。新旧関係はとらえられなかった。縦板組隅柱横棧どめの井戸側を持つもの

と思われるが、抜き取られた南東側の部材および隅柱は出土していない。横は北側で2本用いられている。規模は1辺1m程である。

井戸掘り方はやや不整形な隅円方形で1辺は1.9mを計る。井戸側部分の掘り込み等はなく、深さは93cmを計る。

遺物 (第51図)

79は土師器碗である。体部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。口径は15cmを計る。この他、土器は土師器片、須恵器片、珠洲焼片がある。



第47図 15号井戸出土遺物 (1/3)

80は縦板である。この手の物が主体となる。現存長33.6cm、幅22.8cm、厚さ4.2cmを計る。縦板は10号井戸で用いられた物と近似している。

81は横棧である。長さ97.8cm、幅4.2cm、厚さ3.6cmを計る。両端は広い側面をはつり厚さを減じている。同様な物は7号井戸、12号井戸で使用されているが、いずれも片側が長く、片側が短い物であり、81とはやや趣きを異にする。7号井戸、12号井戸例からすれば、16号井戸の隅柱もホゾ穴のあけられるタイプであったと思われる。

16号井戸はその出土土器から時期を特定することができない。覆土に含まれていた遺物からすれば、15世紀に下ることは考えにくい。

17号井戸

遺構 (第52図)

1M-d3区に位置する。上部および北側を道路側溝埋設工事によって大きく破壊されている。また、側溝横ということもあってか湧水が激しく、うまく掘り切れなかった。井戸側は縦板組隅柱横棧どめである。規模は0.6m×0.6mである。高さは0.5m程である。

井戸掘り方は破壊されていてははっきりしないが、1辺15m程の隅円方形と思われる。井戸側部分は同形に掘り込まれている。深さは0.9mを計る。

井戸覆土からは珠洲焼甕が1個体つぶれた様な状態で出土している。

遺物 (第53図)

82は珠洲焼甕である。口径62.7cm、胴部最大径87cm、底径31.8cm、器高85.2cmを計る。口縁部から体部を半分程欠損している。上げ底状の底部から大きく開いて立ち上がり、胴部は樽形を呈す。肩の張り出しは認められない。胴部最大径は胴中位にある。口縁はくの字に短く外反し端部は方頭状を呈する。体部内面には縦方向のナデが施され、底部内面にはあて具痕が残る。口縁直下には縦3本の刻線文が施されている。

83は隅柱である。長さ40.8cm、幅4.2cm、厚さ4.2cmを計る。わずかに先細りとなり、頭部は丸く加工されている。ホゾ穴等はない。

84は横棧である。長さ64.2cm、幅4.8cm、厚さ3cmを計る。相欠きが両端同一方向に造り出されている。切り欠きの施された方が井戸内面側に向けられる。

17号井戸は82の土器より13世紀後半から14世紀ごろの物と思われる。

18・19・20号井戸

遺構 (第54図)

2M-a3区に位置する。一部は3M区にかかっている。3基の井戸がほぼ同一地点で切り合っている。いちばん上位のものを18号井戸、その下位で西側の物を19号井戸、東側の物を20号井戸とする。いずれも水溜に曲物を用いるものである。

18号井戸の掘り方はとらえきれなかった。曲物検出時には方形を示す様な形で

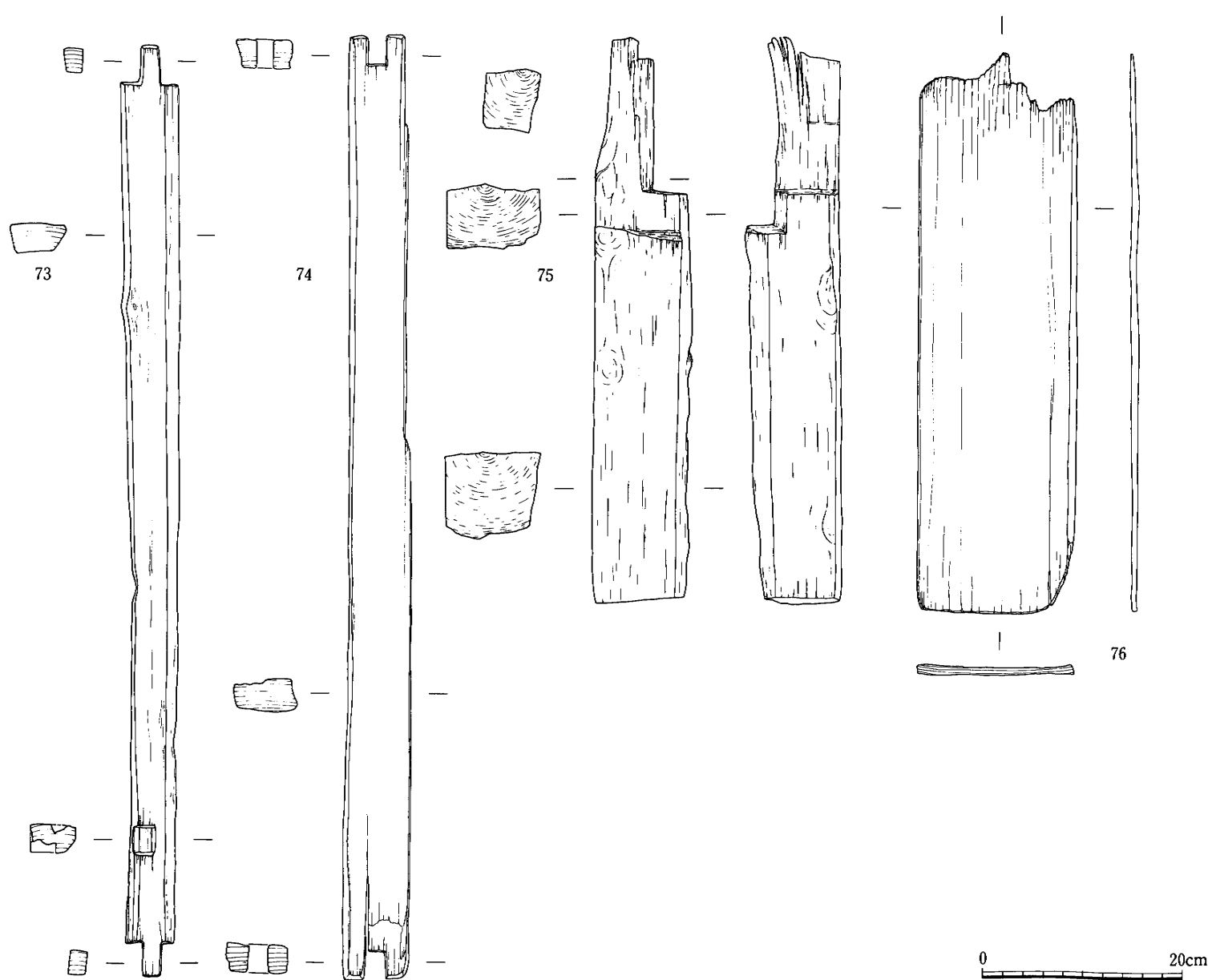
縦板が数枚残っており、縦板組の井戸側を有していた物と思われる。土層断面図から等から復元すると、掘り方は一辺1.3m前後、井戸側は一辺0.7m前後である。水溜あるいは井戸側埋設部分を掘りさげる掘り方を持っていたと推定される。深さは0.5m程である。

19号井戸は、18号井戸掘り下げ時に曲物上端が発見され、井戸と確認された。隅柱1本と横棧が残っている。おそらく縦板組隅柱横棧どめの井戸側を持つものであろう。縦板は残っておらず、また、隅柱にホゾ穴がない点でどのような組み方なのかははっきりしない。井戸側の規模は横棧の長さから1辺0.7m前後と思われる。

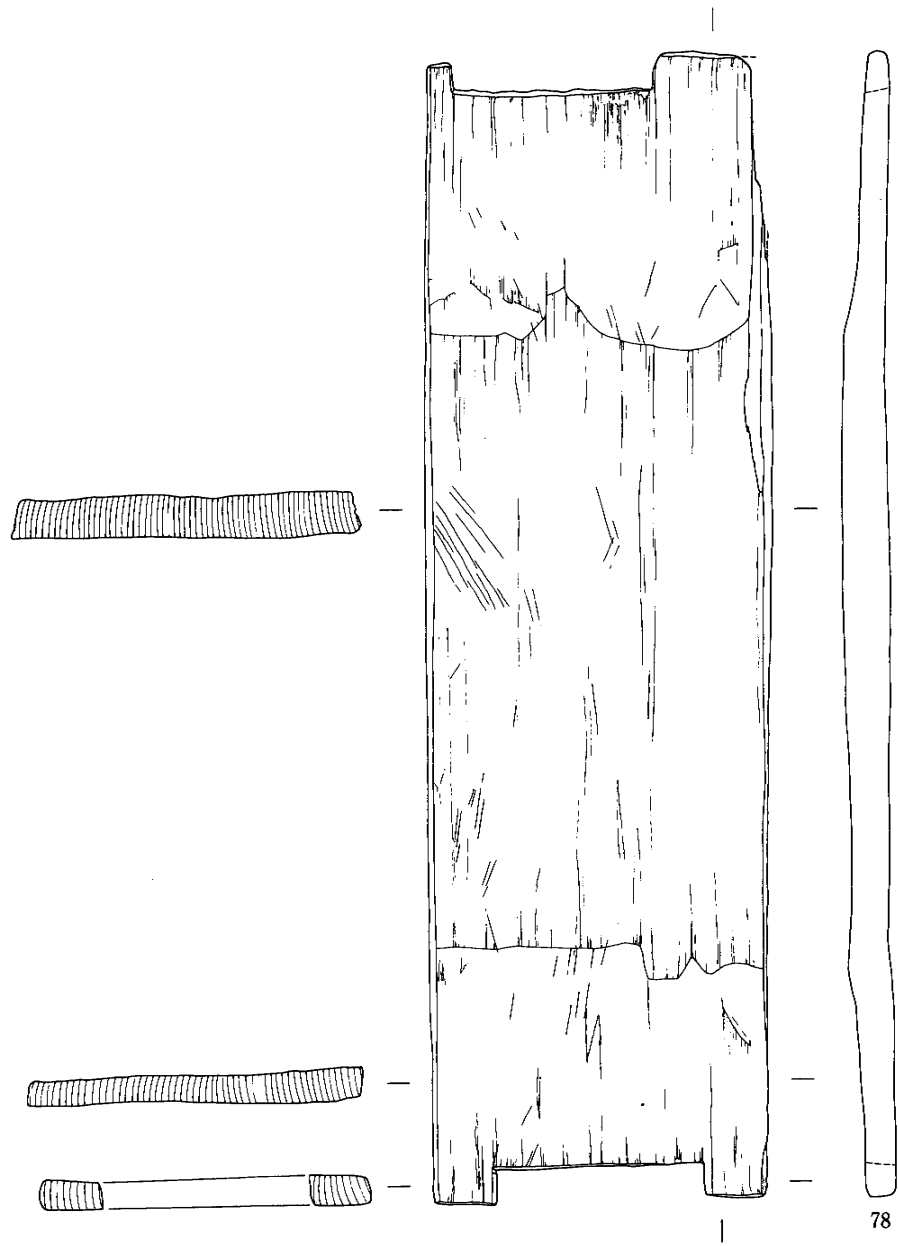
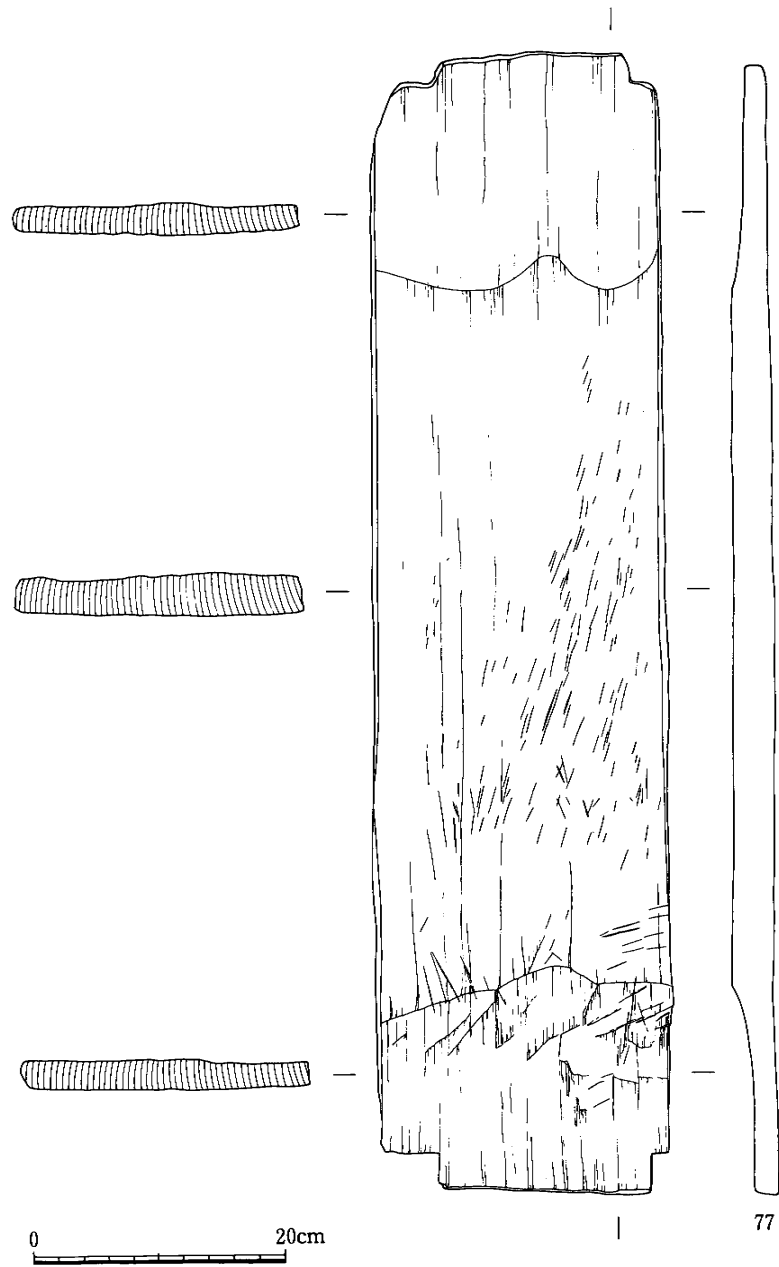
水溜には曲物が3個体用いられている。まず、大小径の異なる2つの曲物を入れ子状に底に据え、さらに、径の小さい方の曲物の上にわずかに径の大きいタガ状の物を置いている。

井戸掘り方は円形基調の上面形態で径1.4mを計る。井戸側部分は一辺1m前後の隅円方形に掘り凹められ、さらに水溜部分は径0.7m程の円形に掘り込まれている。深さは0.8m程である。

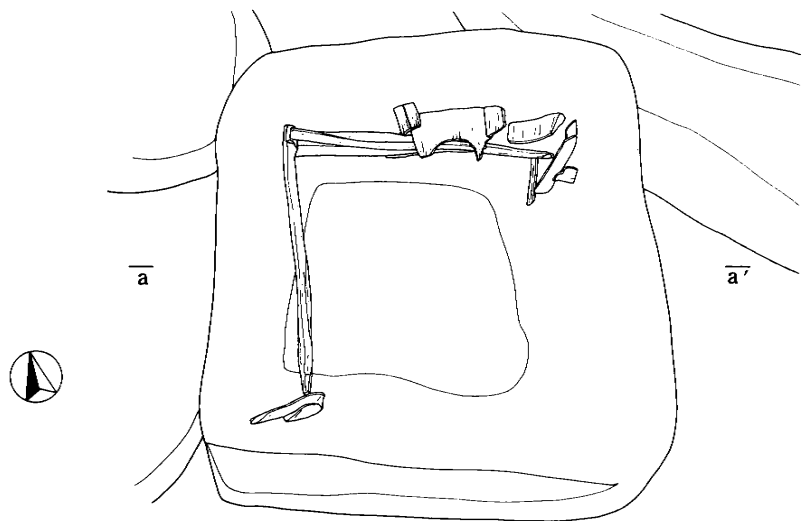
20号井戸は、18号井戸掘り方掘り下げ時に検出された。これも縦板が1枚残っており、縦板組の井戸側を持ったものと考えられる。井戸側は井戸掘り方から推定すると1辺0.8m程の方形の物と思われる。水溜に



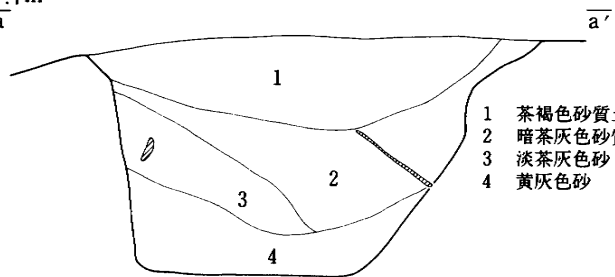
第48図 15号井戸出土遺物 (1/6)



第49図 15号井戸出土遺物 (1 / 6)

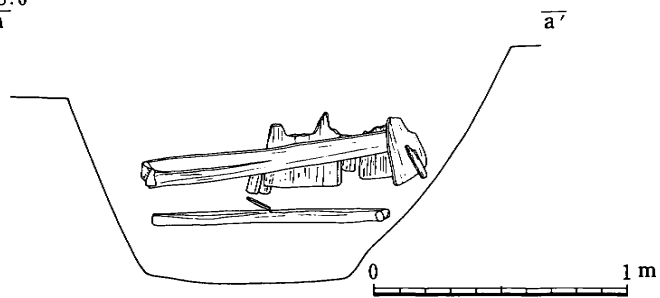


L = 7.7m
a

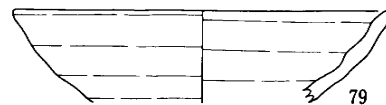


- 1 茶褐色砂質土
- 2 暗茶灰色砂質土
- 3 淡茶灰色砂
- 4 黄灰色砂

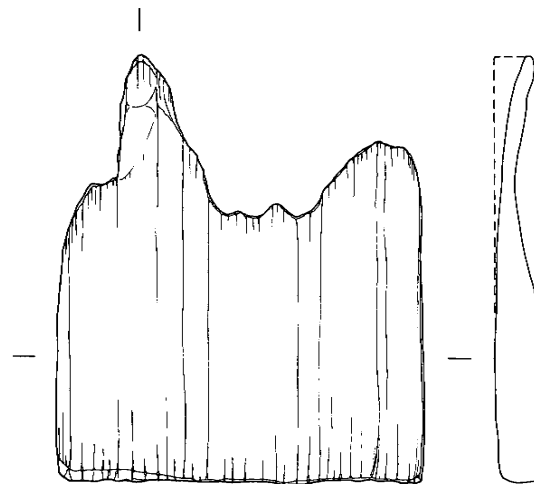
L = 8.0
a



第50図 16号井戸 (1/30)

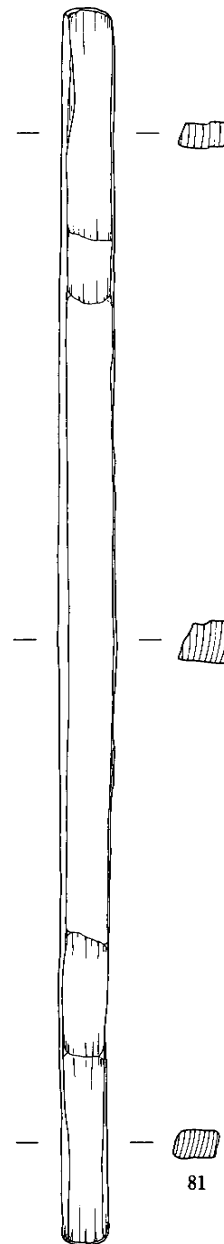


0 10cm



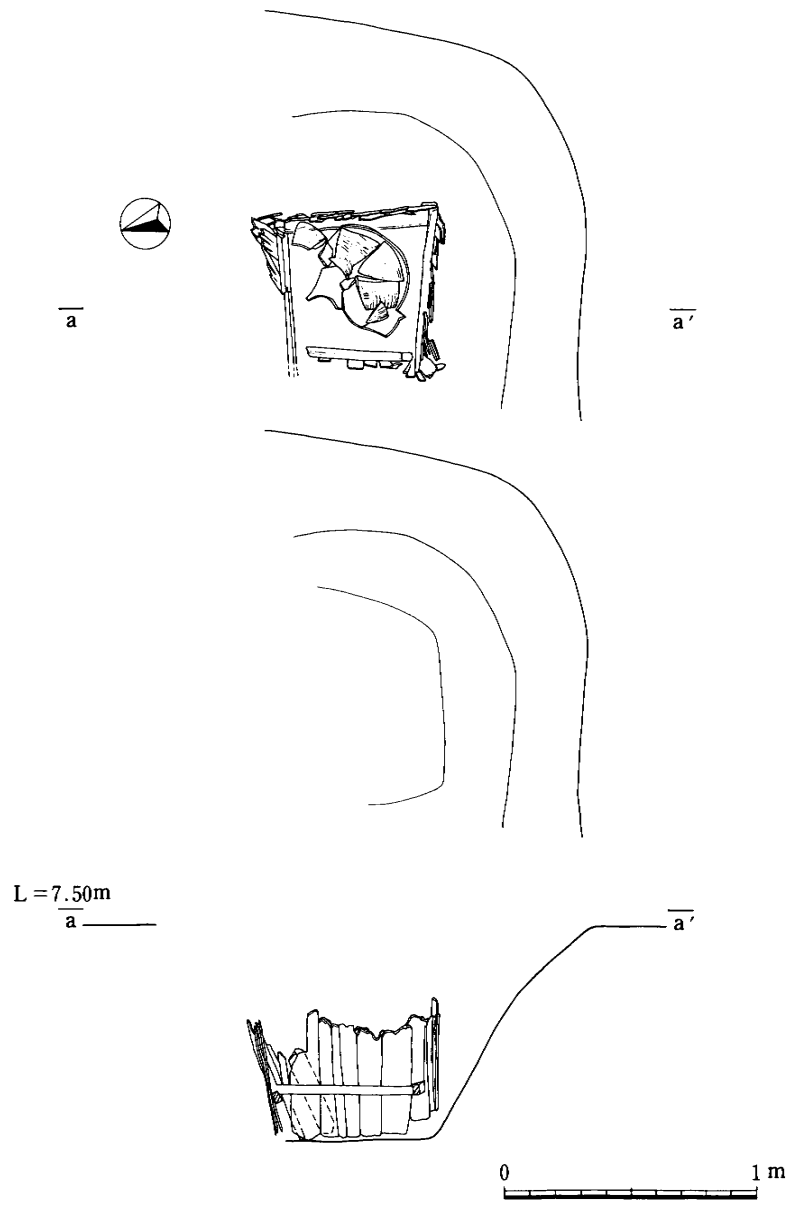
80

0 20cm



81

第51図 16号井戸出土遺物 (79は1/3 80、81は1/6)



第52図 17号井戸 (1/30)

用いられた曲物は18号井戸と同様1個体である。

井戸掘り方は1辺1.4m弱の隅円方形で、井戸側部分を1辺0.9m程の同形に掘り込み、さらに水溜部分を0.7m程の円形に掘り凹めている。

18、19、20号井戸の新旧関係は、20号井戸→19号井戸→18号井戸の順である。水溜底のレベルは19、20号井戸がほぼ同レベルであるのに対し、18号井戸は25cmほど高い。

遺物 (第55図)

土器は小片のみで図示出来る物が無い。土師器片、珠洲焼片が少量出土している。また、19号井戸のタガ状の曲物および縦板は遺存状態が悪く図示していない。

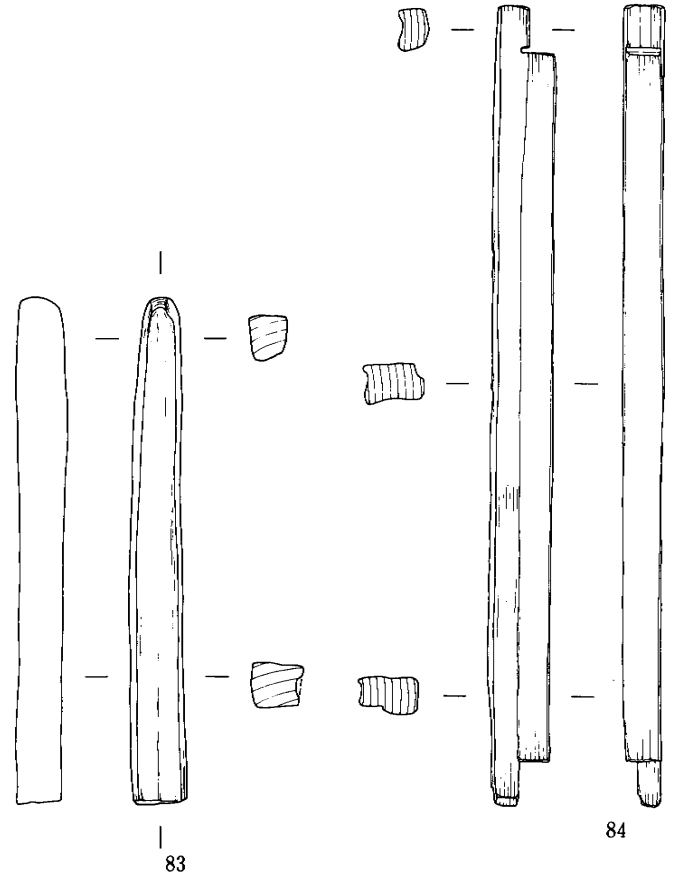
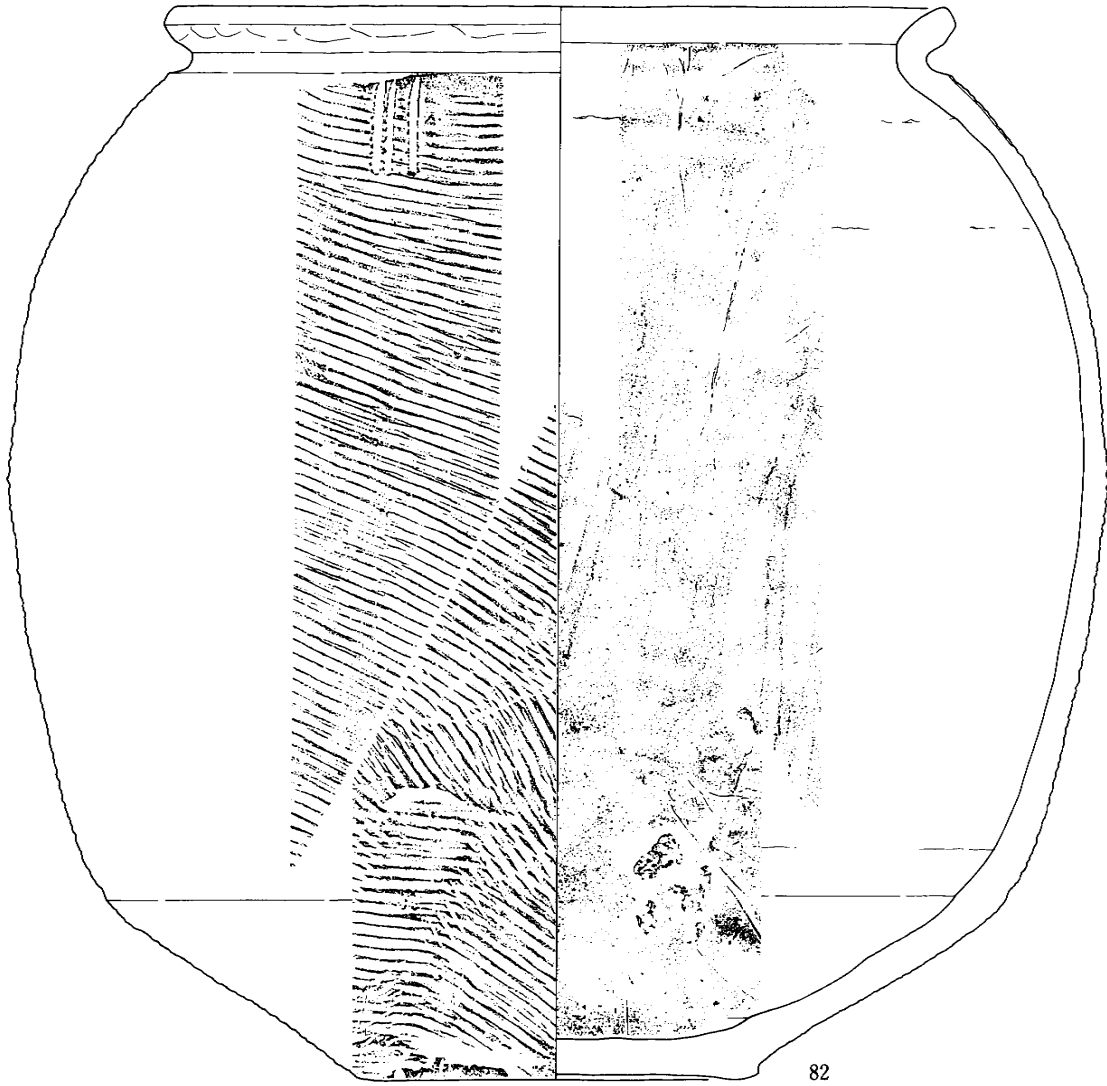
85は18号井戸の水溜に用いられていた曲物である。径30cm、器高は17cm以上を計る。中位にタガが巻かれている。本体の綴じ合せは3段1列、タガは重ね合せが広くとられ2ヶ所で綴じられており、外側端部は幅を狭くしている。綴じ合せは2段1列と、1段、2段2列である。内外面とも斜位のケビキが引かれる。

86は19号井戸に入れ子状に据えられていた曲物である。一体の物と考え、そのままの状態を図示したが、大小3cm前後径が異なり別物とも思われる。1つは径37cm、器高27cmを計る。綴じ合せは8段1列で、内面に縦平行のケビキが引かれる。もう1つは径40cm、器高21cmを計る。上部に薄いタガが巻かれ、木釘穴が7ヶ所穿たれている。綴じ合せは本体が6段1列、タガは2ヶ所で4段1列と1段、2段の2列である。

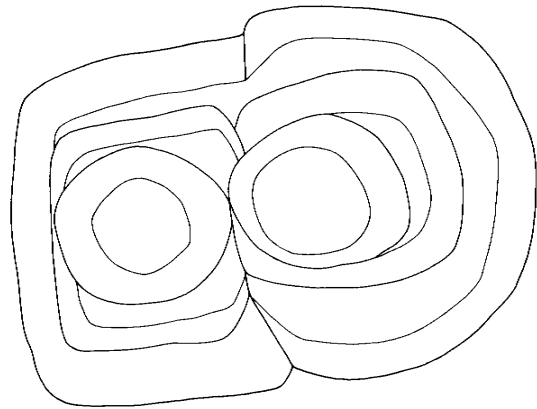
87、88は19号井戸の横棧である。87は長さ62.7cm、幅6cm、厚さ3cmを計る。88は63cm、幅6cm、厚さ4.2cmを計る。両端は目違いホゾが造り出される。

89は19号井戸の隅柱である。長さ25cm、幅5.1cm、厚さ4.2cmを計る。先端は尖頭状をなす。下端は断面が台形状に加工されている。

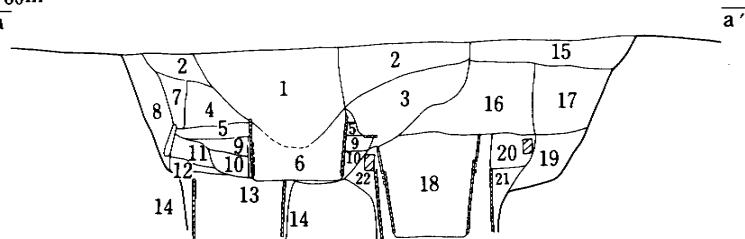
90は20号井戸出土の曲物である。径39.6cm、器高28.2cmを計る。中位に薄いタガが巻かれる。本体の綴じ合せは4段+7段の1列で、内面には縦平行のケビキが引かれる。また、下端には木釘穴が10個所確認できる。中位にも3個所の木釘穴がある。タガの綴じ合せは2ヶ所で3段、1段2列と、1段、3段2列である。本体、タガ共に他の部位に綴じ合せのためと思われる切り込みが確認されている。



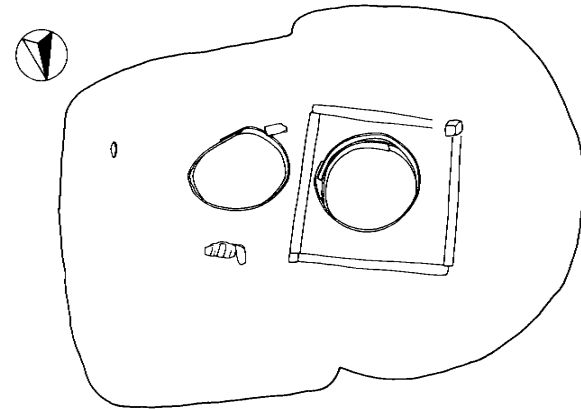
第53図 17号井戸出土遺物 (1 / 6)



L = 7.60m
a

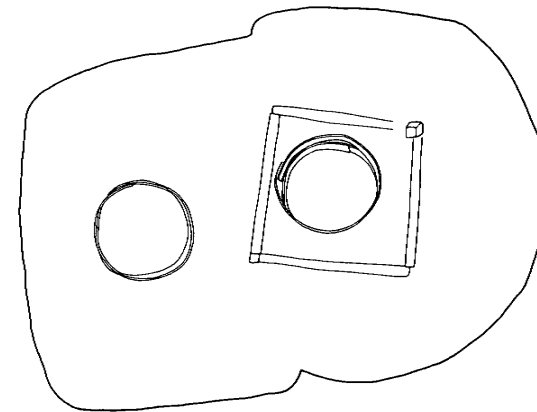


- | | | | | |
|-----------|-----------|----------|------------|------------|
| 1 暗茶褐色砂質土 | 6 暗青灰色砂 | 11 黑色粘質土 | 16 暗茶褐色砂質土 | 21 暗黄灰色砂 |
| 2 暗灰色砂質土 | 7 暗茶灰色砂質土 | 12 灰色砂 | 17 灰色砂 | 22 暗青灰色砂質土 |
| 3 黑灰色砂質土 | 8 灰色砂 | 13 暗青灰色砂 | 18 暗青灰色砂 | |
| 4 暗灰色砂質土 | 9 暗青灰色砂 | 14 暗灰色砂 | 19 黄灰色砂 | |
| 5 暗黄灰色砂 | 10 暗青灰色砂 | 15 茶灰色砂 | 20 暗青灰色砂質土 | |

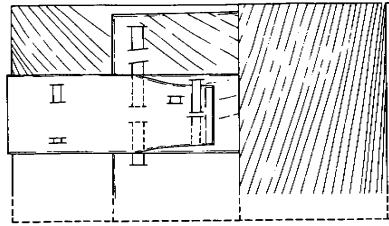


a

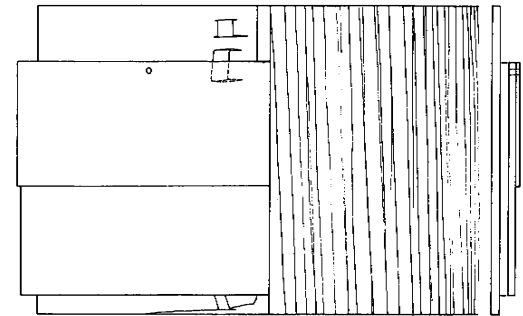
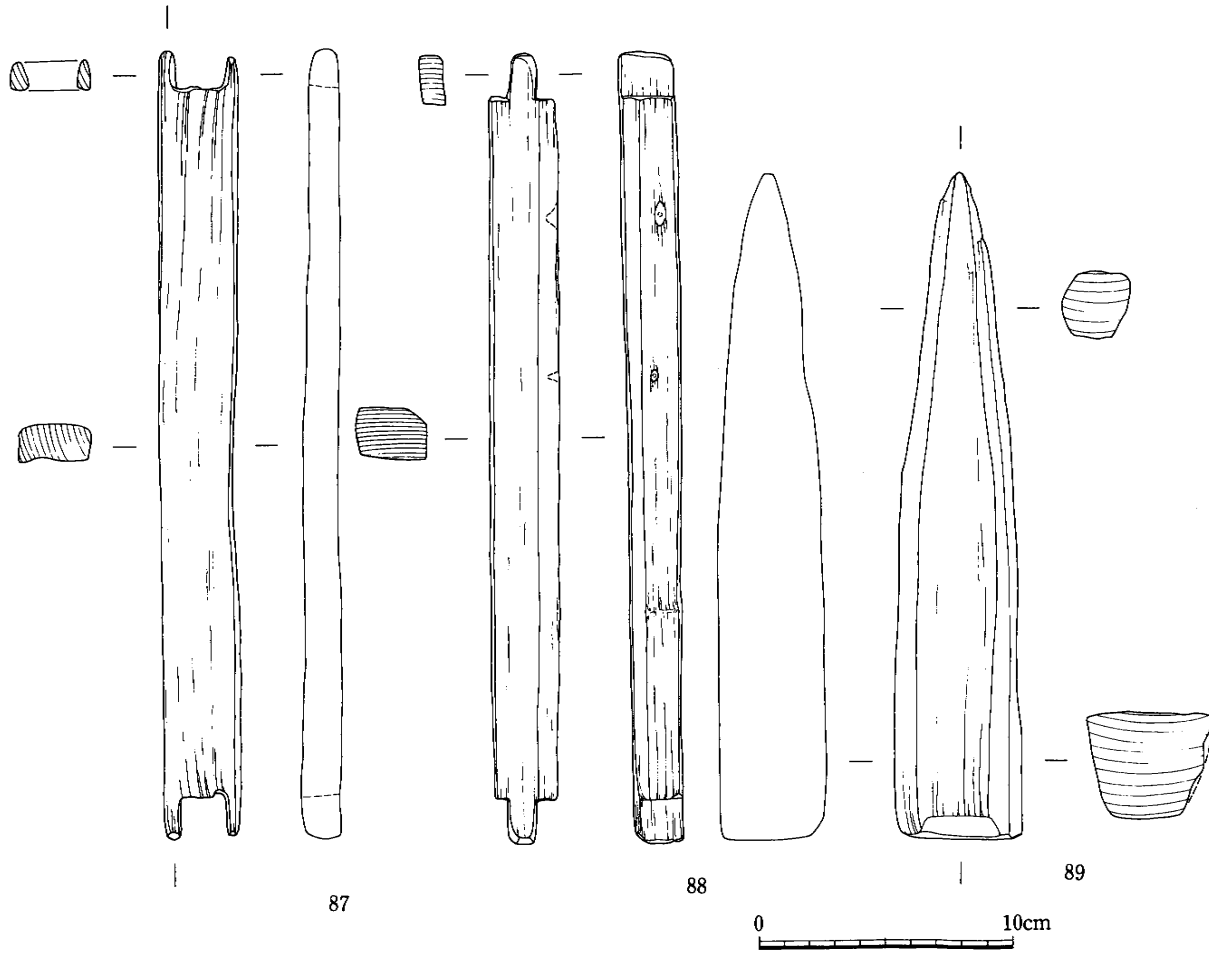
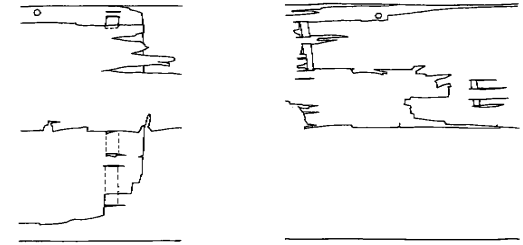
a'



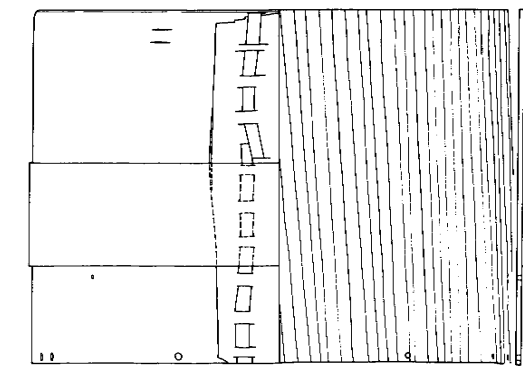
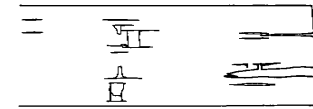
第54図 18、19、20号井戸 (1/30)



85



86



90

0 20cm

第55図 18・19・20号井戸出土遺物 (1/6 89は1/3)

3. 土坑

土坑は36号まで番号を付した。内、掘立柱建物の柱穴となったもの、井戸とした物、攪乱と認定した物を除いた10基を示した。分布を見ると第1調査区B、C区、第3調査区K区、M区付近に集中している。

1号土坑

遺構(第56図)

B区a、b区にまたがって位置する。平面形は不整楕円形で、平坦な底面には中央北寄りに径96cm、深さ21cm程の円形の掘り込みが有る。壁面は底面からゆるく立ちあがる。規模は5m×2.4m×0.48m。土坑覆土には丘陵崩落土を含まない。攪乱および、28号溝の一部をこわされている。

遺物(第59図91~93)

91は土師器椀で、口径15.3cmを計る。器壁は厚みがあり、体部は直線的に開く。

92は須恵器瓶である。胴部最大径は24.6cmを計る。胴部片のみではっきりしないが双耳瓶と思われる。

93は須恵器甕胴部片である。焼成があまり、外面は暗灰色、内面は黄灰白色を呈する。底部近くは叩きが施されていない。

3号土坑

遺構(第56図)

1B-d4区で検出された。溝状遺構と切り合い関係にあるが新旧はとらえられていない。平面形は円形で、断面形は逆台形をなす。壁中位に三カ月状の段を有する。径1.3m、深さ0.6mを計る。遺物はほとんど出土していない。

4号土坑

遺構(第56図)

1B-d4区に位置する。3号土坑とは約4m離れている。溝状遺構、柱穴と切り合うが、これらよりも新しい。平面形は不整楕円形で、断面形は逆台形状を成す。規模は1.4m×1.1m、深さ0.42mを計る。

遺物(第59図94)

94は珠洲焼片口鉢である。口径34.5cm、底径14.7cm、器高9.3cmを計る。体部は底部から大きく開き、内湾ぎみに立ちあがる。口唇はほぼ水平に、平坦に仕上げられている。卸し目は12条を数える。焼成があまり、淡黄灰色を呈する。同一個体の破片が2G区72号溝より出土し接合している。

5号土坑

遺構(第57図)

1C-b1区に位置する。本土坑は検出時点で長方形の土坑と確定し、掘り下げを進めた。その結果、隅円方形の土坑と円形の井戸が切り合うことが判明した。土

坑を5号土坑、井戸を5号井戸とする。5号井戸の方が新しい。

5号井戸は径1.8mの円形で深さ1.1mを計る。井戸側等の施設は確認されていない。湧水点まで掘り下げている事により井戸とした。

5号土坑は1辺1.4m程の隅円方形で、抗底も同形であるが、中央部の凹み、端には柱穴様の凹みも認められる。深さは70cm程である。

遺物(第59図95)

95は5号井戸から出土した土師器皿である。口径9.3cm、底径6.5cm、器高1.5cmを計る。体部は直線的に開き、口縁端部は引き出され薄く仕上げられている。淡い橙色から赤褐色を呈し、細い砂粒を多く含む。この他に図示できる遺物はない。

6号土坑

遺構(第57図)

1C-b3区に位置する。2号土坑に南側を切られている。平面形は不整円形で、断面形は椀形を呈す。径1.7m、深さ0.7mを計る。遺物は土師器片、須恵器片が出土しているが、図示できる物はない。

8号土坑

遺構(第57図)

2B-c2区に位置する。溝状遺構と切り合うが、これより新しい。平面形は円形で、断面形は逆台形を呈する。径1.1m、深さ0.3mを計る。遺物はほとんど出土していない。

9号土坑

遺構(第57図)

2C-a1区に位置する。柱穴、溝状遺構と切り合うが、それらよりは新しい。平面形は楕円形を呈し、断面形は逆台形状となる。規模は長軸2.2m、短軸1.8m、深さ0.33mを計る。

遺物(第59図96)

96は瀬戸焼卸し皿である。底径5.9cmを計る。施釉は外底面ぎりぎりまでなされている。遺物はこの他、青磁、白磁小片が出土している。

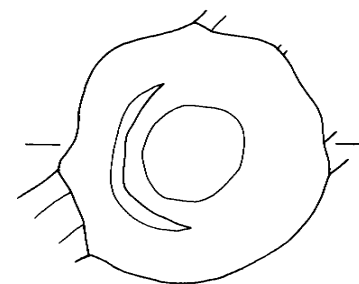
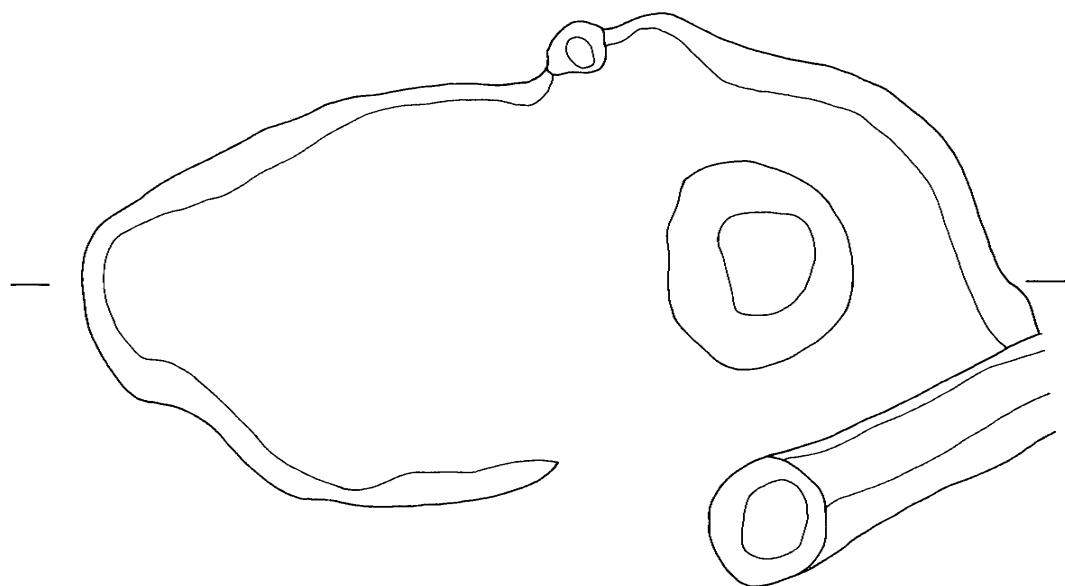
10号土坑

遺構(第6図)

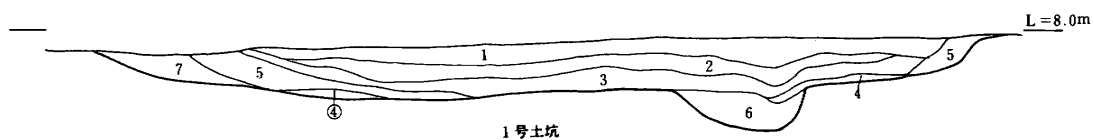
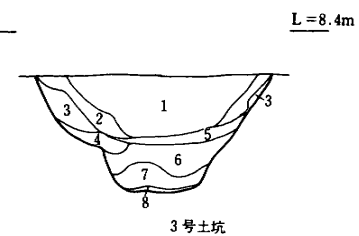
2B-a2区に位置する。1号井戸精査中に古代の土器が多量に出土する部分が確認され、土坑として取りあつたが、浅く、掘り込みもはっきりとしなかった。平面形は降雨等による変形が著しいためのせていない。覆土は黒色砂質層の単純層である。

遺物(第59図97~103)

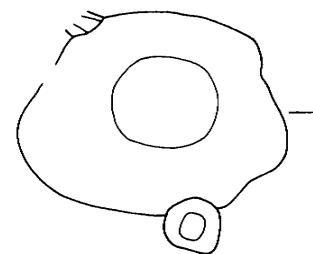
97~103は須恵器坯である。口径は13.5cm~14.1cm、底径7cm~7.5cm、器高



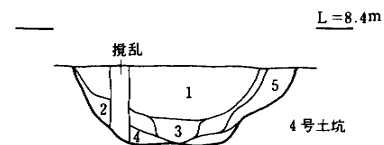
- 1 黑褐色粘質土
- 2 黑褐色砂質土
- 3 黄灰色砂
- 4 暗黄灰色砂
- 5 暗黄茶褐色砂質土
- 6 黑色砂質土
- 7 暗青灰色砂
- 8 黑灰色粘質土



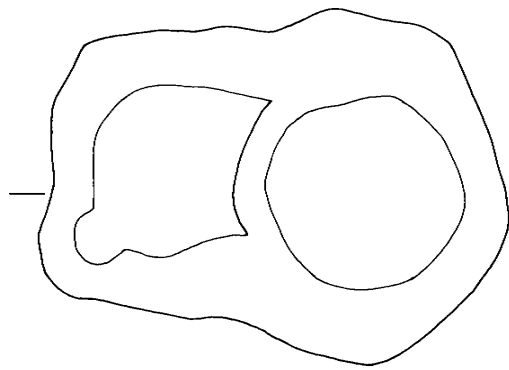
- 1 暗灰色砂質土
- 2 黑灰色粘質土
- 3 暗灰褐色砂質土
- 4 暗黄褐色砂
- 5 暗黄灰色砂
- 6 青灰色砂
- 7 黄褐色砂



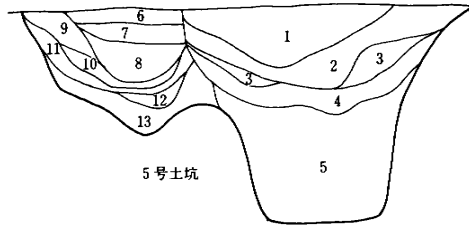
- 1 灰色粘質土
- 2 黑灰色粘質土
- 3 暗灰色粘質土
- 4 黑灰色砂
- 5 暗黄褐色粘質土



第56图 1·3·4号土坑 (1/40)

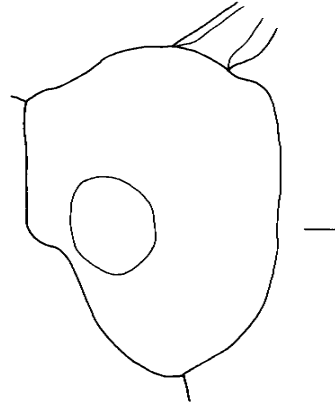


L=8.4m

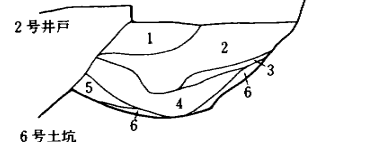


5号土坑

5号井戸

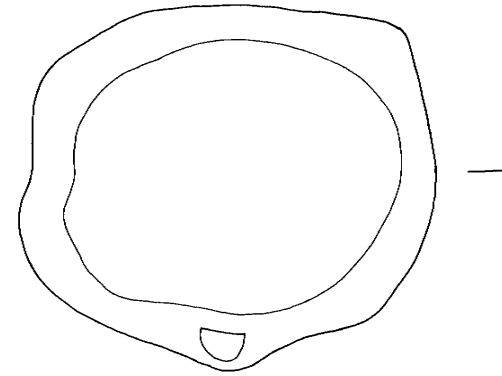


L=8.2m

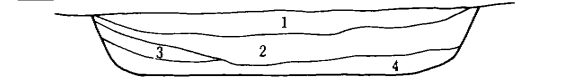


6号土坑

2号井戸



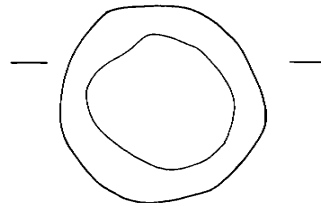
L=8m



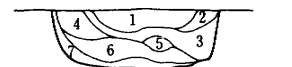
9号土坑

- 1 暗茶灰色砂
- 2 茶灰色砂
- 3 灰色砂
- 4 暗灰色砂 (下部に灰色粘質土)

- 1 灰色粘質土
- 2 暗灰色粘質土
- 3 暗茶灰色砂質土
- 4 黑灰色砂
- 5 青灰色砂
- 6 暗灰色粘質土
- 7 暗茶灰色粘質土
- 8 暗灰褐色砂質土
- 9 黑色砂質土
- 10 暗茶灰色砂
- 11 灰色砂
- 12 暗青灰色砂
- 13 青灰色砂



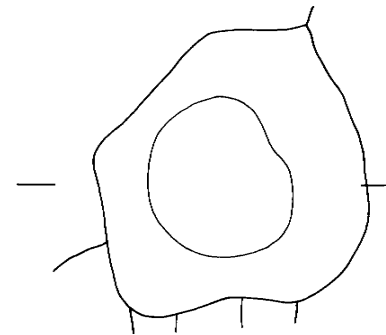
L=8.1m



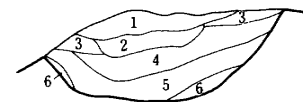
8号土坑

- 1 暗灰色砂質土
- 2 黑灰色砂質土
- 3 黄褐色砂
- 4 黑色砂質土
- 5 黄灰色砂
- 6 暗青灰色砂

- 1 灰色粘質土
- 2 灰色砂
- 3 黄灰色砂
- 4 暗黄色砂
- 5 黑灰色粘質土
- 6 黑灰色砂質土
- 7 灰色砂



L=8.4m

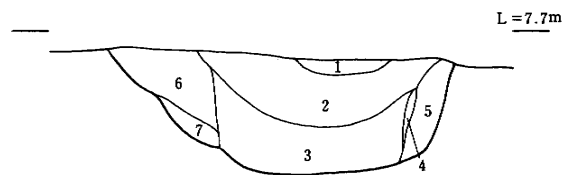
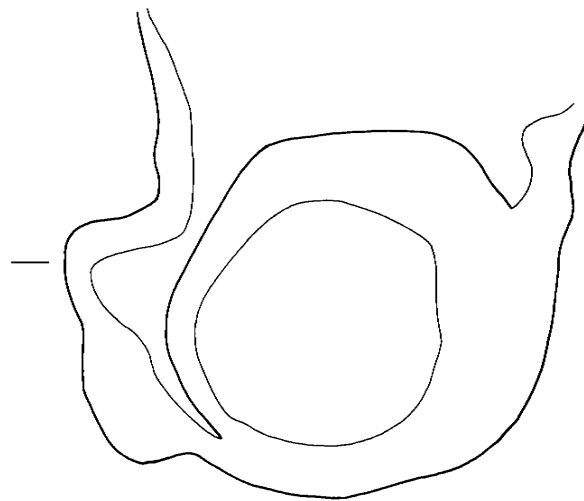
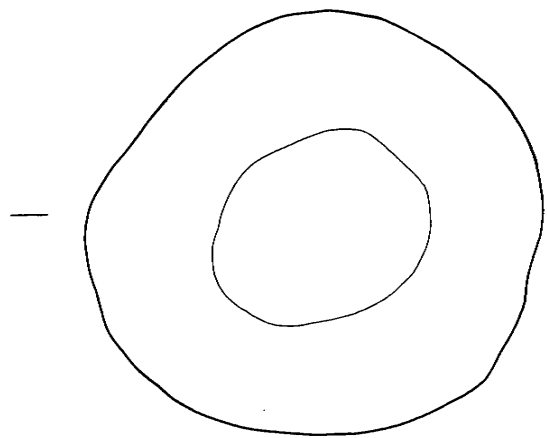


13号土坑

- 1 黑褐色砂質土
- 2 暗茶灰色砂質土
- 3 暗茶灰色砂質土
- 4 暗灰褐色砂質土
- 5 黑色砂質土
- 6 濁黄褐色砂質土

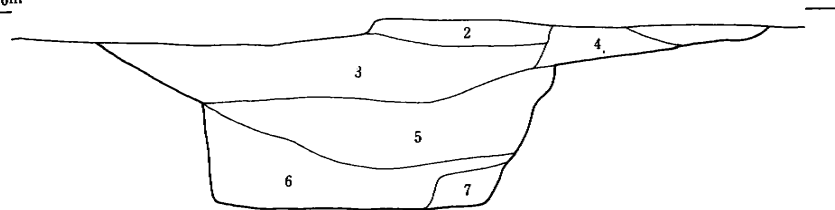


第57图 5・6・8・9・13号土坑 (1/40)



23号土坑

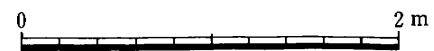
L = 7.6m



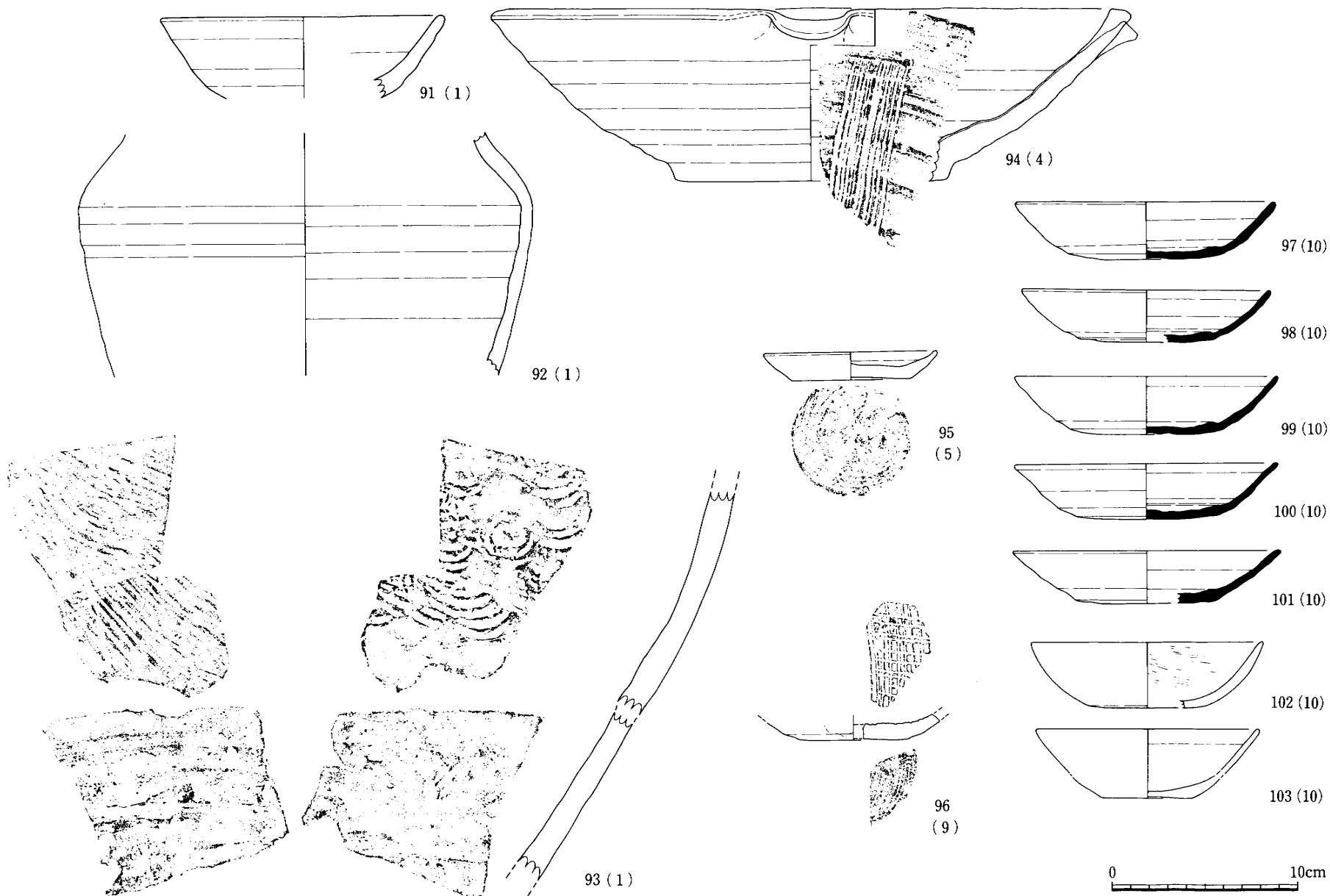
28号土坑

- 1 濁茶灰色砂
- 2 茶褐色砂質土
- 3 茶灰色砂
- 4 暗茶灰色砂
- 5 茶褐色砂
- 6 淡茶灰色砂
- 7 茶灰色砂

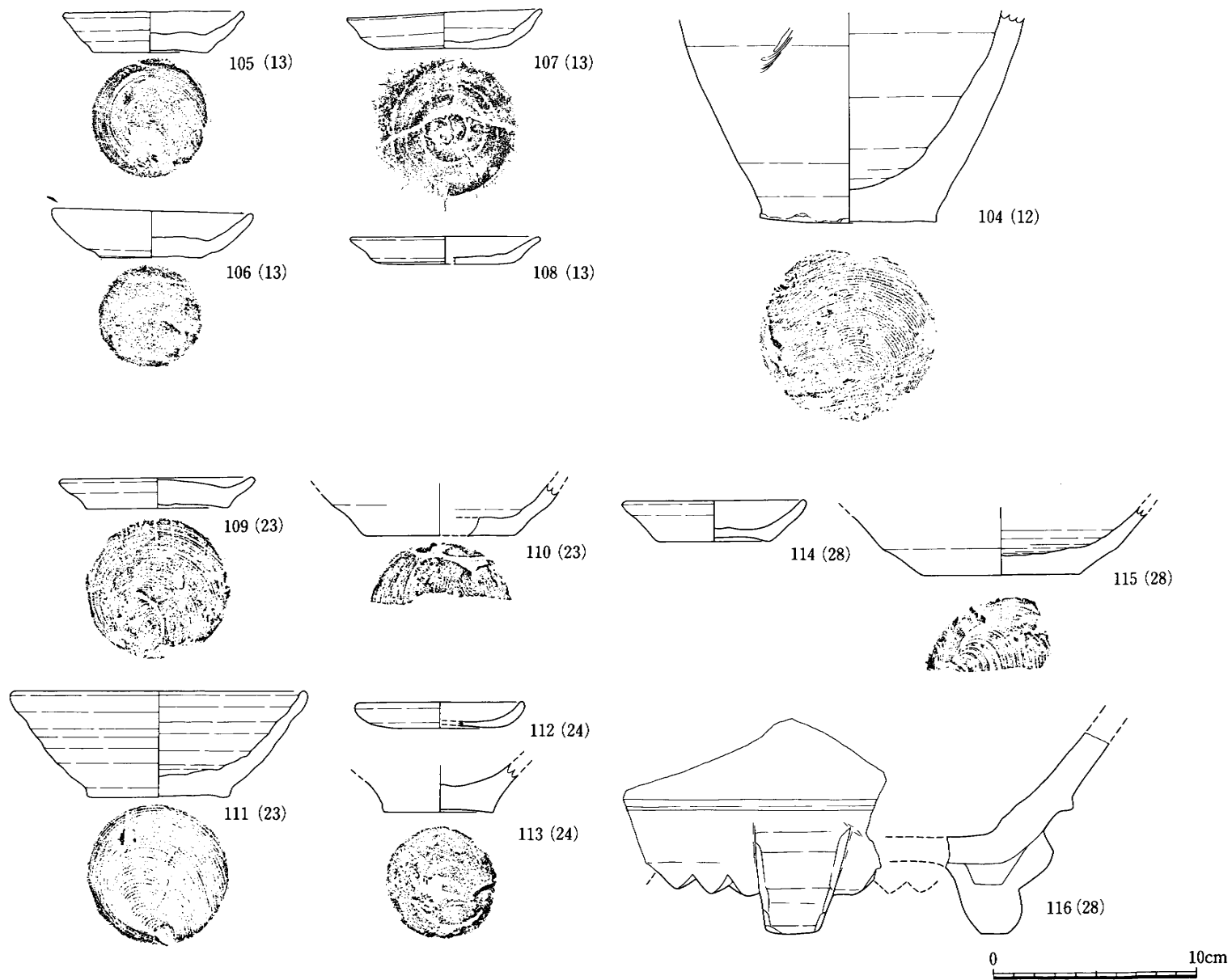
- 1 濁茶灰色砂
- 2 茶灰色砂質土
- 3 暗茶灰色砂質土
- 4 淡茶灰色砂
- 5 黑灰色砂質土
- 6 淡灰色砂
- 7 黑色粘質土



第58图 23·28号土坑 (1/40)



第59図 1・4・5・9・10号土坑出土遺物 (1/3) () は土坑番号



第60図 12・13・23・24・28号土坑出土遺物 (1/3) ()は土坑番号

2.7cm～3cmを計る。97～99は体部が内湾ぎみに立ちあがる。100、101は、わずかに内湾ぎみに立ち上り、口縁部でやや開く。薄手で、外底面にはへら切り痕が残る。

102は内面が黒色処理された土師器椀である。口径12.6cm、器高3.5cmを計る。103も土師器椀である。こちらは黒色処理されていない。口径12.2cm、底径4.8cm、器高2.1cmを計る。この他、土師器有台椀が出土している。

12号土坑

遺構(第7図)

II-d4区に位置する。94号溝に大半を破壊されている。また、変形が著しいため平面形はのせていない。1辺1.5m程の隅円方形を呈する物と思われ、深さは40cm程である。

遺物(第60図104)

104は珠洲焼壺と思われる。底径は8.7cmを計り、外底面には糸切り痕が残る。胴部中位に刻文と思われるへら書きが見られる。

13号土坑

遺構(第57図)

1Kb3、b4区にまたがって位置する。102号溝、104号溝と切り合い関係にある。102号溝より古いことは確認できたが、104号溝との新旧はとらえきれなかった平面形は円形と思われ、径は1.6m程であろう。断面形は逆台形状を呈し、深さは45cmを計る。

遺物(第60図105～108)

105～108は土師器小皿である。105は口径8.9cm、底径5.7cm、器高2cmを計る。底部からわずかに内湾ぎみに開き、口縁端部は薄く仕上げられる。外底面には糸切り痕が、内底面には指頭圧痕が残る。106は口径9.2cm、底径5cm、器高2.1cmを計る。体部は内湾ぎみに開き、底部は低い平高台状となる。外底面には糸切り痕が残る。

107は口径9.5cm、底径6cm、器高1.7cmを計る。体部は底部から内湾ぎみに立ち立り、口縁部はわずかに外反する。105、106に比べ薄手で、外底面にはへら切り痕を有する。

108は口径9.3cm、底径6.5cm、器高1.4cmを計る。107に比べやや偏平だが同様な特徴を持つ。

23号土坑

遺構(第58図)

2L-d4区に位置する。平面形は円形で、断面形は逆台形状を成す。径2.2m、深さ0.6mを計る。覆土の状態からすると、井戸側の抜かれた井戸の可能性もある。

遺物(第60図109～111)

109は土師器皿である。口径9.6cm、底径7cm、器高1.5cmを計る。体部は底部から内湾ぎみに大きく開く。内底面と口縁端部はほとんど同じ高さにある。

110は土師器椀である。底径は7.2cmと109とほぼ同じである。111と同様な大きさとなるのであろうか。

111は土師器椀である。口径14.7cm、底径7cm、器高5.1cmを計る。体部は内湾ぎみに開き、口縁端部は丸みをもっておさめられている。底部は平高台状を呈す。

24号土坑

遺構(第9図)

2M-a1区に位置する。この遺構も変形が著しく平面図等はのせていない。形態は円形で径1.5m前後、深さは30cm程度である。覆土は黒色の粘質土が主体であった。

遺物(第60図112、113)

112は土師器皿である。非ロクロ整形で、口径8.4cm、器高1.3cmを計る。薄手で、体部は内湾ぎみに立ち上がる。

113は土師器椀底部であろうか、底径は5.5cmを計る。平高台風の底部形態をとり、外底面には糸切り痕を残す。

28号土坑

遺構(第58図)

2M-a4区に位置する。上面を攪乱によりこわされている。平面形は円形で断面形は逆台形状を呈す。径1.8m、深さ0.9mを計る。土層断面図4層までは攪乱の土層である。

遺物(第60図114～116)

114は珠洲焼小皿である。ややゆがんでおり正確ではないが口径9cm、底径5.4cm、器高2cmを計る。ロクロ整形であるが、糸切り痕ははっきりとしない。底部はやや薄く作られている。体部は内湾ぎみに立ちあがり、口唇は丸くおさめられる。

115は土師器椀であろう。底径7.5cmを計る。体部は内湾して立ちあがる。外底面には糸切り痕が残る。

116は瓦質土器である。器種は火鉢であろうか。体部は底部から内湾ぎみに開く。脚がつけられ、その直上には凸帯がめぐらされている。脚の周りには鋸歯状の飾りがつけられている。

4. 埋 甕

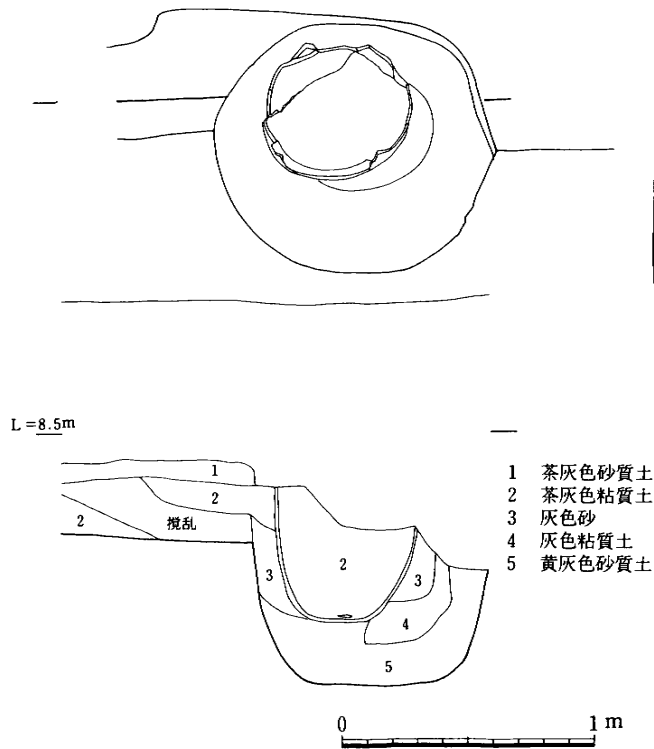
1号埋甕 (第61図)

2C-d4区の調査区壁にかかって、珠洲焼甕が直立した状態で検出された。調査区を拡張したところ、甕上部および掘り方上部は道路側溝埋設工事の際の法面にそってこわされていたが、下部は残っていた。

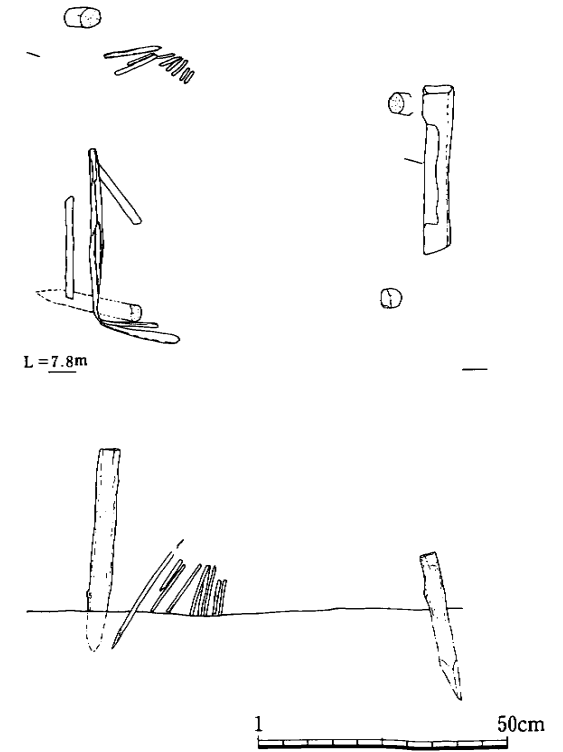
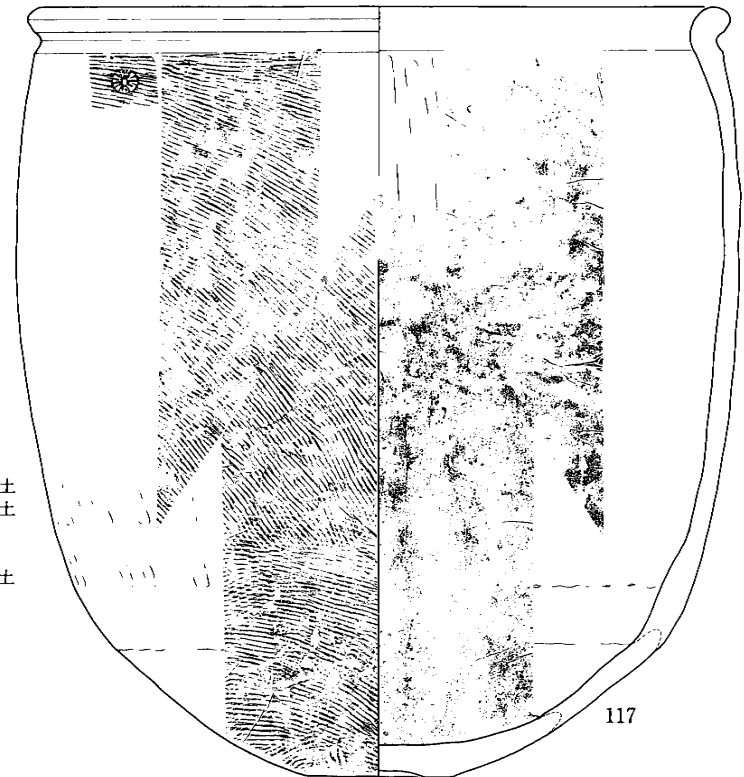
埋甕掘り方は径1.1mの円形で、深さは0.7m以上である。甕は掘り方の南寄りに、掘り方底から25cmほど上位に置かれている。掘り方は黄灰色から灰色の砂で埋められている。甕内部には、こわれた甕の破片が内底面直上にあり、茶灰色の粘質土が推積していた。掘

り方掘り込み面は2層中と思われる。

117は埋甕の珠洲焼甕である。口径55.8cm、底径11.4cm、胴部最大径57.6cmを計る。口縁は短く外反し、口唇は方頭状をなす。胴部は肩の張らないずん胴で、最大径は中位にある。口縁直下には印花文が施されている。



第61図 1号埋甕 (1/30・1/6)



第62図 76号溝 (1/15)

5. 溝

溝は本遺跡において柱穴について検出数が多い。109号まで番号を付している。溝は基本的に丘陵裾に並行あるいは直交する方向を持つが、その方向性は街割りの区画に添うといったものである。街割りの区画は丘陵の方向に規制されているが、時代により区画方向を変えている。H～J区付近で斜め方向に溝が交わり錯綜するのはこのためと思われる。

前項までに述べてきたような理由から、位置不明となったものや変形の著しいものが多く、平面形は全体図のみしかのせていない。また、土層断面図も代表的なもののみである。

2、11、12、13号溝（第6図）

平面形がL字状をなし、掘立柱建物の周りにめぐらされるものである。幅15～20cm、深さ15～25cm程の規模で断面形はU字状をなす。2号溝は1A-B4区から2A-c3区にかけて検出されている。対応する建物は見つかっていない。11、12、13号溝はC、D区の掘立柱建物の集中する部分で検出されている。遺構が錯綜しており全様は確認できず、対応する掘立柱建物もよくわからない。また、これら以外にも掘立柱建物の方向に添う溝がある。

3、4号溝（第6、63図）

1A-B4区から2A-c1区にかけて検出された。3号溝は幅70cm、深さ5cmを計る。4号溝は幅45cm、深さ10cmを計る。いずれも丘陵裾に平行するものであるが、108号溝より東は確認できなかった。覆土は黒色、黒褐色の砂質土で、108、109号溝よりは古い。3号溝からは土師器椀、4号溝からは土師器小皿が出土している。

5号溝（第6、63図）

2A-a1区から2B-c3区にかけて検出した。丘陵裾に平行する溝である。横断面形は上部がゆるい半円形をなし、中央部はそこから断面長方形に掘り込まれている。上幅85～100cm、中央の掘り込み幅40cm、深さ

40cmを計る。2号溝、101、108、109号溝よりも古い。須恵器片、土師器片、製塩土器片が出土している。

6号溝（第6、63図）

2B-c2区から2C-a4区にかけて検出した。断面形は逆台形状をなし上幅125cm、底幅66cm、深さ42cmを計る。2号井戸に近づくにつれ浅くなり、2号井戸に接する部分では深さ10cm程になる。土師器、須恵器、珠洲焼片が出土している。

7、14、10号溝（第6図）

丘陵裾に平行する溝である。7、14号溝は途中攪乱等でとぎれるが、1C-d1区から2F-a区付近にかけて検出された。はっきりとはつかめないが、72、77、89号溝に連続し、丘陵裾に添って長く続く可能性が高い。

10号溝は1C-b1区から2D-c4区にかけて検出した。これも調査区内では連続が追えないが、88、104号溝に続くものと思われる。ともに幅は1m前後、深さは10～15cmである。

8、15、101号溝（第6、63図）

全様はとらえきれないが、大きく街割りを区画する溝と考えた。方形、あるいは長方形となり、屋敷地をめぐる掘の可能性も高い。101号溝は2A-c4区から1B-b1区では丘陵裾と直交し、1C-a1区から2D-c2区では丘陵裾と平行し8号溝と接続する。丘陵裾に平行する部分と直交する部分の連続性は調査区内では確認できないが、遺物の接合例が数例あり、同一の溝と考えた。

8号溝は2D-c2区で検出された丘陵裾に直交する溝である。101号溝との接続部分は先端からやや離れた部分で溝底に段差を有する。また、屋敷地側に1段平担面を設ける部分がある。段差や接続部分のズレは構築時期の差を表わしているのかもしれない。

15号溝は1C-d4区から2C-a3、4区で検出された丘陵裾に直交する方向の溝である。8、101号溝とは平行、直交する。これは街割りの区画内をさらに区切る溝と思われる。101号溝が15号溝先端部付近で、上幅を変え、湾曲をはじめること、この内側に掘立柱建物が集中す

ることからすると、建物の周囲にめぐらされた溝なのかもしれない。

101号溝は120～260cm、深さ100cm前後、8号溝は幅120cm、深さ80cm、15号溝は幅170cm、深さ30cmを計る。8号溝と101溝直交部分の間は55m弱、8号溝と15号溝の間隔は22m弱である。

20、25、26、33、34、49、52、58、60～67号溝（第6図）、80～82、84、85、87号溝（第7図）

畝溝と考えられる。第1調査区ではA～C区に分布している。丘陵裾とは直交方向となる。幅30cm、深さ10～15cmで覆土は黒色の砂質土である。切り合い関係を持つものがある。

第2調査区ではI区に分布する。丘陵裾とは直交方向をとる。断面形はU字状で幅40cm前後、深さ50cm前後と第1調査区で検出されたものと趣きを異にする。溝の延長は12mを計り、溝同しの間隔は2m程である。覆土は灰色の粘質土で、丘陵崩落土を多量に含む。

48号溝（第6、63図）

1C-b3区から2D-a2区にかけて検出された。丘陵裾に平行する溝である。幅100cm前後、深さ10cm程である。これも7号溝等と同様の溝なのかも知れない。

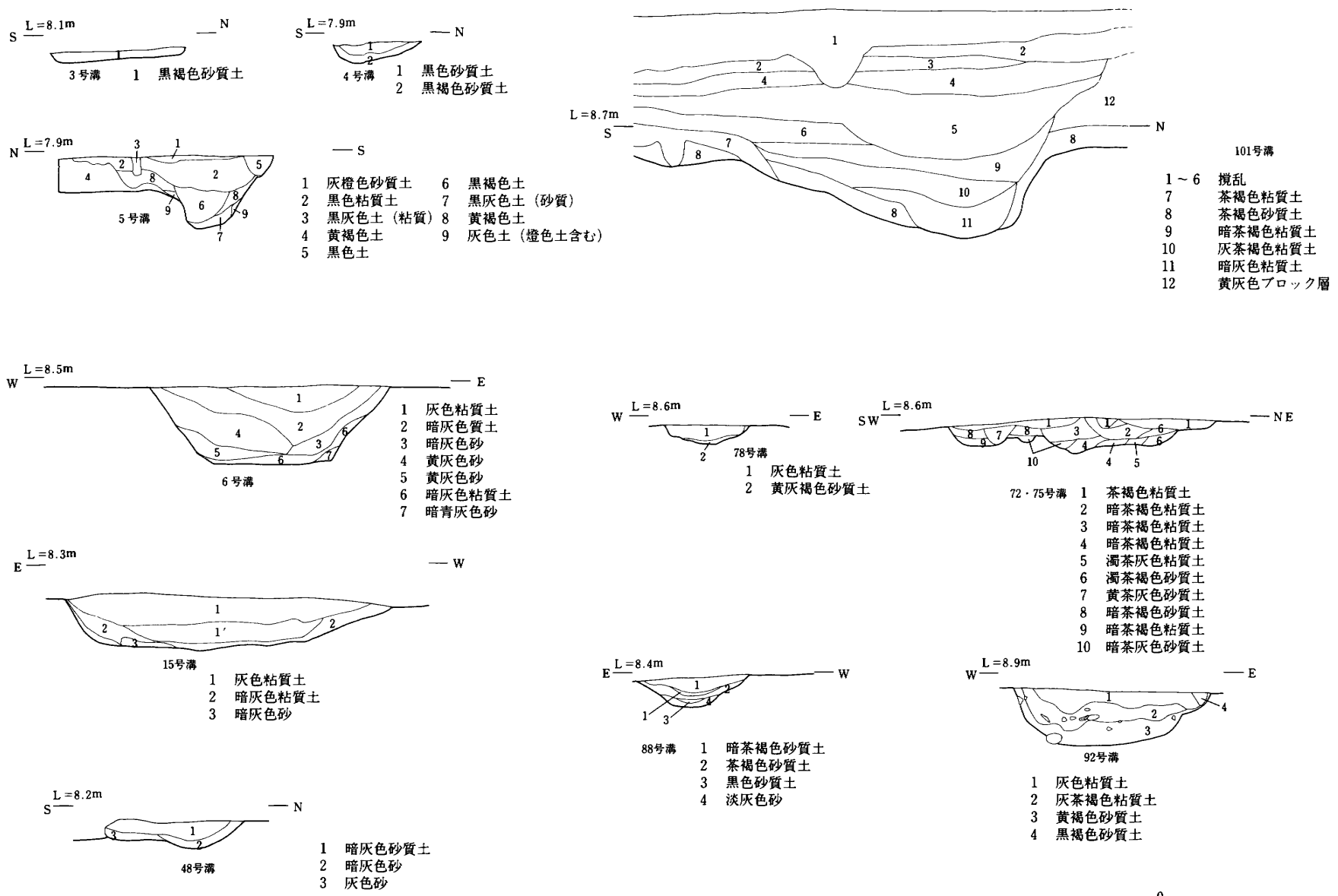
72、77、89、88号溝（第7、63図）

7号溝等の所で述べた通りである。幅、深さとも7号溝等と同じである。72、77、89号溝より丘陵寄りには遺構が少なく、当時の丘陵裾に添うように走っていたと思われる。

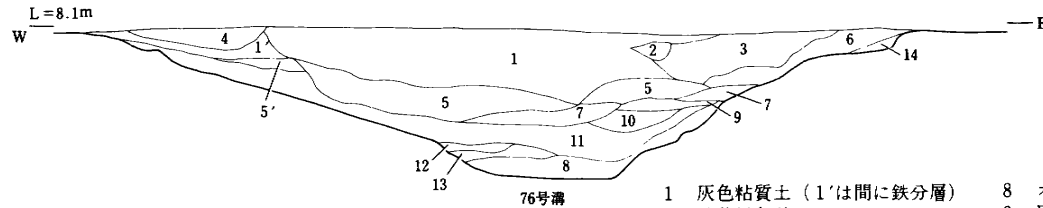
76号溝（第7、62、63図）

1H-b4、d1区から2H-a4、c1区で検出された丘陵裾に直交する溝である。幅460cm、深さ120cmを計る。溝底中央部は1段深く掘り入れ、その立ち上りからはゆるやかな傾斜で立ちあがる。先端部に向っては徐々に細くなっており、8号溝に類似している。

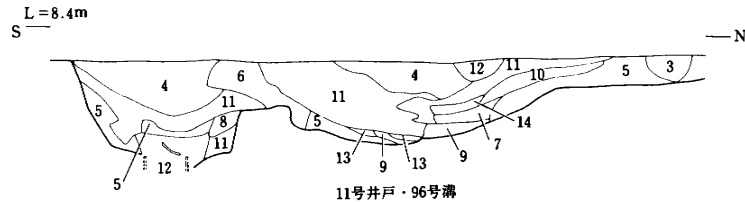
溝底の1、2区間のライン付近には第62図の様な遺構が組まれていた。まず、四隅に杭を配し方形、あるいは台形状の区画を設け、この辺に添う様に竹を縦割



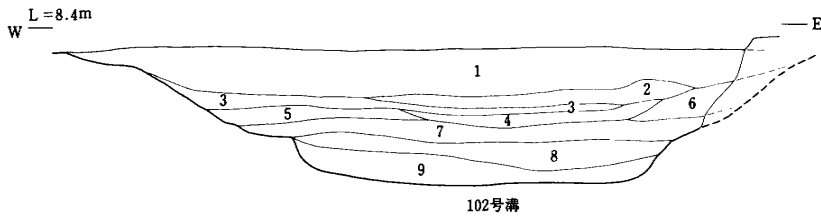
第63図 溝土層断面図〔1〕(1/60 6号溝、15号溝は1/30)



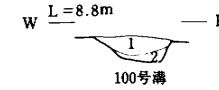
- | | |
|---------------------|------------|
| 1 灰色粘質土 (1'は間に鉄分層) | 8 オリーブ灰色砂 |
| 2 暗茶褐色砂 | 9 灰色砂 |
| 3 暗茶褐色砂質土 | 10 暗灰色粘質土 |
| 4 暗灰色粘土 | 11 暗灰色粘質土 |
| 5 暗灰褐色粘質土 (5'は間に砂層) | 12 オリーブ灰色砂 |
| 6 暗茶褐色砂質土 | 13 暗灰色粘質土 |
| 7 暗灰色粘質土 | 14 黄褐色砂質土 |



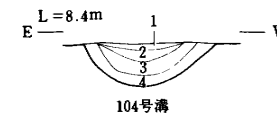
- | | |
|-----------|------------|
| 1 灰色粘質土 | 9 灰色砂質土 |
| 2 黄灰褐色砂質土 | 10 黒褐色砂質土 |
| 3 灰茶褐色粘質土 | 11 茶褐色砂質土 |
| 4 黄灰褐色砂質土 | 12 灰色粘質土 |
| 5 黄褐色砂質土 | 13 灰色砂質土 |
| 6 黒褐色砂質土 | 14 灰茶褐色砂質土 |
| 7 赤褐色砂質土 | |
| 8 黒灰色粘質土 | |



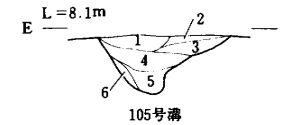
- | |
|-----------|
| 1 茶灰色砂質土 |
| 2 茶灰色砂質土 |
| 3 淡茶灰色砂 |
| 4 暗茶灰色砂質土 |
| 5 灰色砂 |
| 6 暗灰色砂質土 |
| 7 灰色砂質土 |
| 8 黒灰色砂層 |
| 9 青灰色砂 |



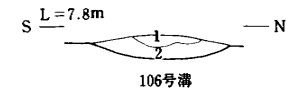
- | |
|----------|
| 1 灰色粘質土 |
| 2 暗灰色粘質土 |



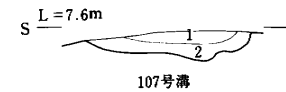
- | |
|----------|
| 1 黒灰色粘質土 |
| 2 茶灰色砂質土 |
| 3 茶灰色砂質土 |
| 4 茶灰色粘質土 |
| 5 淡茶灰色砂 |



- | |
|----------|
| 1 茶褐色砂質土 |
| 2 黒褐色砂質土 |
| 3 明茶灰色砂 |
| 4 茶灰色砂質土 |
| 5 淡茶灰色砂 |
| 6 |



- | |
|---------|
| 1 黒色砂質土 |
| 2 濁茶灰色砂 |



- | |
|----------|
| 1 黒色砂質土 |
| 2 凝灰色砂利層 |



第64図 溝土層断面図〔2〕(1/60)

りしたものをつきさし、これらをタガ状に竹を縦割りした物で巻いていたと想定される。このすぐ横からは舟形木製品が出土しているが、本来はこの区画内に納められていたのかも知れない。船形木製品の方が溝先端部を向く。

92号溝（第7、63図）

1I-b3、4区から2I-a3、4区で検出された丘陵裾に直交する溝である。ほぼ76号溝と平行する。断面形は鍋底状を呈し、幅100cm、深さ30cm程である。2I区部分では一段深くっており、同一の溝が延長された可能性がある。前述したように9号井戸出土遺物と本溝出土遺物が接合している。

96号溝（第7、64図）

1J-b4区から2J-a4区にかけて検出された丘陵裾に平行する溝である。幅210cm、深さ66cmを計り、溝底は弧状をなす。11号井戸、88号溝より新しい。また、74、78、93、105号溝とはほぼ平行する。97号溝とは並走するが、つけかえられたものであろうか。

74、78、93号溝（第7図）

丘陵裾に平行する溝である。H、I区に位置し、調査区のグリッドとは斜行する。幅1m弱、深さ10cm前後で88号溝、89号溝等と同一規模である。

102号溝（第8、64図）

1J-d4区から2K-c3区にかけて検出された丘陵裾とは直交する溝である。幅560cm、深さ108cmで溝底中央部が1段深くっており、76号溝の断面形と類似する。位置的な関係からすると96号溝と同一溝であり、区画を形成する可能性がある。

105号溝（第8、64図）

2K-c3区から1L-b2区にかけて検出された丘陵裾に平行する溝である。102号溝とはほぼ直交するが、新旧関係はとらえられなかった。幅102cm、深さ30cmを計る。

106号溝（第8、64図）

1M-b4区から2M-a1区にかけて検出された丘陵裾に直交する溝である。102号溝とは方向がやや異なる。

幅102cm、深さ20cmを計る。

107号溝（第8、64図）

1M-a4区から2M-c1区にかけて検出された丘陵裾に直交する溝である。幅130cm、深さ25cmを計る。攪乱により途中から破壊されている。

溝は、大、中、小ぐらの規模があり、畝溝を除けば、ほとんど区画を意図するものと考えられる。大溝はおそらく大区画を表わすもので、街割りの区画であり、中、小の溝は、その内をさらに区分するような性格を持っているものと思われる。

溝出土遺物（第65～72図）

118は3号溝出土の土師器碗である。口径11.1cm、底径6.5cm、器高4.2cmを計る。体部は直線的に開く。

119は4号溝出土の土師器皿である。口径7.2cm、底径6cm、器高1.2cmを計る。口唇部は面取りがなされている。

120～122は5号溝出土遺物である。120、121は製塩土器で、乳棒状尖底となるものであろう。122は須恵器甕胴部片で、焼きがあまり淡灰色を呈する。

124～126は6号溝出土遺物である。124、125は土師器碗である。124は口径10.8cm、底径6.6cm、器高3cmを計る。体部は内湾ぎみに開き、口唇部は引き出され薄く仕上げられている。126は珠洲焼甕口縁部片で端部は方頭状をなす。

123は7号溝以上の青磁碗底部片で高台径5cmを計る。

129、130は15号溝出土土器である。129は須恵器瓶口縁部片で口径23.9cmを計る。双耳瓶と思われる。130は珠洲焼片口鉢で底径14.4cmを計る。外底面には静止糸切り痕が残る。

127～133は8号溝出土土器である。127、128は土師器皿で、127は外底面周辺をヘラで削っている。128は非クロ整形で口径12.3cm、器高2.6cmを計る。131、132は珠洲焼甕口縁部片である。口縁端部が方頭状をなす。132はやや外反が強く、端部はゆるい嘴頭状となる。133は瓦器火鉢である。口縁部に2条の突帯がめぐらさ

れ、その間にボタン状の貼り付け文が施されている。

134は73号溝出土の珠洲焼水瓶である。頸部付け根付近には花卉状の浮き彫りが施されている。

135、136、139は76号溝出土土器である。135は珠洲焼甕口縁部片である。胴部は肩の張らないずん胴で、口縁端部は方頭状を呈する。136は珠洲焼片口鉢で、口唇内面には波状文が施される。137は土師器皿で口径14.5cmを計る。口唇は引きだされ、底部外縁にはヘラケズリが施される。

137、138は78号溝出土土器である。137は土師器皿の柱状高台である。高台の中心には径0.7cm程の穴が、内底面よりあけられている。高台径は5.6cmを計る。138は製塩土器である。乳棒状の尖底であるが、大きさからすれば、かなり大形の物と思われる。

第67、68図は101号溝出土土器である。140～146は土師器皿で、140～142は小皿、143、144は中皿、145、146は大皿である。小皿は口径6.6～7.5cm、底径4.5～6cm、器高1.4～1.5cm、中皿は口径11.4cm、底径6～6.6cm、器高2.1cm、大皿は13.8～15.9cm、底径8.3～8.7cm、器高3.3cmを計る。中、大皿外底面の周辺や全面を削るものが見られる。いずれも口唇の内面にナデ調整が施され、中、大皿では薄く引き出された様な形状をとる。胎土は砂粒をあまり含まず、乳白色を呈するものが多い。

147は珠洲焼壺である。内外面ともに押圧具の痕跡が残る。148、149は瀬戸系陶器、150は瓦器火鉢である。

151、152、154は珠洲焼甕である。151、154は口縁が短い嘴頭状、152は方頭状を呈す。153は珠洲焼で羽釜であろう。

155～157は珠洲焼片口鉢である。いずれも口径端部が平直に仕上げられており、155、157はこの部分に波状文が施されている。158は珠洲焼水瓶頸部である。

159～164は77号溝出土土器である。159～161は土師器皿で、小皿(159)と大皿(160、161)がある。162～164は珠洲焼で、162は甕、163、164は片口鉢である。164には卸し目が確認できる。

165は87号溝出土の土師器皿で、口唇部が面取りされている。

166～168は82号溝出土土器で166は青磁167、168は土師器皿である。167は底部が厚く、内底面と口縁端部との高さの差がほとんどない。

169、170は88号溝出土の土師器皿である。170は柱状の高台で、中心には穿通する穴があげられている。

172、173は85号溝出土土器である。172は土師器皿で非ロクロ製である。173は越中瀬戸焼皿で、85号溝等の畝溝の時期を示すものであろう。

174～177は93号溝出土土器で、174～176は土師器、177は製塩土器である。10号井戸出土の物と同時期と思われる、10号井戸出土の土器は93号溝の物が流れ込んだものと思われる。

178～183は96号溝出土土器である。178～181は土師器で、178、179は皿、180、181は碗であろう。182は乳棒尖底部を持つ製塩土器、183は土師器土錘である。

184～190は92号溝出土土器である。多時期の物が混在している。184、185、187は須恵器、186は製塩土器、188～190は土師器皿である。

191は76号溝出土の船形木製品である。長さ36cm、幅6cm、厚さ4.5cmを計る。心村を用い、先端から3cm、下端から6cmを残してくりぬき、先端部を斜めにそぐことにより船形に仕上げている。

192は95号溝出土の木筒(?)である。表裏とも文字が書かれているが判読できないでいる。

193は108号溝出土の石臼である。径は18cmを計り、上面は丁寧な加工が施されている。

第71図は102号溝出土遺物である。194は土師器碗で、口径11.7cm、底径4.7cm、器高4.5cmを計る。195は堆塙であろうか。口径10.5cm、器高4.5cmを計る。

196～203は珠洲焼で、196は甕口縁部片である。197～202は壺である。197は比較的短い口頸部が内湾ぎみに立ちあがるのに対し、他は長めの口頸部が外反ぎみに立ちあがる。200は口縁端部が嘴頭状に引き出されている。202は器形を復元できた物で、口径17.1、底径

8.7cm、胴部最大径28.2cm、器高33.8cmを計る。肩部に「大」の刻字文が施されている。203は片口鉢底部片である。

204は100号溝出土の珠洲焼甕である。方頭状の口縁形態をとる。

205、206、285は103号溝出土土器である。205、206は珠洲焼片口鉢である。285は珠洲焼で装飾叩打文が施されたものである。

207～209は104号溝出土の土師器皿である。207は口径8.7cm、底径4.8cm、器高1.8cm、208は口径9.2cm、底径6.9cm、器高1.8cmを計る。209は底部にへら切り痕を残すもので口径10.5cm、底径6.9cm、器高1.7cmを計る。

210、211は105号溝出土土器で、210は須恵器瓶底部、211は土師器こしきであろうか。

212は106号溝出土の珠洲焼紡錘車である。径は4.2cm、高さ1.8cmを計る。側面は不規則な面取り状の加工がなされている。

6. 包含層出土遺物

遺構以外から出土した物を包含層出土遺物として報告する。第1調査区では遺物包含層をとらえきれず、上半以上を重機で除去しており、遺構上面の遺物が多い。第2調査区は包含層を上端から残すことができたが、包含層自体から出土した遺物は少ない。攪乱等かの物が多い。第3調査区は包含層自体が削平されており、取り上げたものは調査区北端の落ち込みと攪乱からの物がほとんどである。

第73、74図は第1調査区出土のものである。213は縄文土器である。外面には縦位の条痕文が施されている。214～217は須恵器である。214、215は10号土坑の物と思われる。218～220は土師器皿の柱状高台部分である。底径は5cm強であるが高さはやや低いもの(218、219)と高いもの(220)がある。212～225は土師器皿である。221は底部が厚く口縁上端と内底面の差がほとんどない。222は薄手で体部に段を有する。223はやや

径の小さな底部から長めの体部が直線的に開く。224、225は内面が黒色処理されている。226は玉縁状口縁の白磁碗である。

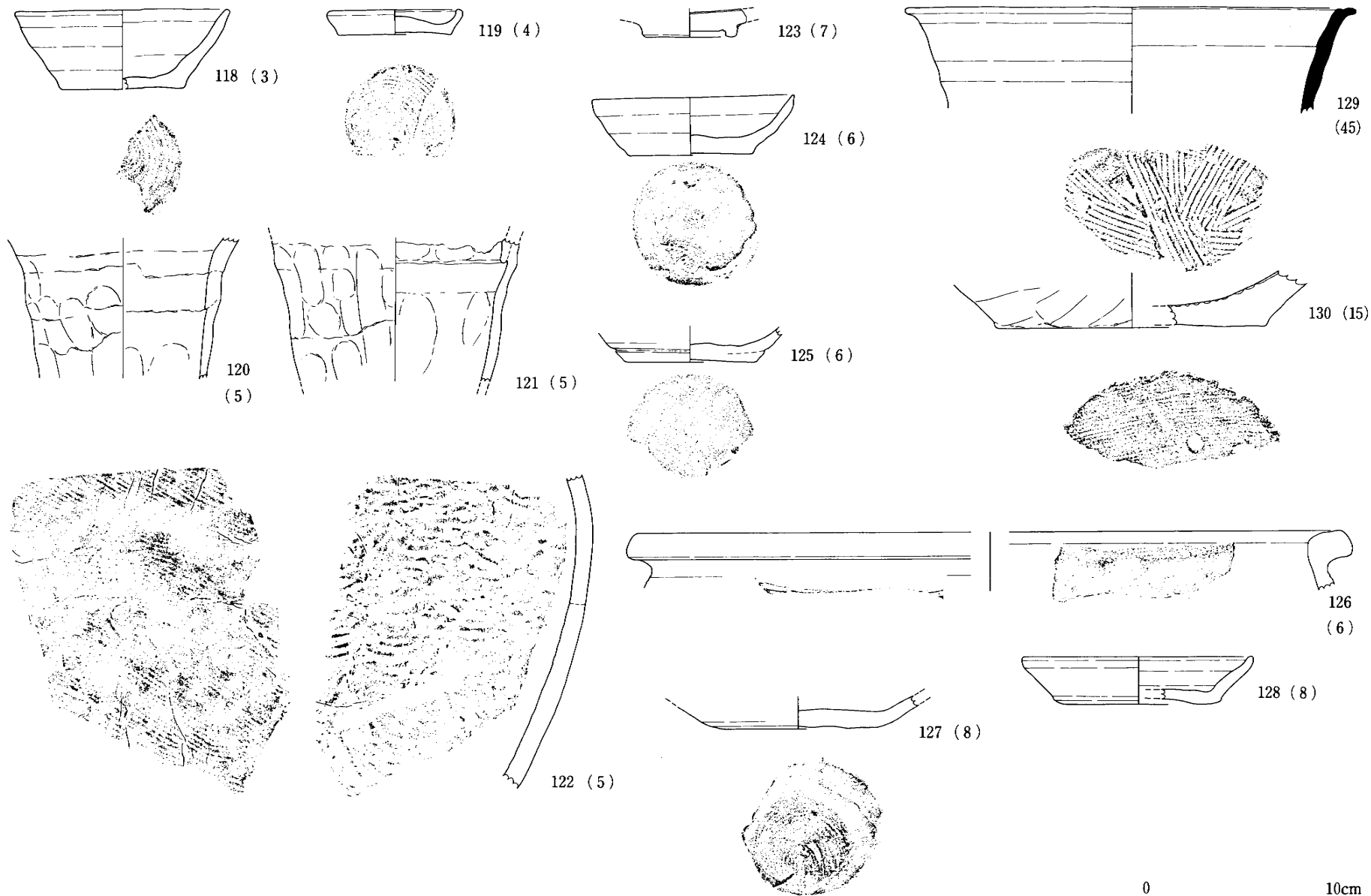
227～231、233～236は珠洲焼である。227、228、236は壺、229～231、233、234は甕、235は片口鉢である。232は越前焼である。

第75図は第2調査区出土遺物である。237は縄文土器で有段の口縁に3条の平行沈線が引かれている。238、239は弥生土器である。238は壺、239は高坯脚部であろうか。241～247は須恵器である。多時期の物が見られる。242は須恵器と考えたが珠洲焼の可能性もある。240、248～250は土師器碗である。240は内面が黒色処理されている。248～259は93号溝の遺物であろうか。245、246は製塩土器である。245は小型平底、246は乳棒状尖底となる。

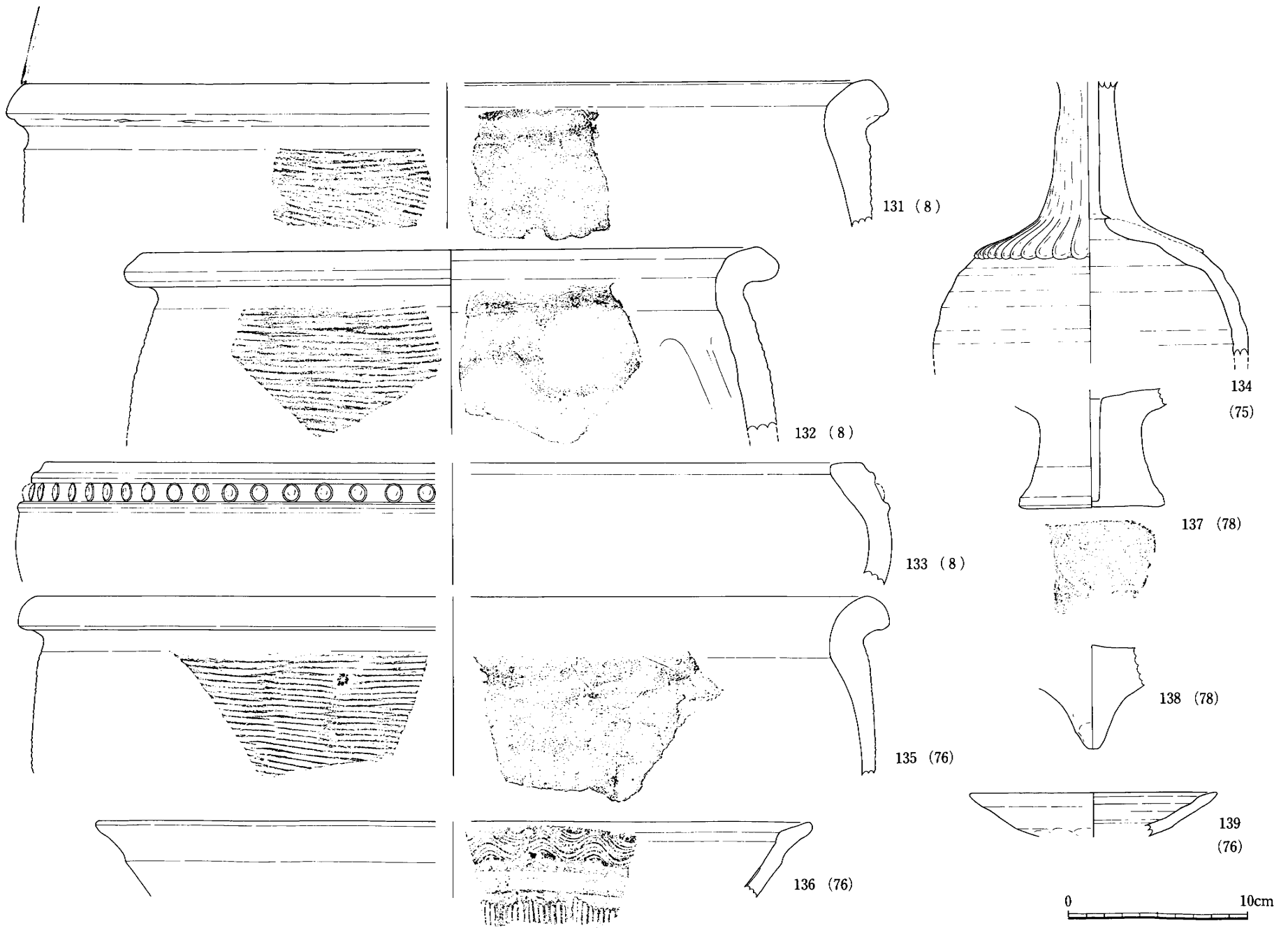
251～256は土師器皿である。251は柱状高台部分で中心に穴があげられている。254は外底面が平坦に調整加工されており、本遺跡では本例のみである。252、253はロクロ整形、255、256は非ロクロ整形品である。257は青磁碗、258、259は越中瀬戸焼皿である。260は刀子で長さ13.5cm、幅1.1cmを計る。

第76、77図は第3調査区出土遺物である。ほとんどが調査区北端の落ち込みから出土している。261、262、280～281は珠洲焼甕である。口縁が嘴頭状をなすもの(261、262)と方頭状を成すもの(280～282)がみられる。263～266、283、284は珠洲焼壺である。264、284には刻文が施されている。266は格子目状のモチーフが描かれている。267、268、270は土師器皿である。270は外底面にへら削りが施される。

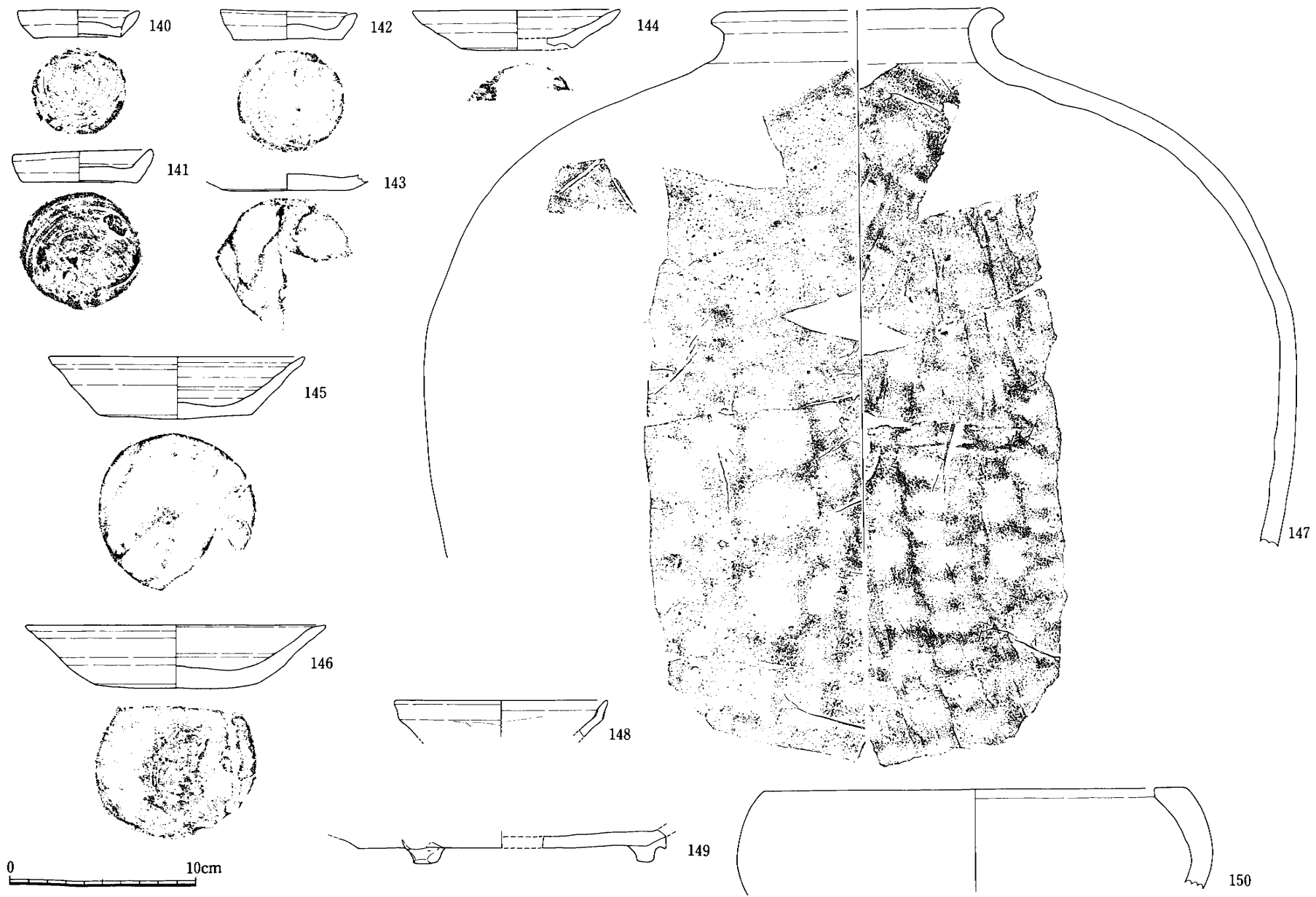
271、272は漆器碗である。両者とも黒漆が塗られている。273は土鈴である。高さ3.9cm、径3.3cmを計る。尖頭部には小孔が穿たれている。274、275は銅銭で、274は元豊通寶であろうか。275は遺存状態が悪く判読できない。276～278は土錘である。276、277は土師質、278は陶質である。279は両端に敲打痕を持つ礫で叩石か礫石錘と思われる。



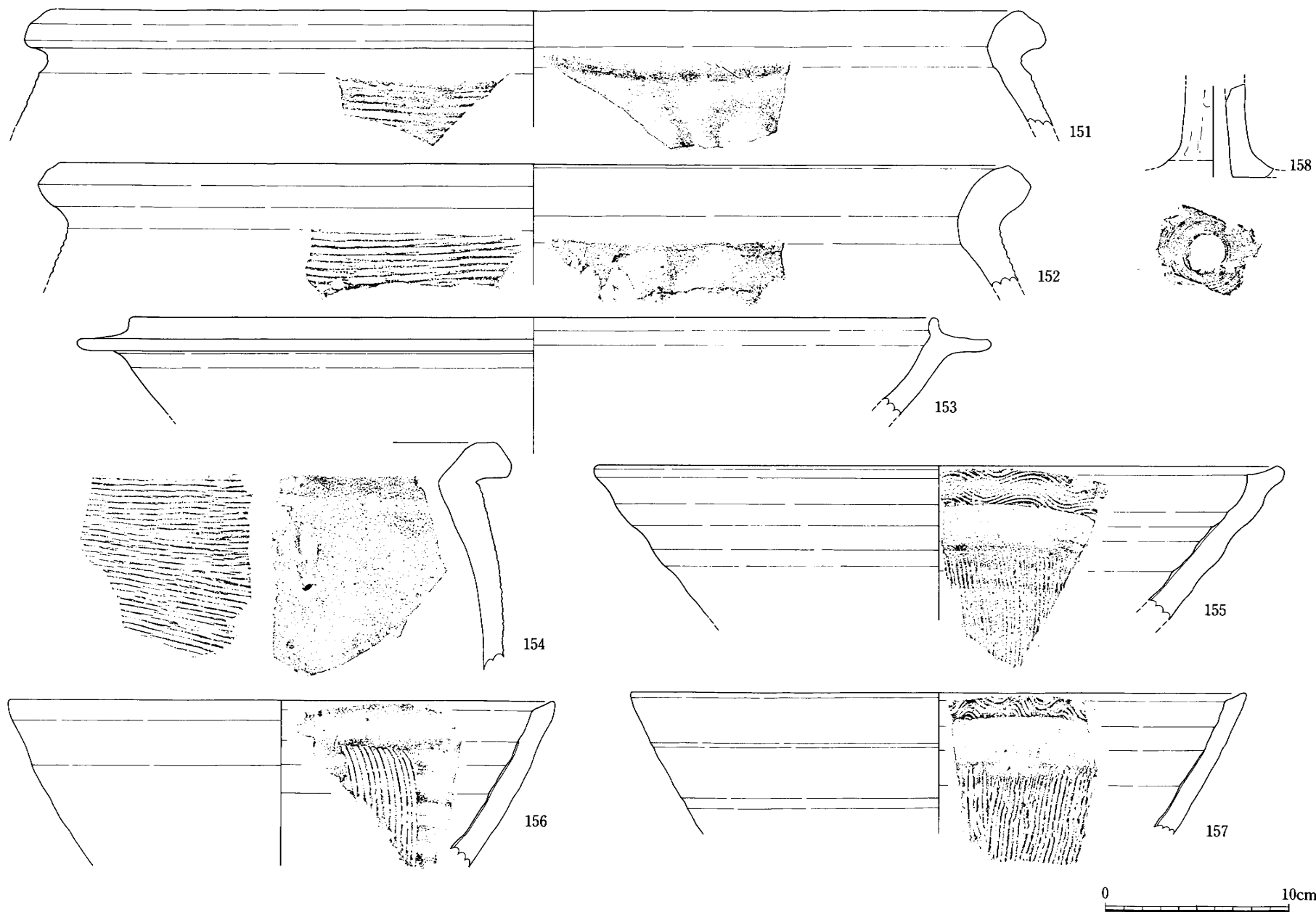
第65図 3・4・5・6・7・8・14・15号溝出土遺物〔1〕(1/3) ()は溝番号



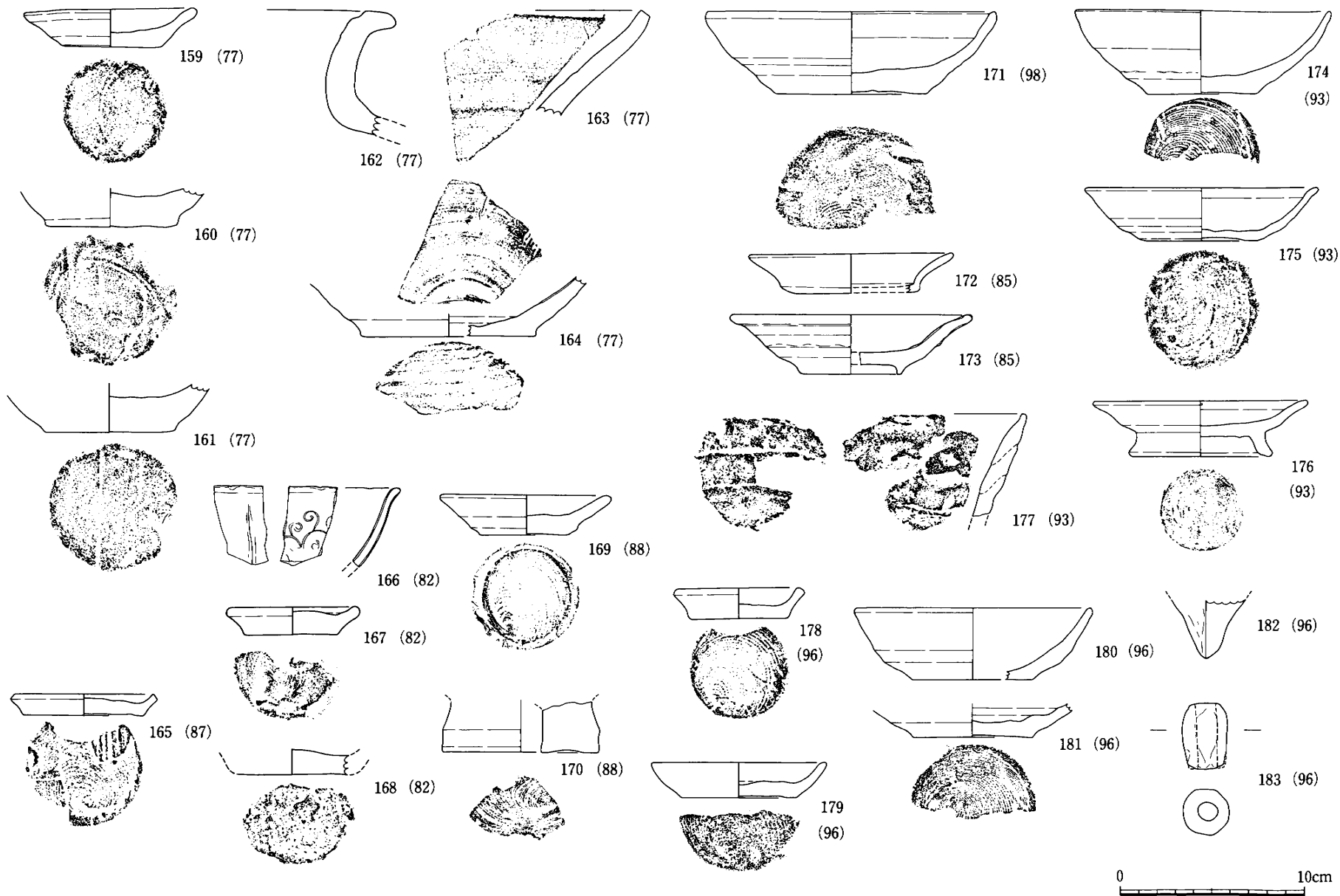
第66図 8・73・76・78号溝出土遺物〔2〕(1/3) ()は溝番号



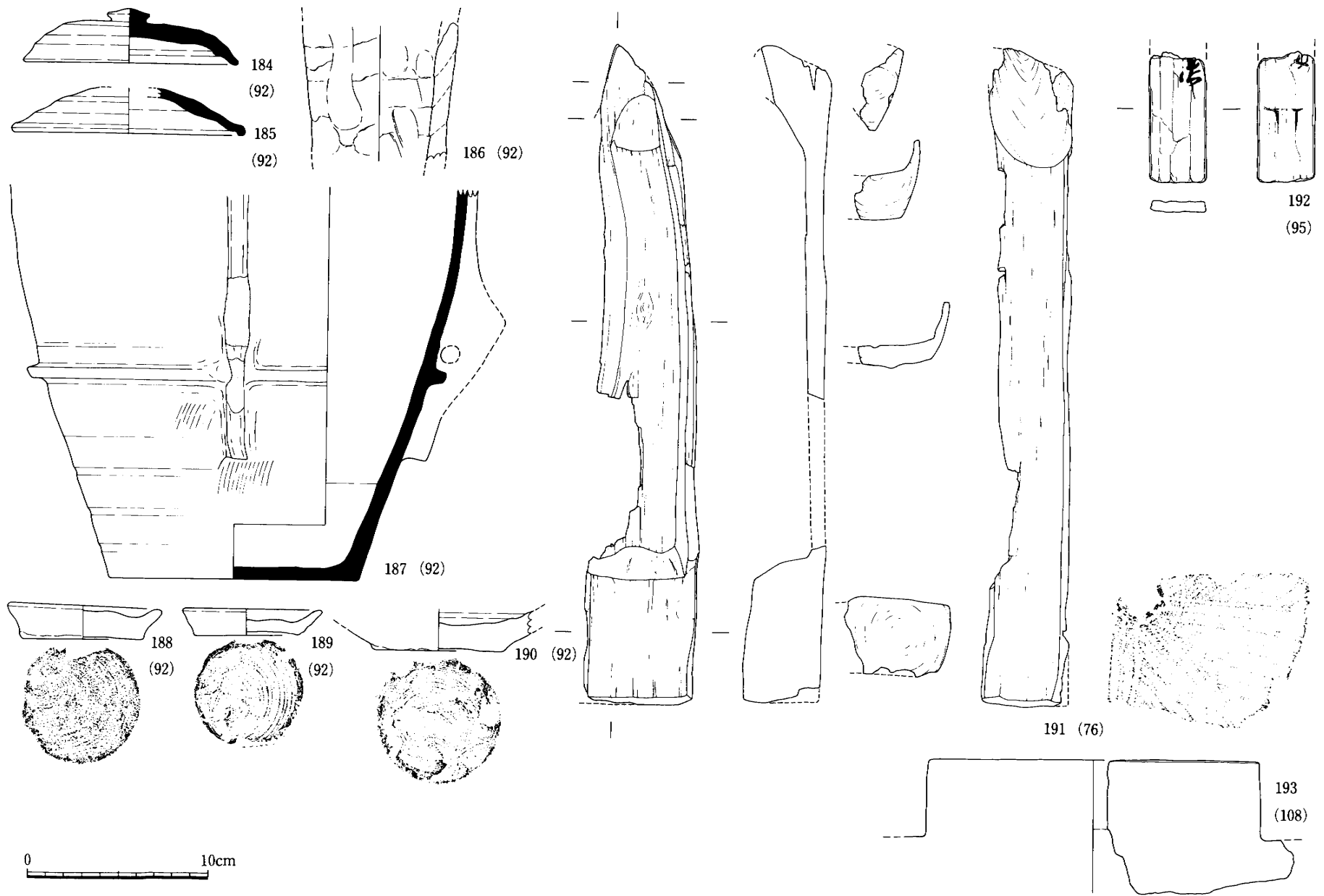
第67图 101号溝出土遺物(3)(1/3)



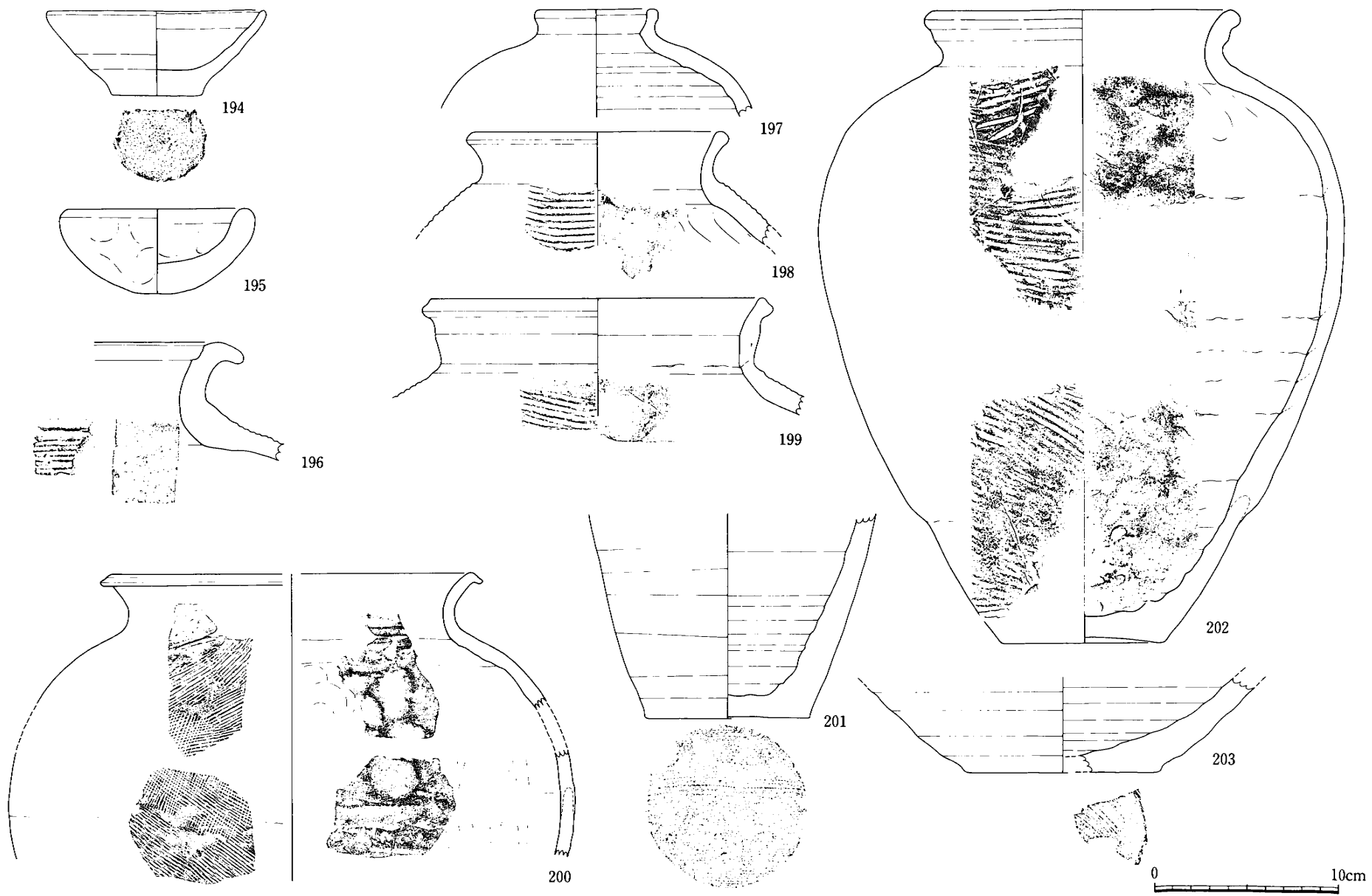
第68图 101号沟出土遗物(4)(1/3)



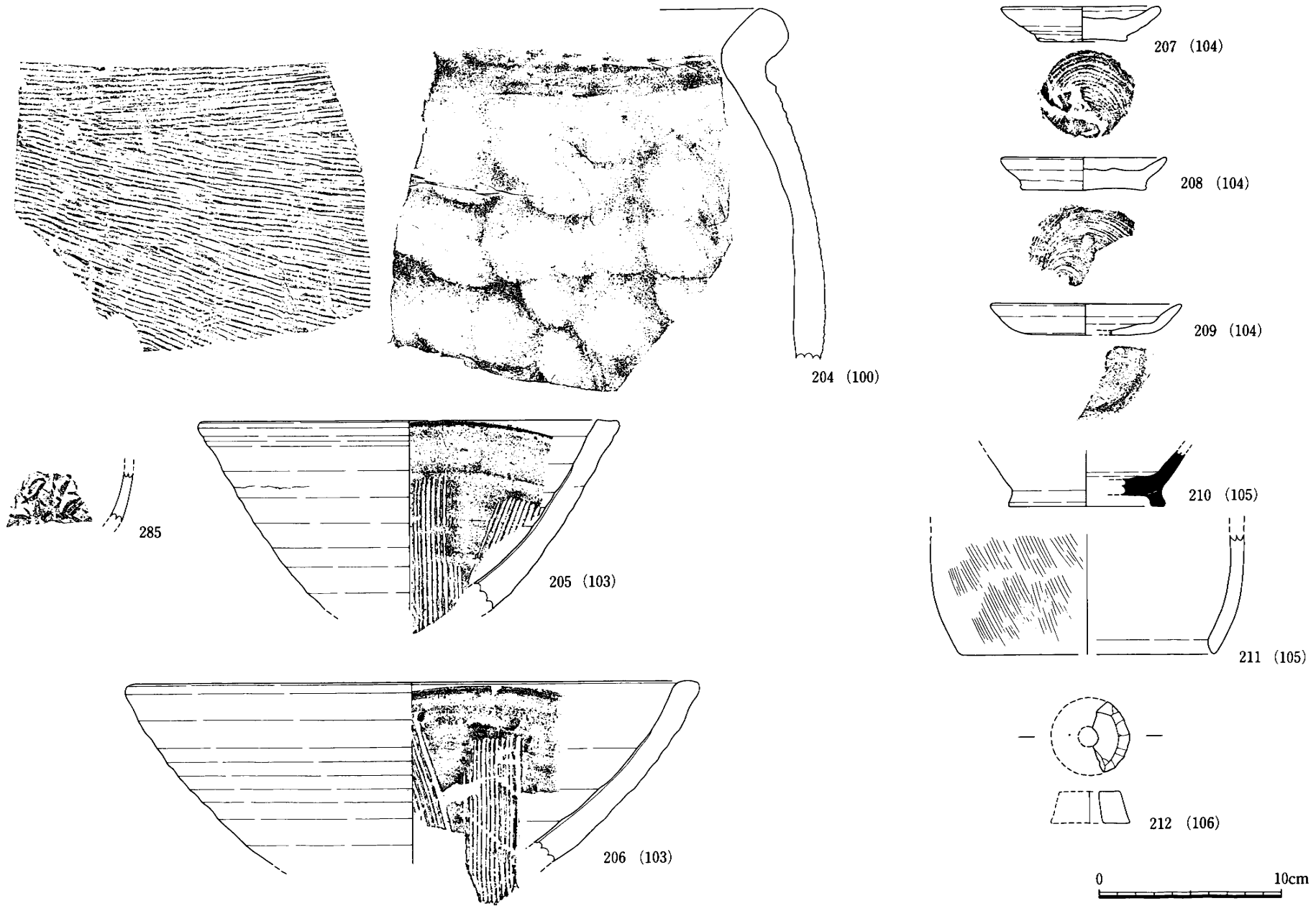
第69図 77・82・85・87・88・93・96・98号溝出土遺物〔5〕(1/3) ()は溝番号



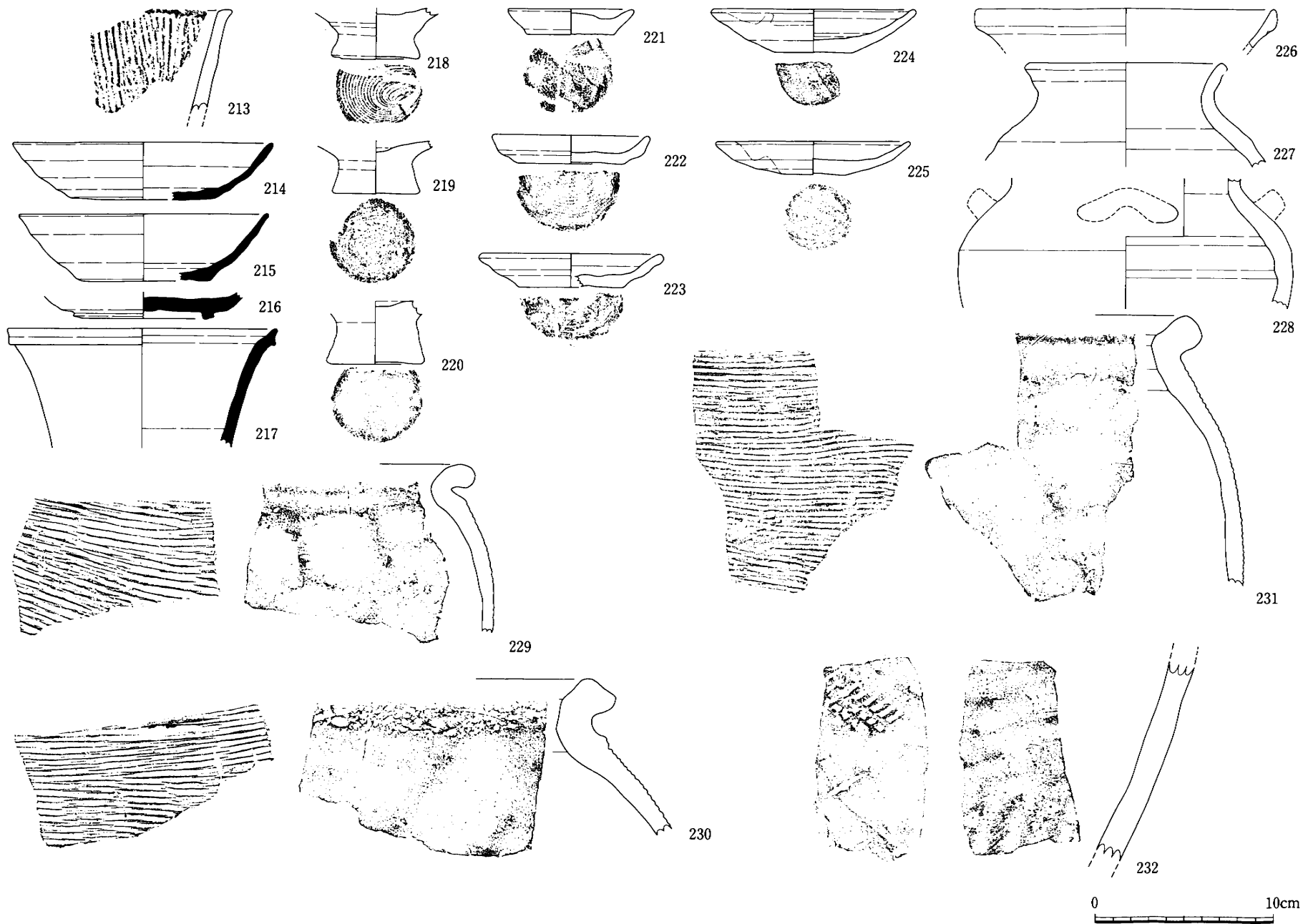
第70图 76·92·93·94·108号沟出土遗物〔6〕(1/3)



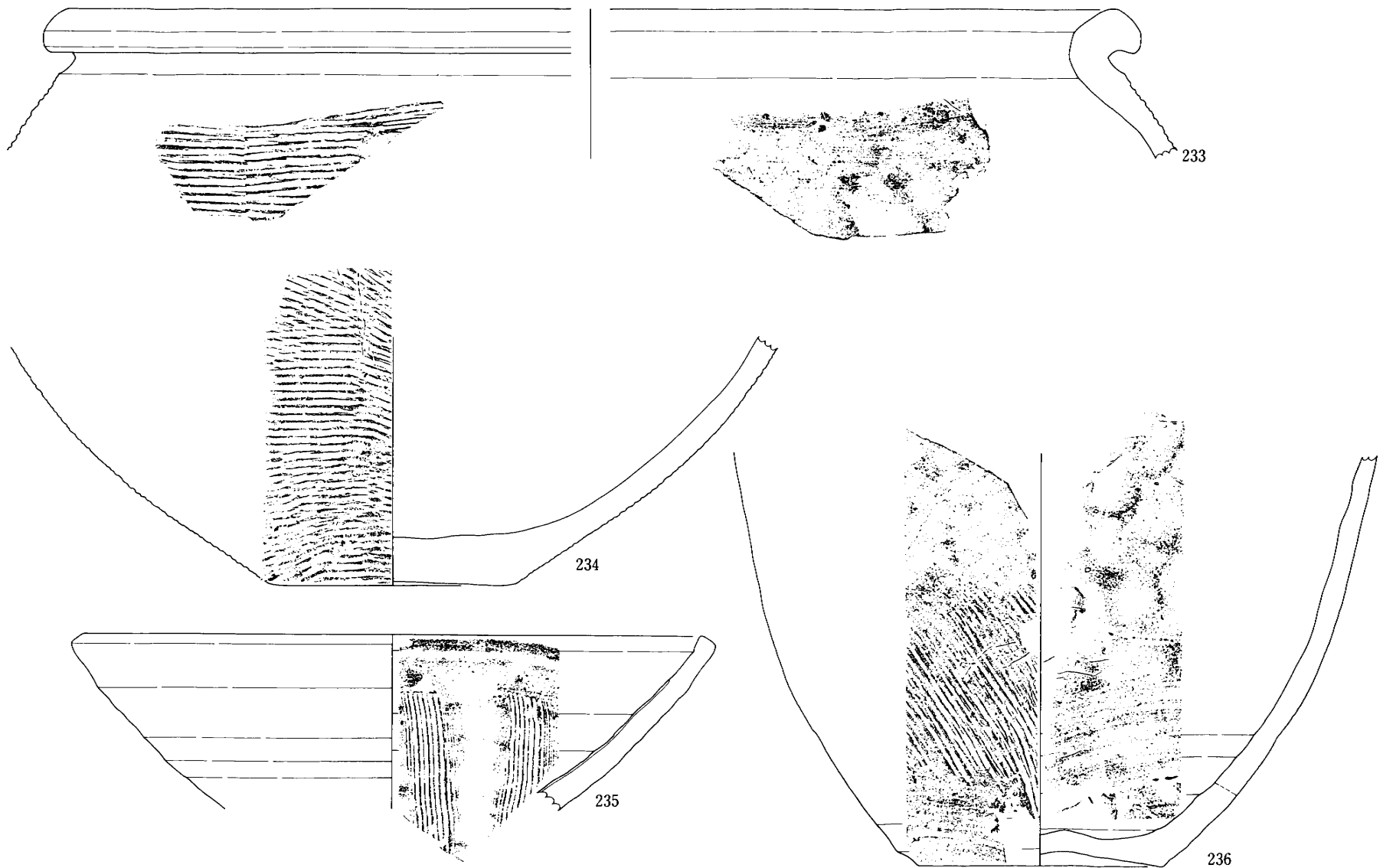
第71图 102号溝出土遺物(7)(1/3)



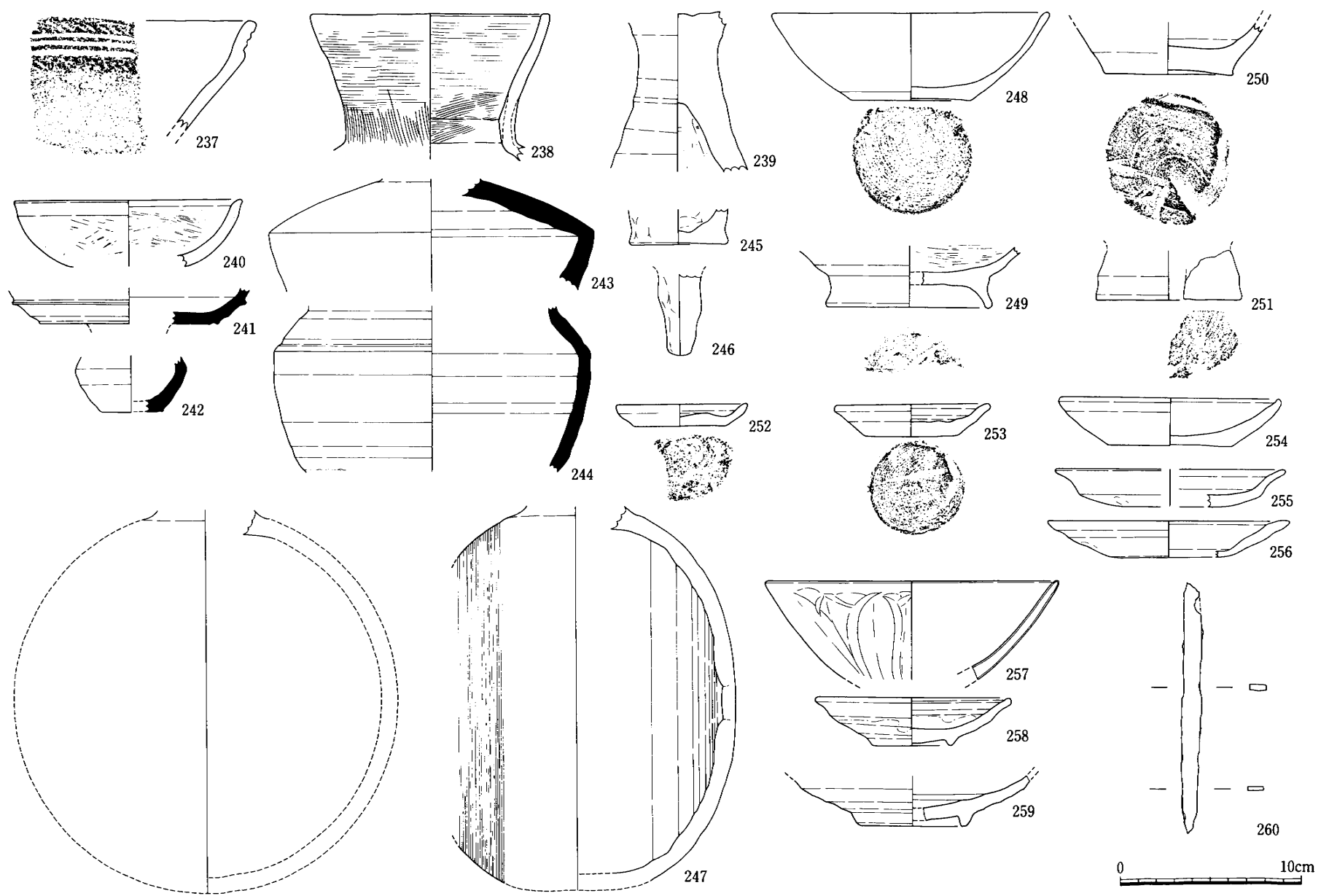
第72図 100・103・104・105・106号溝出土遺物〔8〕(1/3) ()は溝番号



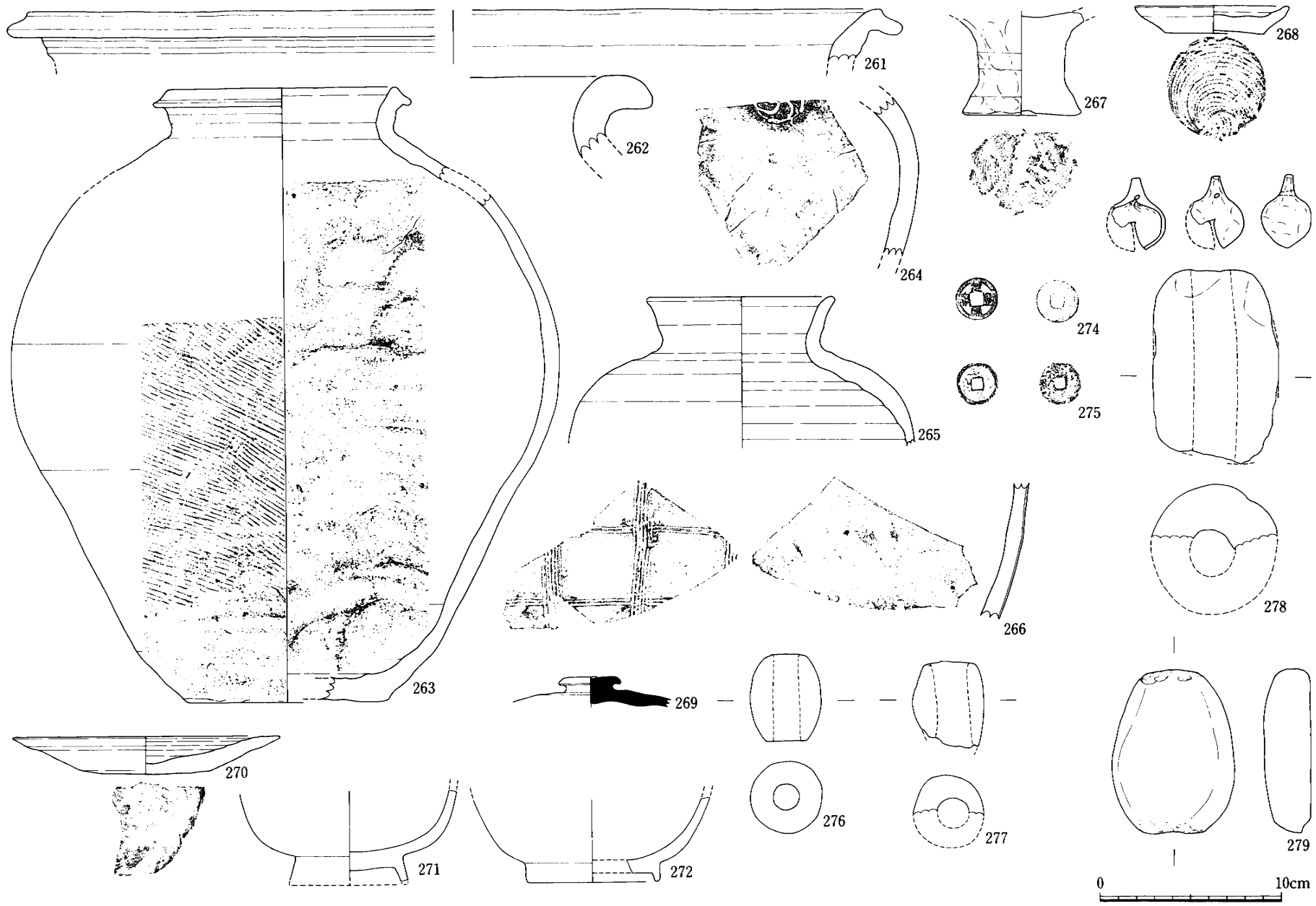
第73図 包含層出土遺物〔1〕(1/3)



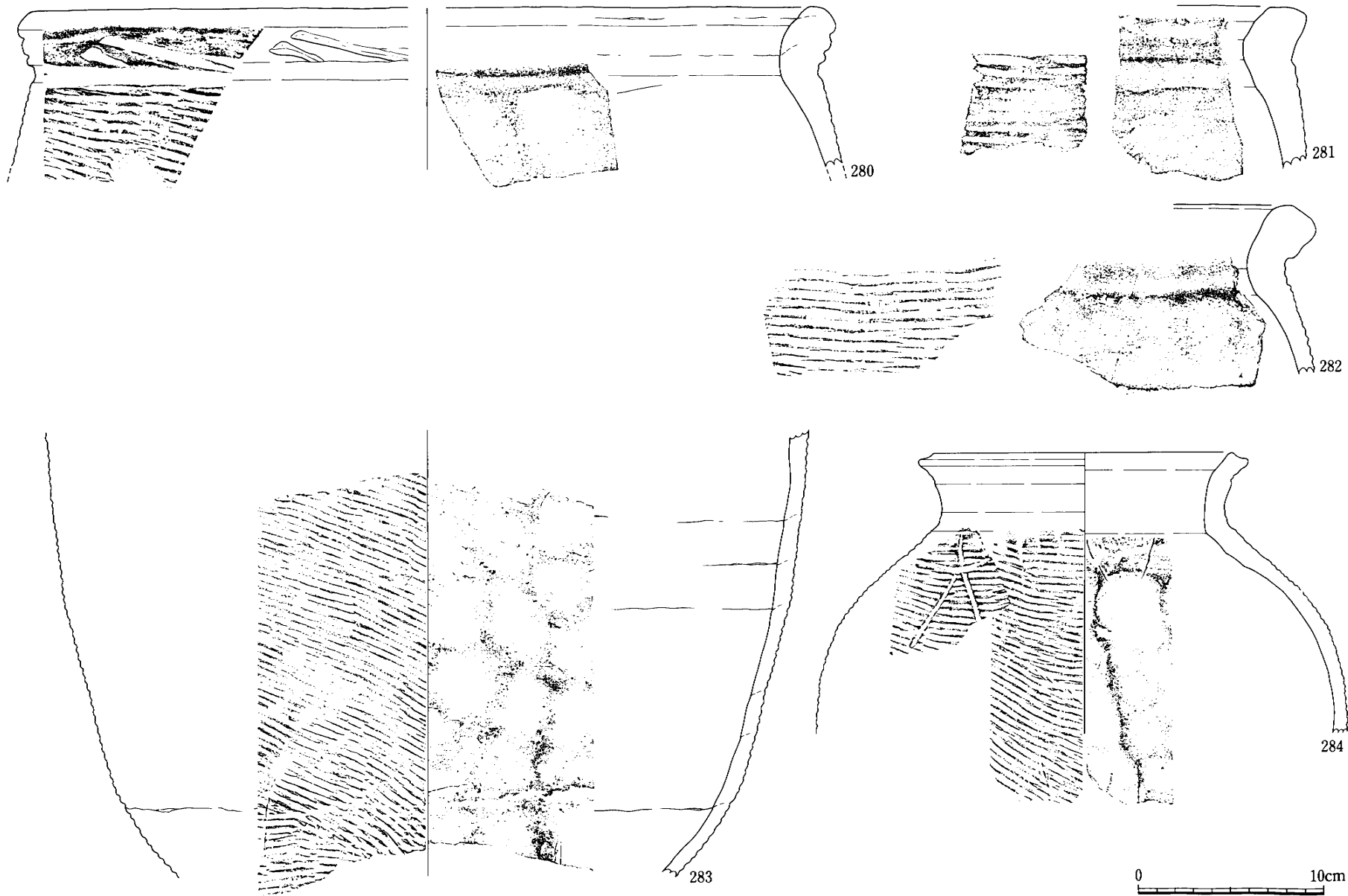
第74図 包含層出土遺物〔2〕(1/3)



第75図 包含層出土遺物(3)(1/3)



第76図 包含層出土遺物〔4〕(1/3)



第77図 包含層出土遺物(5)(1/3)

IV まとめ

本遺跡は発見当初、北に位置する飯田城跡の延長、あるいは関連する遺跡として考えられ、飯田城山遺跡、飯田城山下遺跡と呼称されていた。今回の調査で時代的に飯田城跡とはズレがあり、直接的な関係を持たないことが明らかとなった。遺物としては縄文時代から近世の物が確認できるが、その主体は平安時代後半から室町時代中ごろまでで、検出された遺構もその時代の物がほとんどである。前述した様に遺跡は飯田町市街地下に展開する事が想定され、検出された遺構が古代から中世の飯田町の状態を示していることから、今後、本遺跡を飯田町遺跡として呼称していきたい。遺跡範囲は限定できないが、東端は第4図の市道122号に並走する等高線あたり、南端は国道249号の南に並走する等高線あたりと地形から判断できる。

遺構は、掘立柱建物、井戸、土坑、溝等が検出された。掘立柱建物は遺構重複の激しさや攪乱、調査幅の限定などから満足に復元できたものが少ない。井戸は縦板組隅柱横どめの井戸側を持つものが主体であるが、これの下部に丸太剥抜き、曲物、珠洲焼甕、結桶を組み合わせるものが見られ一様ではない。土坑は井戸側が抜き取られた可能性を持つものを含むが、バケツ状の形態をとる物が多い。埋甕の甕が抜き取られたものの中には含まれるのではないかと思われる。溝は畑の畝溝と考えられる物もあるが、多くは区画を意図したものと考えられる。幅の広いしっかりとした溝は時代的に新しく、掘状に屋敷地を囲むと想定し得るものもある。

本来はこれら遺構が組み合わさり1つの居住域、屋敷地を構成していたと思われるが、それははっきりさせることができなかった。ただ、丘陵に並走する溝は丘陵に近づくと新しい傾向があり、井戸についても同様な傾向がうかがえる。

遺跡は余々に丘陵裾を削る様に拡大しながら、15世

紀後半位には現在の町並の基本となる様な形態を造り上げていたものと思われる。

遺物は縄文土器等が少量出土しているが、主体は平安時代後半から室町時代中ごろまでの物が主体となる。平安時代の物は遺構としてのまとまりがなく、この地域の様相が明らかでないこともあって時期も限定しづらい。須恵器では10世紀後半ごろの物が比較的目につく。土師器では10世紀後半から11世紀代の物が見られる。この他、棒状尖底、小型平底の製塩土器が目につく。確実な遺構が確認できるのもこの時期からで、集落としての初源がこのころと考えられる。

中世では珠洲焼、土師器が主体でその他瀬戸系陶器が少量ある。越前焼、磁器類は極めて少ない。数値的には確認していないが、他地域と比べ土師器の割合が少ない様に思われる。土師器は器形的には椀、皿で、底部に糸切り痕を残すロクロ整形がほとんどを占め非ロクロ整形は極めて少ない。図示した物がすべてに近い。ロクロ整形品は従来12世紀ごろとされてきた物に類似したものもあるが、これまでに検出例のない物が多い。時期も珠洲焼との共伴に恵まれず、特定できる物は少ない。底部にヘラ削りを施す一群(101号溝やPit 45等出土のもの)は、富山県井口城跡(上野他1990)で確認例があり、15世紀後半に位置付けられている。この他、口縁端部を引き出す一群(6号溝、Pit 68等出土のもの)、口縁端部を面取りする一群(4号井戸、Pit 72等出土のもの)、底部が厚く、内底面と口縁端部高がほとんど同じ小皿を有する一群(23号土坑等出土のもの)、口径と底径の差がやや大きく、口縁端部を丸くおさめる一群(13号土坑等出土のもの)、柱状高台を持つ小皿と共伴する一群(88号溝等出土のもの)がある。型的には述べた順に古くなると思われるが特定はできない。

法量的には、大小、あるいは大中小ぐらゐに各群とも分類されそうである。ここで興味深いのは、その作り分けで、大小ともに底径がほとんど同じで、体部の長さだけが異なるといった傾向が見られる点である。

4号井戸出土の土師器椀の製作技法を見ると、円柱状の粘土の上に粘土紐を巻きあげ、ロクロ回転によって整形し仕上げ、底部を切り離すといった方法をとっている。大小の作り分けは、この粘土紐の巻き上げる長さによって行なっていると考えられる。ロクロ整形で仕上げられる点や、まれに珠洲焼に焼かれた小皿が存在することからすれば、珠洲焼の工人によって土師器も製作されていた可能性があろう。年代的な問題も含め今後の研究を持ちたい。

珠洲焼については生産地に近い消費地こともあってか量的には多い。ただ、日常雑器が主体であり、装飾性に富む物や特殊な物は極めて少ない。

越前焼や磁器類は極めて少ない。両者とも10片たらずにすぎない。瀬戸系陶器はやや目に付くものの数量的には前者と大きな違いはない。時期的に限定されたものであろうか。その他の遺物では舟形木製品の出土状態が興味を引く。

以上はなほだ簡単ではあるが、調査で得られた資料について気のついたことを述べてきた。遺跡としては第一級の遺跡と考えているが、事実報告、まとめともに不十分な形でしかまとめることができなかった。担当者である自分の力量不足をおわびするとともに、今後の研究の課題としたい。

引用・参考文献

- 上野章他 1990 『井口城跡』 富山県井口村教育委員会
- 宇野隆夫 1989 『考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』 真陽社
- 小嶋芳孝他 1988 『寺家遺跡発掘調査報告II』 石川県立埋蔵文化財センター
- 古代土器研究会 1988 『北陸の古代土器研究の現状と課題』 石川考古学研究会、古代土器研究会
- 珠洲市史編さん専門委員会 1976 『珠洲市史 考古編』 珠洲市
- 田嶋明人他 1986 『漆町遺跡I』 石川県立埋蔵文化財センター
- ” 1987 『永町ガマノマカリ遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
- 西野秀和他 1988 『津幡町刈安野々宮遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
- 西野秀和、垣内光次郎 1985 『鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡(II)』 石川県立埋蔵文化財センター
- 藤田邦雄 1989 『中世土器素描—加賀地方の土師器を中心として—』 『北陸の考古学II』 石川考古学研究会誌第23号、石川考古学研究会
- 北陸中世土器研究会 1991 『城館遺跡出土の土器・陶磁器』 北陸中世土器研究会
- 三浦純夫、垣内光次郎 1984 『普正寺遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
- 吉岡康暢 1989 『珠洲の名陶』 珠洲焼資料館
- 1989 『日本海域の土器・陶磁—中世編—』 六興出版
- 四柳嘉章 1987 『西川島』 穴水町教育委員会



調査参加者

版 圖



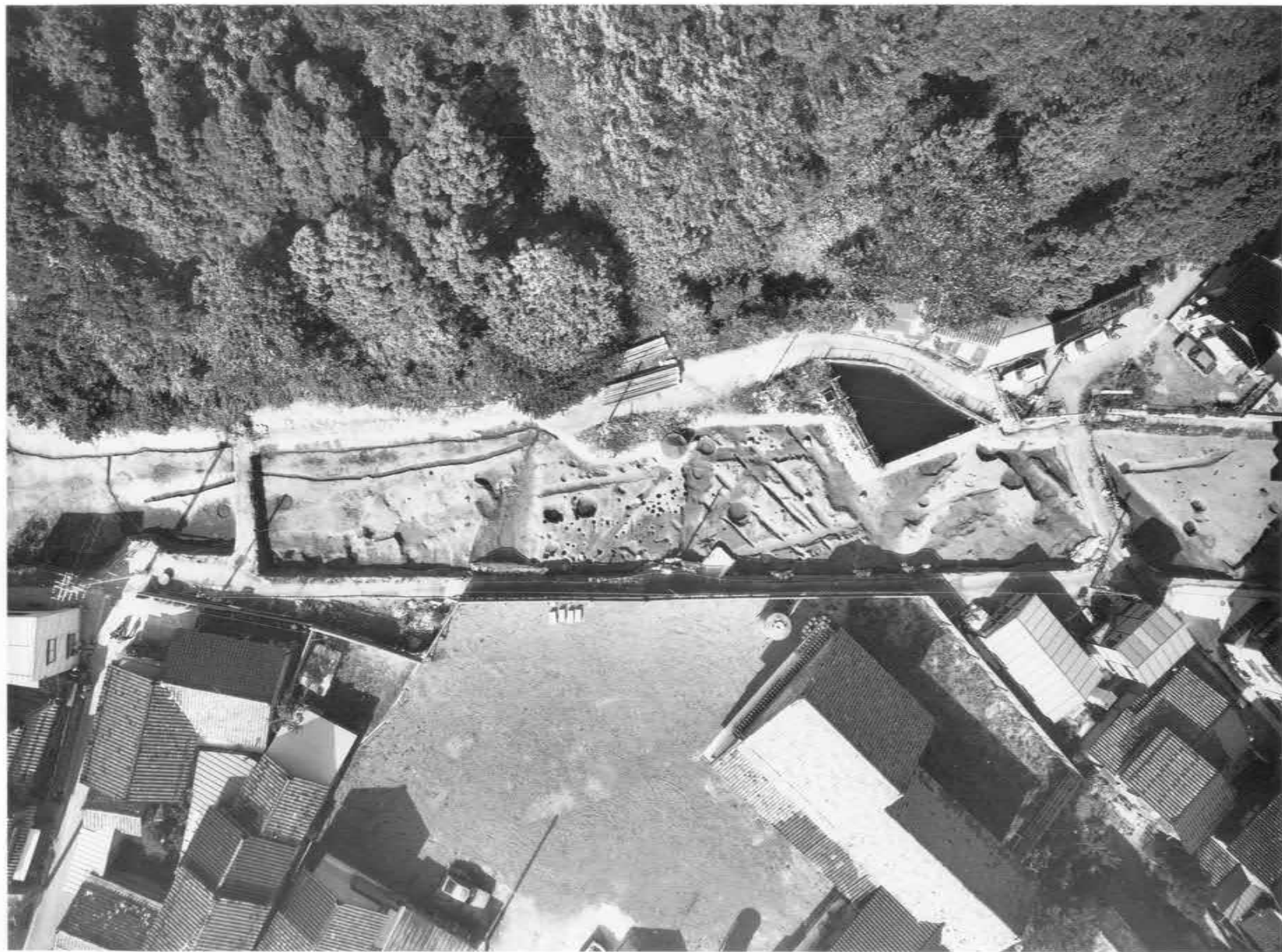
調査区遠景





第1調査区





第2調査区



第3調査区



調査区全景 (左上 第1調査区、左下 第3調査区、右 第2調査区)



第3調査区 (東から)



1号井戸



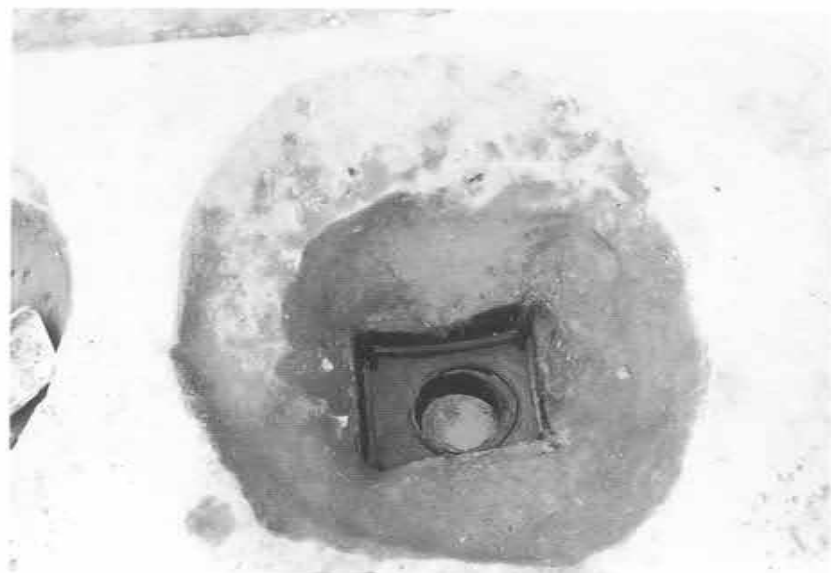
第3調査区建物跡



3号井戸



4号井戸



9号井戸 (南から)



7号井戸



10号井戸



11号井戸



13号井戸



12号井戸



14号井戸



15号井戸



17号井戸



16号井戸



18号・19号・20号井戸



18号·19号·20号井戸



5号井戸·5号土坑



3号土坑



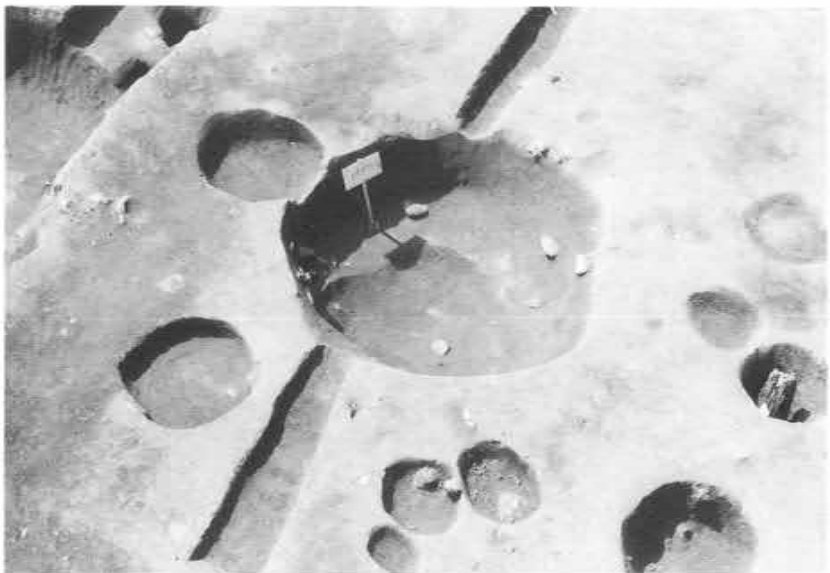
6号土坑



7号土坑



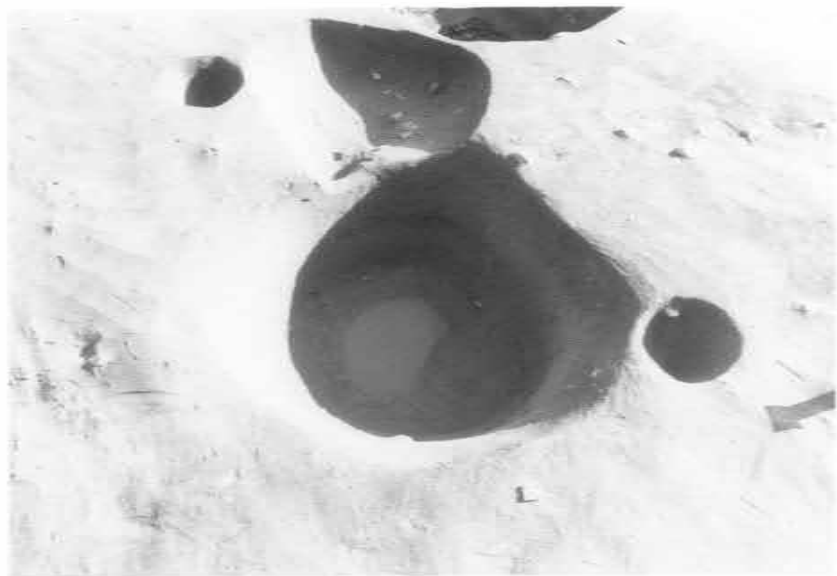
9号土坑



8号土坑



13号土坑



14号土坑



28号土坑



23号土坑



埋甕



埋燻掘り方



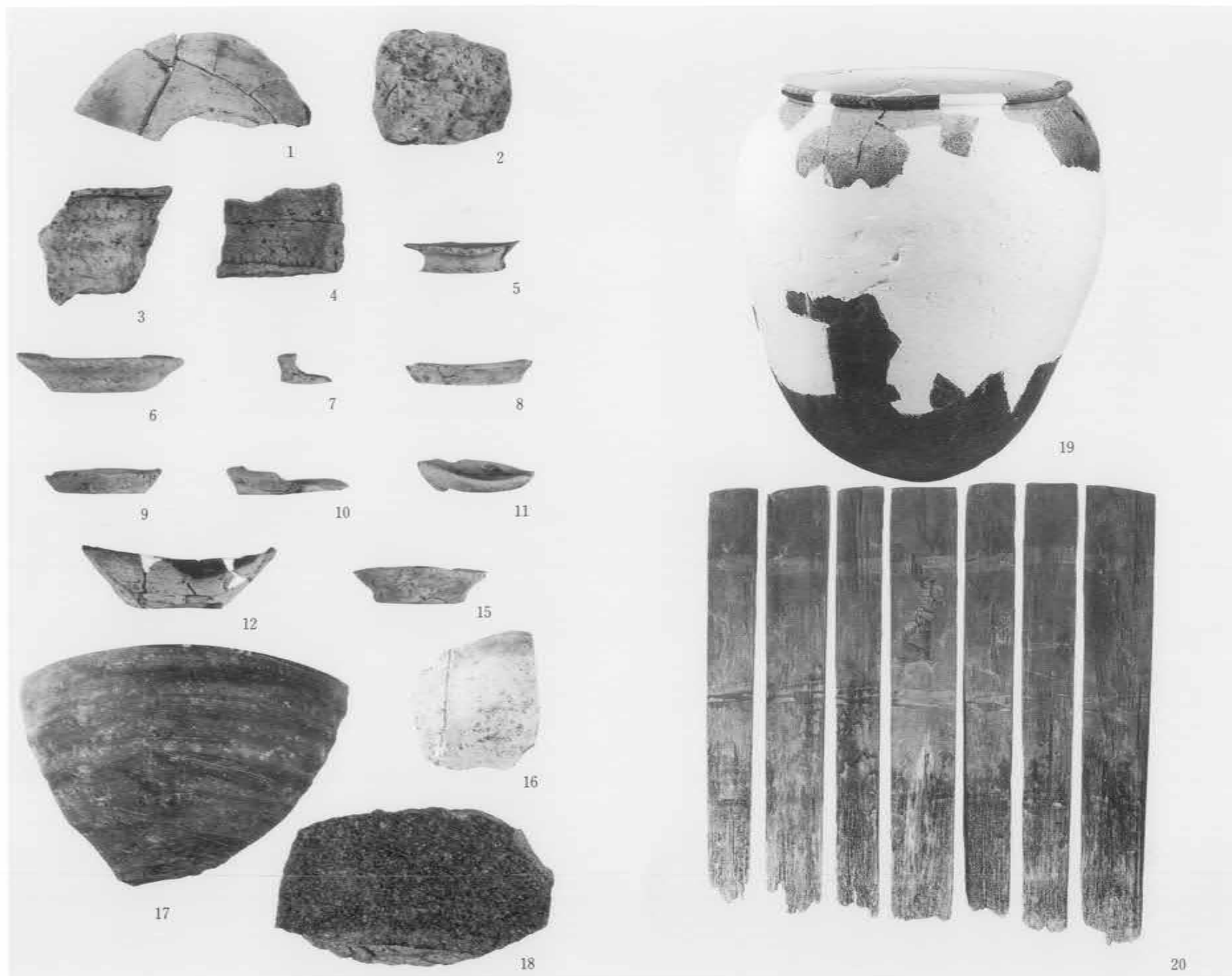
76号溝



76号溝 船形木製品出土状況



92号溝 先端部



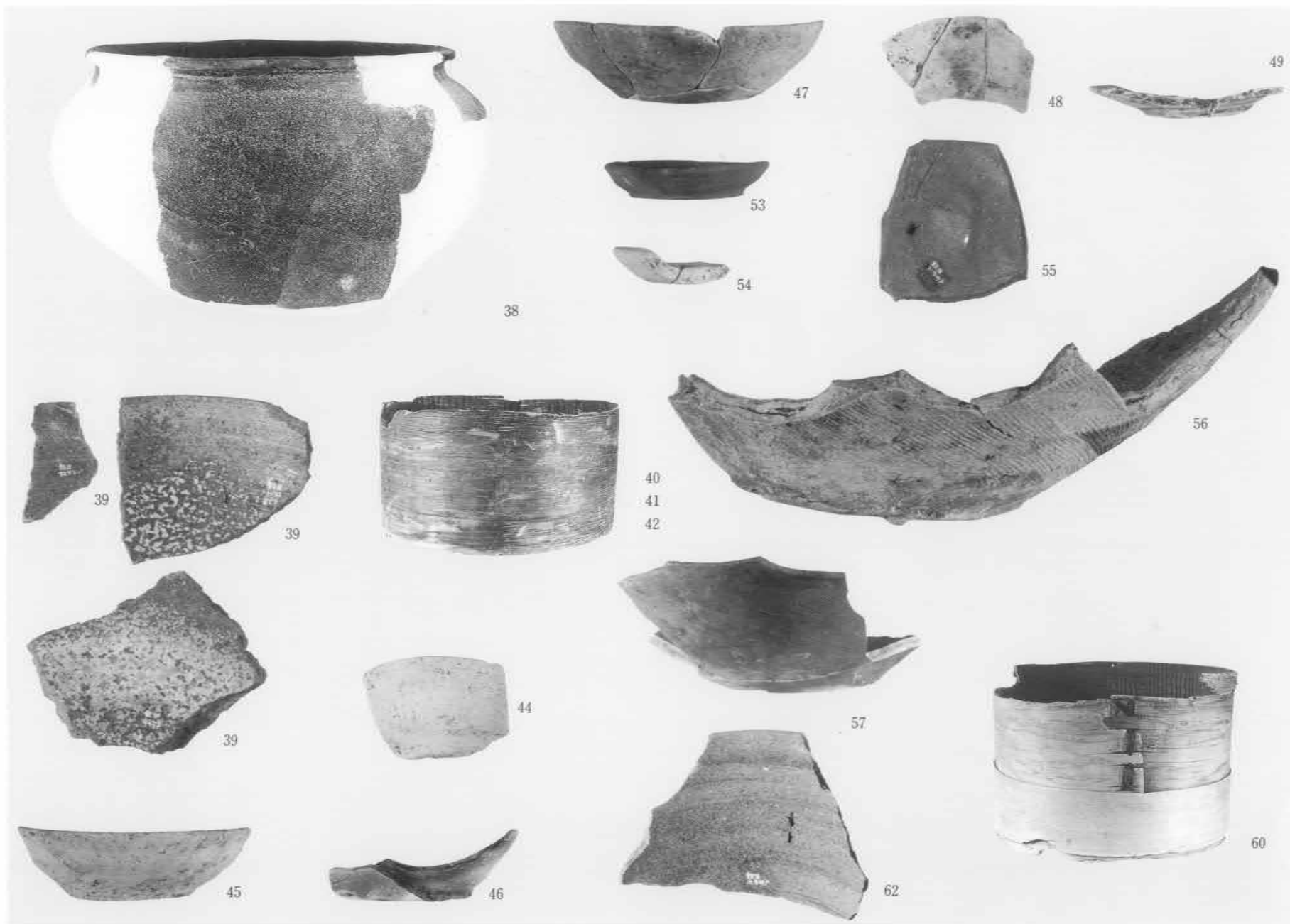


2号井戸出土遺物 (22~29)

4号井戸出土遺物 (32)

3号井戸出土遺物 (30)

7号井戸出土遺物 (35)



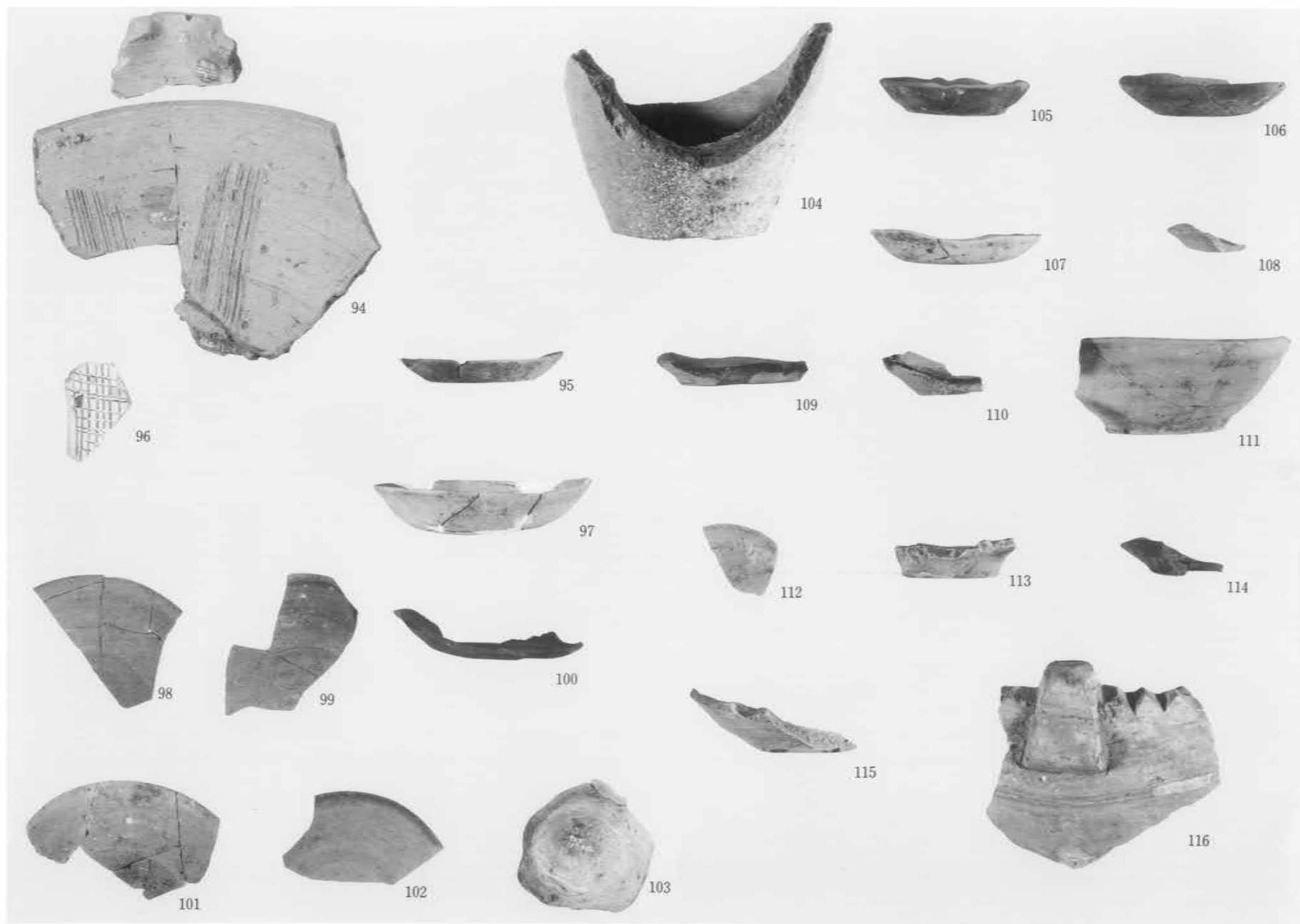
9号井戸出土遺物 (38~42)
11号井戸出土遺物 (53~57)

10号井戸出土遺物 (44~49)
12号井戸出土遺物 (60、62)



13、14号井戸出土遺物 (63)
15号井戸出土遺物 (69、72)

17号井戸出土遺物 (82)
18号井戸出土遺物 (85)
1号土坑出土遺物 (91~93)



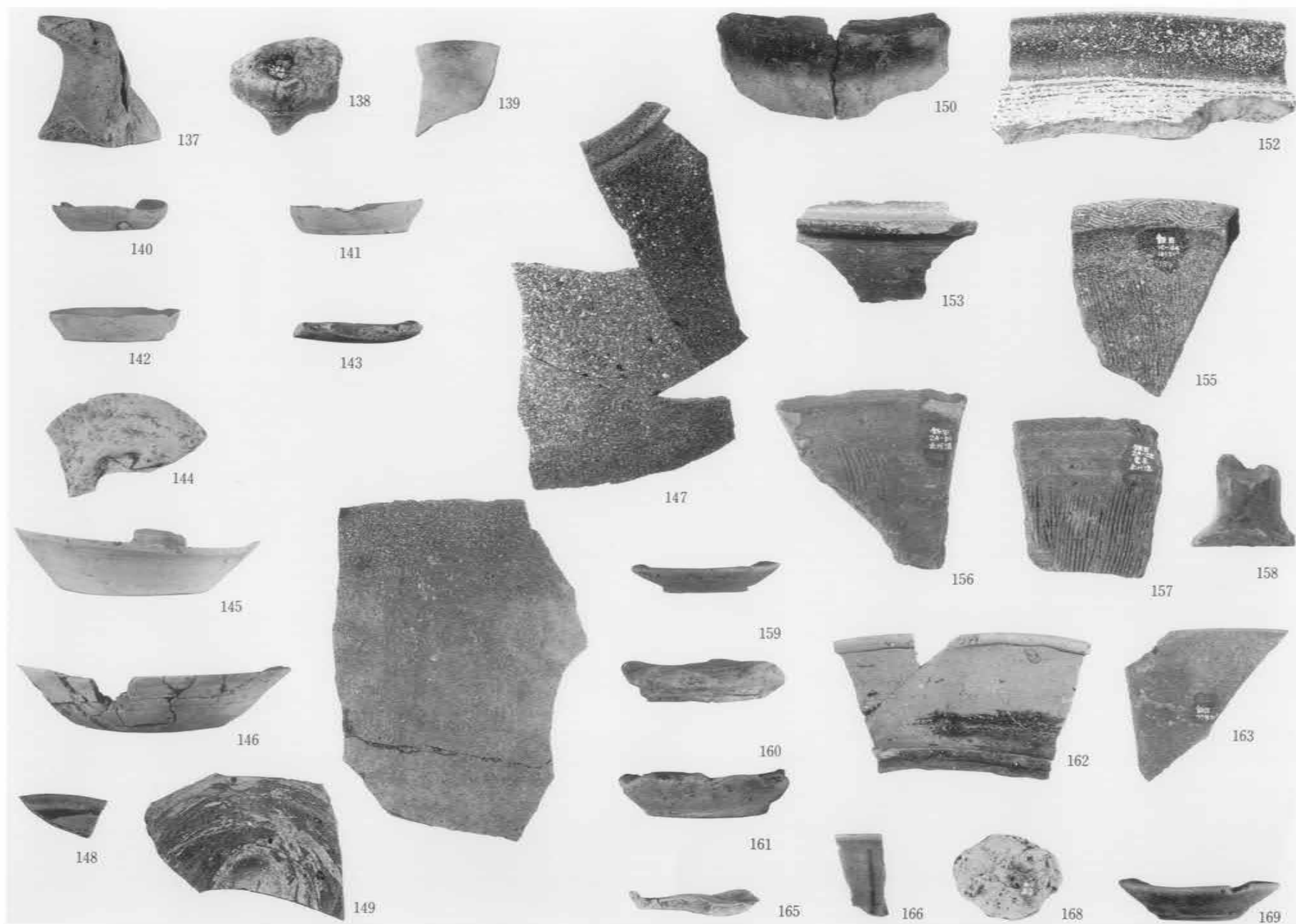
4、5、9、10号土坑出土遗物 (94~103)
12、13、23、28号土坑出土遗物 (105~116)



埋甕 (117)

3、4、5、6、7、8、14、15号溝出土遺物〔1〕(118~130)

8、73、76、78号溝出土遺物〔2〕(131~135)

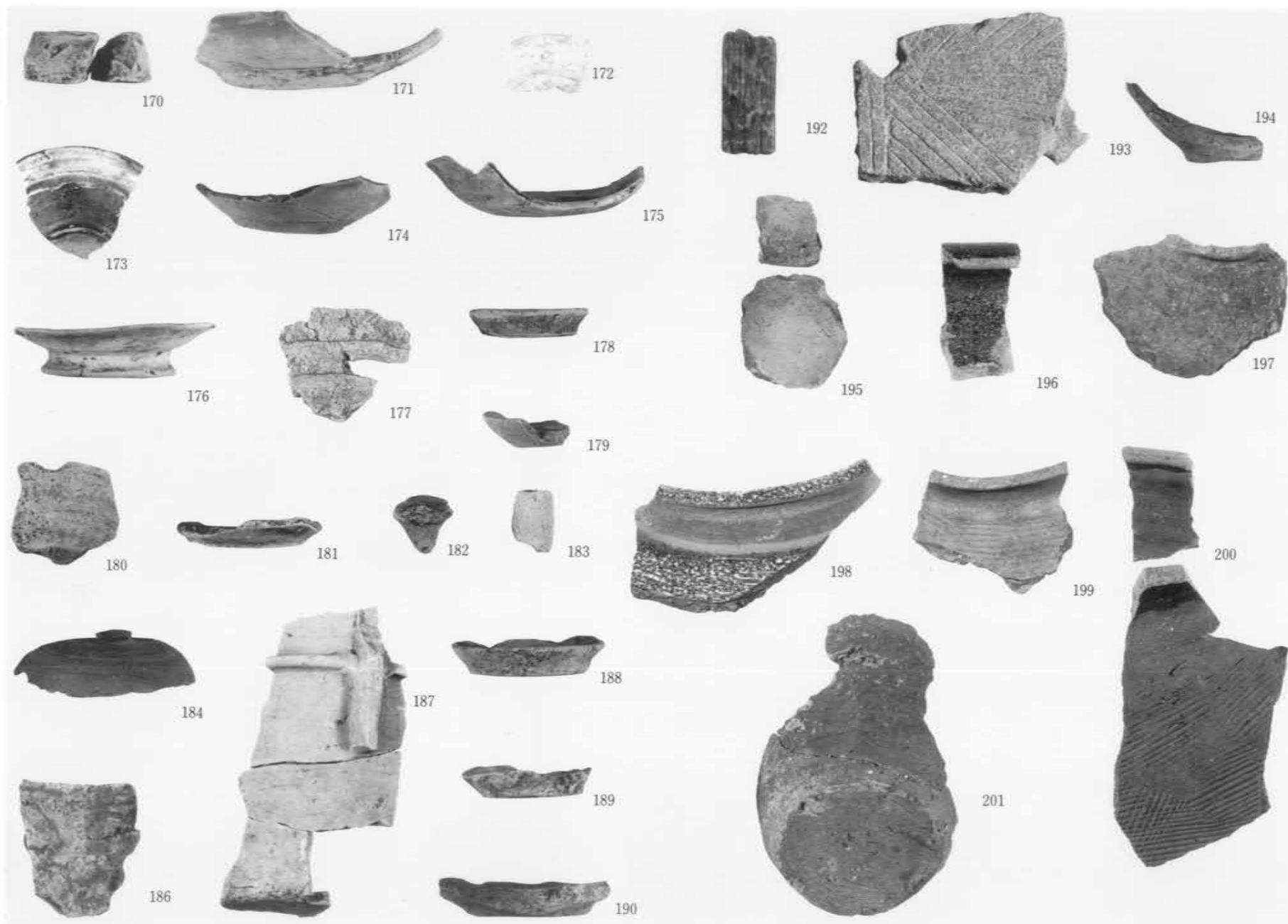


8、73、76、78号沟出土遗物〔2〕(137~139)

101号沟出土遗物〔3〕(140~150)

101号沟出土遗物〔4〕(151~158)

77、82、85、87、88、93、98号沟〔5〕(159~169)



77、82、85、87、88、93、96、98号溝出土遺物〔5〕(170~183)

76、92、93、94号溝出土遺物〔6〕(184~193)

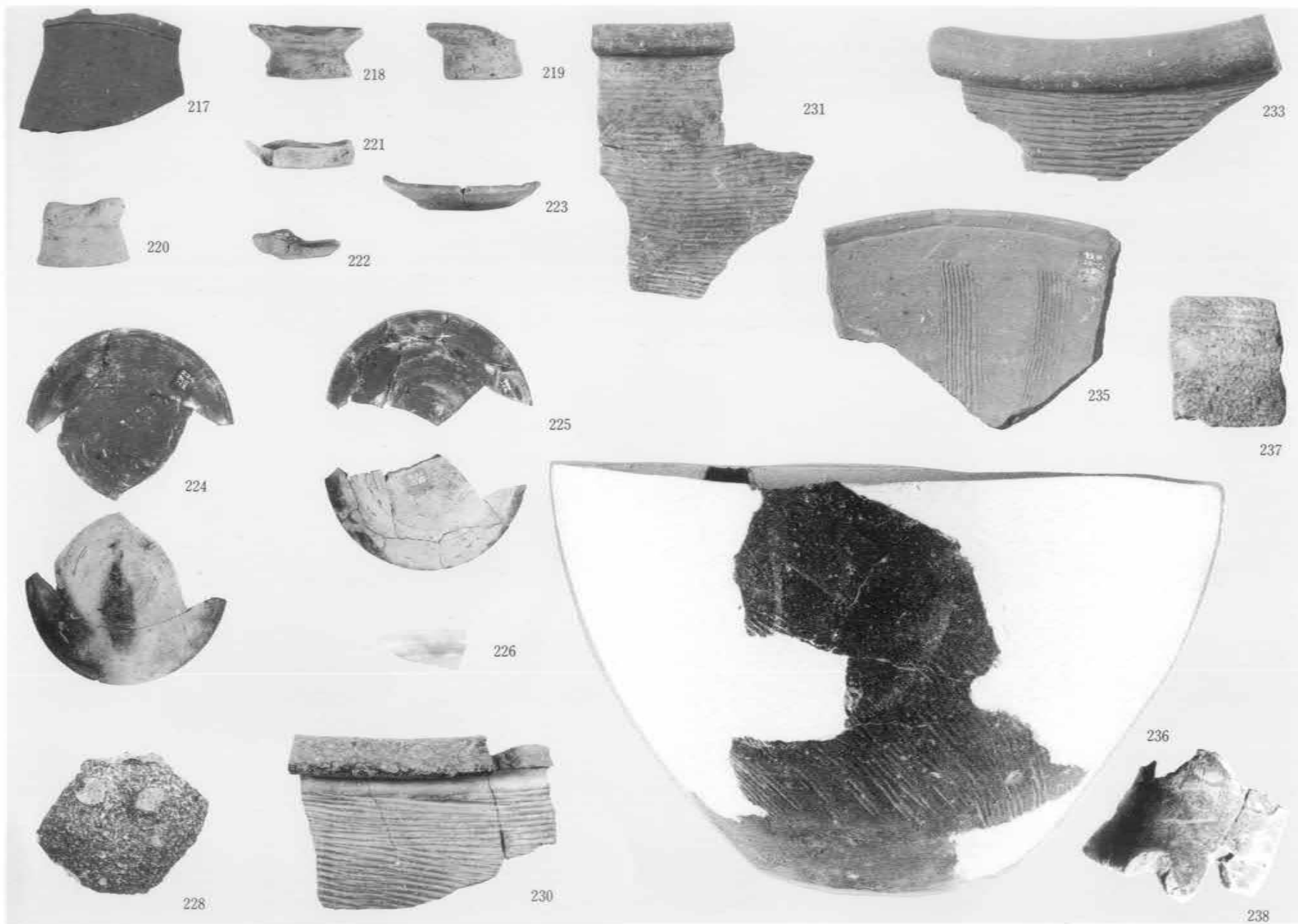
102号溝出土遺物〔7〕(194~201)



102号溝出土遺物〔7〕(202~203)

100、103、104、105、106号溝出土遺物〔8〕(204~212)

包含層出土遺物〔1〕(213~216)



包含層出土遺物〔1〕(217~231)

包含層出土遺物〔2〕(233~236)

包含層出土遺物〔3〕(237、238)



包含層出土遺物〔3〕(239~260)

包含層出土遺物〔4〕(261~264)



包含層出土遺物〔4〕(265~279)

包含層出土遺物〔5〕(280~284)

飯田町遺跡

平成4年3月30日 印刷・発行

編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター

石川県金沢市米泉町4丁目133番地

〒921 電話 (0762) 43-7692 番代

印刷 株式会社 橋本 確文堂

石川県金沢市大手町2-35

©石川県立埋蔵文化財センター 1992